

タイにおける共産主義運動の初期時代 (1930–1936): シャム共産党内におけるベトナム人幹部の役割を 中心として

村嶋英治[†]

The Early Years of Communism in Thailand (1930–1936):
The Role of Vietnamese Cadres within the Siamese Communist Party

Eiji Murashima

It has already been two decades since the end of cold war in South East Asia and the demise of communist movements in Thailand, but many basic questions on Thai communism still remain not to be answered. Particularly, the origin of the Siamese Communist Party, its first, 2nd and 3rd congress date and process, its leadership and organization, etc., are shrouded in mystery. This paper attempts to trace the early development of Thai communist movements, focusing on the role of ethnic Vietnamese members. Consulted primary materials include those kept in Russian State Archive of Socio-Political History (Comintern Archives, RGASPI) and National Archives of Thailand, coupled with Thai and Chinese newspapers and documents. Also, significant data were provided by the author's extensive interviews with former politburo members of the Communist Party of Thailand. The paper consists of three sections: first, the establishment of the Siamese Communist Party (SCP) in 1930; second, the second SCP Congress in September 1932 and the third SCP Congress in July 1934; and third, SCP's relations with the Oversea Bureau of Indochinese Communist Party and the Comintern in 1935 and 1936.

はじめに

1930年4月20日に、ホーチミンはバンコクの国鉄中央駅（フゥアラムポーン駅）に隣接した、海南華僑所有のホテル、順記 (Tunki) の一室に、東北タイのナコンパノム県 Ban Mai 村生れのベトナム人¹でタイ語、ベトナム語、中国語に堪能な Ngô Chính Quốc (呉正国)、1928年8月にホーチミンが設立した在暹ベトナム青年革命同志会ウドン省委員会の5名の執行委員の一人である Trần Van Chấn (陳文振、別名 Tãng: 曾, Chu: 周など)、および中共南洋共産党 (中共南洋区委) 暹羅委員会所属の伍治之を集めてシャム (暹羅)² 共産党創立の会議を開催した。Ngo Chinh Quoc は書記長、Tran Van Chan (Tang) は組織担当、伍治之は宣伝担当に就任した。シャム共産党は、シャムと名乗りながらも、当初はシャム原住民 (即ちエスニック・タイあるいはエスニック・ラーオ) の党員は存在せず、在暹のベトナム人 (越僑) と中国人 (華僑) とを構成メンバーとして創立された。

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授, Professor of Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University

在暹華僑数は、越僑数の少なくとも 100 倍に上る。正に雲泥の差である。しかし、1930 年の創立から 1936 年までは、シャム共産党中に占める越僑の比重は、人口比を遙かにオーバーして、極めて大きなものであった。

1942 年 11 月末-12 月初めにバンコクで開催されたタイ共産党第 1 回党大会において、シャム共産党がタイ共産党に改編されたのちも、二人のベトナム系タイ人が党のトップに就任している。その一人は、第三代目総書記のチャローン・ワンガーム (Charoen Wangam, 1925 生-1979 没, 在任 1961-1979 年)³ であり、彼は東北タイのウボン県生れのベトナム系タイ人であった。もう一人は、チャローン病死後、後を継いだ最後の総書記トン・チェームシー (Thong Chaemsri, ベトナム名は、Võ Thung) であり、彼はベトナム出身の革命家の両親 (父は Võ Tùng: 武松=Sáu: 六, 母はĐặng Quỳnh Anh: 鄧瓊英。母はĐặng Thúc Húa: 鄧叔許の姪) から中部タイのピチット県 Ban Dong 村 (現在の地名は、Mu 8 Tambol Pa-makhap Ampoe Muang Phichit, 1930 年当時は Ampoe Thaluang) で生まれた⁴。

このように戦後のタイ共産党時代においてもベトナム系タイ人が、党幹部として存在したことは事実である。しかし、ベトナム出身もしくはシャム生れのベトナム人が、共産党の活動に占めた比重の大きさは、1930 年代のシャム共産党時代とは比較にならないほど小さい。シャム共産党時代の、1930 年の創立時から 1936 年末に至る時期においては、ベトナム人組織の党活動上の役割は、党員数、組織力、国外の党との連絡関係などから見て、華僑組織のそれらと少なくとも同等、ある場合には凌駕しているように思われる。

本稿では、従来殆ど知られていない初期シャム共産党の歴史を、最近利用可能になった一次資料に基づいて極力詳細に明らかにしながら、当時におけるベトナム人組織の活発な活動の実態に焦点を当てたい。

シャム共産党におけるベトナム人党員の活動については、既に古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史—革命中のエスニシティ』(大月書店, 1991 年 2 月刊) 中の「シャム在住ベトナム人共産主義者」の章 (同書 pp. 181-200) に優れた研究があり、栗原浩英『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』(東京大学出版会, 2005 年 4 月刊) も随所で新資料に基づきシャム共産党に言及している。

ところで、Christopher E. Goscha. *Thailand and the Southeast Asian Networks of the Vietnamese Revolution, 1885-1954*, Curzon Press, 1999 という書物も刊行されており、タイトルからは本稿の先行研究のように見える。但し、同書は、本稿が明らかにする諸事実については、殆ど何の言及もしていないだけでなく、筆者が判るタイ国についての記述部分から見た限りでは、事実の間違いが少々多すぎるように思われる。ベトナム研究者は同書にどのような評価を下しているのだろうか。

先行研究を踏まえつつ、本稿は、先行研究の執筆時には公開されていなかったため、もしくはタイ語であるため、あるいはその外の理由により、先行研究が十分には利用していない資料を主に用いる。本稿で用いる資料は、モスクワのロシア国立社会政治史文書館 (RGASPI, Russian State Archive of Socio-Political History)⁵、バンコクのタイ国立公文書館 (NAT) 保存文書、特に 2006 年初に公開されたタイ外務省関係第二次公開文書 (NAT (2) Ko. To.), 1930 年代にバンコクで出版された中国語、タイ語、英語新聞の記事、および著者等が行ったタイ共産党幹部等とのインタビュー記録などである。なお、従来

利用されていない一次資料は、その貴重さに鑑み省略せずに全文を掲げることに努めたため、本稿は期せずして長大なものとなってしまった。

本稿は、次の6章からなる。即ち、第I章、シャム共産党の創立(1930年)、第II章、ベトナム人共産主義者の逮捕・追放(1930年)、第III章、第二回代表大会とNgo Chinh Quoc(1932年)、第IV章、第三回代表大会とベトナム人幹部の再進出(1934年)、第V章、シャム共産党とインドシナ共産党海外指導部およびコミンテルン(1935年)、第VI章、コミンテルン特派員Ly Phuc Minhの来暹とベトナム人組織の分裂(1936年)である。

I、シャム共産党の創立(1930年)

在暹ベトナム人(越僑)の政治活動は、1925年からベトナム青年革命同志会の支部および大衆組織(親愛会など)の組織化が、中部タイのPhichit県Ban Dong村、東北タイのウドン、サコンナコン、ナコンパノムなどで開始されて以来、急速に活発化した。1927年には、シャムで雑誌(当初は「同声」、翌年「親愛」と改称)を発刊し、同時にウドンなどに学校を建設した。これらによって、ベトナムからシャムに來た青年たちやシャム生れのベトナム人を革命家として教育育成し、組織化を行った。その様子は、1913年から1953年まで40年間タイで革命活動に従事したDang Quynh Anhの回想を記した、*Son Tung, Con Người và Con Đường, Nhà Xuất Bản Văn Hóa và Thông Tin, Hà Nội, 1993, 264 p.*(Son Tung『人と道』文化通信出版社、ハノイ、1993年)に詳しく描かれている。1928年7月から29年11月の間には、ホーチミンが在暹して指導したこともよく知られている⁶。1929年8月22日には、駐暹フランス公使館は、在暹ベトナム人がウドン県のNong Bua村(現在ウドン国鉄駅の場所)に開いた学校がベトナム青年革命同志会の活動の拠点になっているとして取締を求めた。この時、フランス側が入手してシャム外務省に提出したベトナム語の開校記念誌(在暹ベトナム青年革命同志会編)をシャム政府側でタイ語訳しているが、ベトナム青年革命同志会のタイ語訳はKhana Yuan Kabot(「ベトナム革命会」の意)となっている⁷。ベトナムの青年革命同志会は、1930年2月3日にベトナム共産党に改編されたので、連鎖反应的に在暹のベトナム青年革命同志会組織(ウドン省委)も、共産党に組織変更する必要が生じたと考えられる。

一方、シャムにおける華僑の組織的な共産主義運動は、1927年にシンガポールの南洋共産党(中共南洋区委)の党員である「鄧」がシャムに來て南洋共産党暹羅特別委員会を立ち上げたことによって始まる。そのメンバーは、1927年4月の蒋介石反共クーデターでシャムに逃避してきた海南人の中国共産党員であったと思われる。1928年には、シンガポールにある南洋共産党臨時委員会は団部書記をシャムに派遣して指導した。この指導員は、「鄧」を暹羅特別委員会書記に指名したが、同委員会執行委員たちは「鄧」書記を認めなかった。シャムの党組織は、南洋共産党臨時委員会の指導を受ける委員会と、「鄧」を中心にした中共広東省委員会の指導を受ける委員会に分裂し相互に抗争した。また、これとは別に潮州から逃避してきた党員グループの「血花社」が存在していた。1929年初めに広東省委は、三名をシャムに派遣して二つの海南人の委員会を統一し南洋共産党臨時委員会の指導に帰すことを決定した⁸。

中共広東省委員会と南洋共産党臨時委員会との関係については、1929年5月8日に、中共広東省委

が党中央に対して、南洋共産党臨委は広東省委の指揮に帰するという決定を、党中央が南洋特委に通知するように求めている⁹ことから、南洋共産党臨時委員会は中共広東省委に属する組織であることが判る。それ故、1929年初に広東省委からシャムに派遣された三名は、暹羅特別委員会を広東省委に直属させるのではなく、広東省委下の南洋共産党臨委に属するように指導したことになる。

1929年の時点で暹羅特別委員会に属する党員は200余人、赤色工会の組織も存在した。同委員会が指導した最初の労働者ストライキである製材所ストは失敗した¹⁰。

このストライキとは、1929年10月9日に火鋸工会罷工委員会を通じてバンコクのワット・サケート寺近くの大規模製材所である「林公記火鋸」（海南人林鴻高の所有）で起したストライキ¹¹のことである。このストライキの後、潮州人の「血花社」グループは暹羅特別委員会が共産党であることを認識し、同委員会の指導下に入った¹²。1929年11月7日には、ロシア十月革命（1917年11月7日）を記念する中国語、タイ語、英語のピラをバンコク市内で撒布した¹³。ピラには「南洋共産党暹羅特別委員会」と明記されており、これがバンコク社会において、共産党が公然と姿を現した最初の事件である。続いて、同年12月11日には同特別委員会名で広州コミュン2周年を記念したピラ「廣州大暴動二週年紀念告暹羅勞苦群集書」を撒布した。共産党の活動の活発化で、シャム政府は警戒を強めたが、南洋共産党暹羅特別委員会は、不注意にも、1929年12月22日に共産党の支部書記会議と製材所労働者の会合を進徳学校の屋上で同時に開催し、製材所労働者側から漏れた情報により22名が逮捕された¹⁴。共産党組織が大打撃を受けたこの時期の、1930年2月に、シンガポールの南洋共産党臨時委員会が指導監督員を派遣してきた。3月に拡大会議が招集された。この頃南洋共産党暹羅特別委員会は南洋共産党暹羅委員会と改名された¹⁵。

暹羅委員会が1930年2月20日付けで作成した長文の中国語文書「シャムの政治経済分析と党活動方針（案）」を、シャムの警察は1930年5月に共産党の手入れにより、少なくとも二カ所¹⁶で押収している。同文書の冒頭には、「1930年3月20日特別拡大会議承認」と記入され、末尾には「南洋共産党第三回代表大会が開催される以前は、本文書は未だ草案である」と記されている。これから、次のことが推測される。即ち、前述の1930年2月に南洋共産党臨時委員会がバンコクに派遣した指導監督員のもとで、南洋共産党第三回代表大会（即ち、マラヤ共産党創立大会）に提出予定の草案が作成された。草案が作成された2月20日かそれ以前に、暹羅特別委員会は暹羅委員会と改名された。30年3月20日に暹羅委員会は特別拡大会議を招集し同草案を承認した。

1930年5月1日のメーデーにバンコクで撒布された中国語ピラを警察がタイ語訳したものが存在するが、署名のタイ語を和訳すれば「共産暹羅委員会」となる。これは上述の「暹羅委員会」を指すものと推測される。

1930年5月コミンテルン東方局の指導の下に、南洋共産党臨時委員会は第三回代表大会を開催した。大会は南洋共産党臨時委員会をマラヤ共産党中央委員会と改めた。この代表大会には、南洋共産党暹羅委員会からは二名が参加した。その内の一人は逮捕され、一人はシャムに戻った¹⁷。

ところで、文末脚注8に引用した『報告』（RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53-78）は、シャム共産党を創立した第一回全国代表大会に全く言及していない。『報告』の中には、1932年7月（ママ）

に「第二次全暹代会」(第二回全国代表大会), 1934年6月¹⁸に「第三次全国代会」を開催したことが明記されているにも拘らず, 第一回代表大会は, 表現さえも見いだせない。第二回, 第三回が開催された以上は, 第一回が存在したことは間違いないはずであるが。加えて, 『報告』は1930年5月に南洋共産党第三回代表大会(マラヤ共産党創立大会)が開催される以前に, バンコクで開催されたシャム共産党の創立会議についても何ら言及していない。しかし下述するI-1からI-4の四資料では, 南洋共産党第三回代表大会開催前の1930年4月にバンコク駅頭のホテルの一室でシャム共産党の創立会議が開催されたことで一致している。四資料のソースは, 少なくとも2系統(創立大会に参加したベトナム人側と華僑代表伍治之側)から成り, 両者がともに事実誤認もしくは虚偽の記載をしたとは考え難い。以下, シャム共産党第一回代表大会と考えられる, 1930年4月20日の同党創立会議について見てみよう。

東北タイを中心に活動していたベトナム人の在暹ベトナム青年革命同志会ウドン省委員会組織と, バンコクを中心とした華僑の中共南洋共産党暹羅委員会組織との合併統合によって, 新しく創立されたシャム共産党の創立会議開催の経緯や決定を知ることができる資料としては, 次の四つが主なものである。すなわち, ①シャム共産党創立時にベトナム青年革命同志会ウドン省委員会の執行委員であり, 同省委をシャム共産党下の地方組織に転換する会議において, ホーチミンやシャム共産党組織担当責任者に任じられた Tran Van Chan (Tang) から説明を受けた Hoàng Văn Hoan (黄文歆, 別号 Nghĩa: 義, Dương: 楊など) の回想録, ②南洋共産党暹羅委員会を代表してシャム共産党創立会議に参加し, 同党宣伝責任者に任じられた伍治之の回想録, ③最後のタイ共産党総書記であるトン・チェームシー (Thong Chaemsri) のインタビュー記録¹⁹, ④古参タイ共産党員のチャオ・ポンピット (Chao Phongphichit, 中国名: 劉源泓) が, “Luk Chin Rak Chat” (「愛国華裔」の意) のタイトルで, タイ語週刊誌 “Matichon Sut Saphda” に2008年9月19日号から一年余に亘って連載中の華人共産党の歴史²⁰の中で, 伍治之およびトン・チェームシーに直接会って得た情報であるとして記していること, などである。

I-1, Hoang Van Hoan の回想

Hoang Van Hoan はシャムのベトナム青年革命同志会支部がシャム共産党に再編される経緯, 過程を次のように回想している²¹。

在暹ベトナム青年革命同志会の組織は, 1925年に(広州の)ホーチミンが人 [Hò Tùng Mậu: 胡松茂, Ích: 益のこと一筆者] を派遣して組織させたものである²²が (Hoang Van Hoan 英文回想録, p.46), 1928年8月に来暹したホーチミンは調査ののち, 在暹ベトナム青年革命同志会の指導の統一のためにウドン省委員会設立を提案した。成立したウドン省委員会の執行委員には, Đặng Thái Thuyên (鄧太詮, Canh Tân: 更新), Võ Văn Kiêu (武文橋, Đình: 廷), Trần Văn Chấn (陳文振, Tăng: 曾, Chu: 周), Nguyễn Văn Dụ (阮文裕, Hải: 海), Hoàng Văn Hoan (黄文歆) の5名が就任した。Võ Tùng (武松, Sáu: 六) と Lê Mạnh Trinh (黎孟楨, Tú Chính: 秀正, Tiên: 進など) は, 中部タイのピットに残って指導し, ウドン省委の執行委員にはならなかった (同上書, p. 36)。

1930年3月末, 再度来暹しバンコクに着いたホーチミンは, バンコクで華僑の共産党人士と意見交換をした後, 東北タイのウドンを訪れ, ベトナム青年革命同志会のウドン省委員会執行委員の Vo Van Kieu (Dinh), Tran Van Chan (Tang), Nguyen Van Du (Hai), Hoang Van Hoan (Doung) に説明した。

なお、省委員会書記の Dang Thai Thuyen は、この少し前にバンコクで逮捕されたので出席できなかった²³。この席でホーチミンは、インドシナ共産組織と安南共産組織の分裂問題は、1930年陽暦2月3日に両者代表が香港で会合して両者合併によるベトナム共産党結成を決めたので解決したと説明した。ホーチミンは、コミンテルンの原則によれば、共産主義者は居住国のプロレタリア革命に参加すべきであるので、シャムに住むベトナム人共産主義者は、国際プロレタリア革命の一環としてシャムのプロレタリア革命に参加すべきであると説き、ベトナム青年革命同志会ウドン省委が、青年革命同志会の優秀なメンバーをシャム共産党に入党させるように求めた。ウドン省委員会の執行委員は、既にベトナムには共産党が成立したことを知り、従来から社会主義革命を宣伝してきたベトナム青年革命同志会は、コミンテルンのベテラン革命家 Nguen Ai Quoc の指導の下に共産党に加わることは当然だと考えた（同上書、pp. 52-53）。

この数日後、青年革命同志会ウドン省委は、同会の主要メンバーを招集した。この席で、ホーチミンは、数日前にウドン省委の執行委員に話したことと同一趣旨を繰り返し、次のように語った。即ち、シャムに住むベトナム人革命家はシャムの革命のために働くべきである。シャムは半植民地封建国家なので、直ちに社会主義革命を行うことはできない、まずプロレタリアートの指導の下に新ブルジョア民主革命を行い、新民主主義革命の後、資本主義段階を経ることなく、世界の革命勢力の支援を得て社会主義革命に移行すべきである、と。出席者からは、シャム共産党に参加すれば、ベトナムの革命に貢献できなくなるので越僑の支持を失うのではないかという懸念が表明された²⁴が、ホーチミンは一つ一つ丁寧に説明した。続いてホーチミンは、ウドン省委執行委員たちと組織をどうするかについて協議した。ホーチミンは、青年革命同志会ウドン省委員会をシャムのベトナム人共産主義者の省委員会に変更することを提案した。ウドン省委書記である Dang Thai Thuyen は逮捕されて（ママ）²⁵ 不在であったので、Vo Van Kieu (Dinh) が新しい省委書記に就任した。ホーチミンは、ウドン省委にラオスの青年革命同志会と連絡して、同会をラオスの共産党組織²⁶に変更するように指示した（同上書、pp. 54-55）。

この後、1930年4月にホーチミンは、在暹ベトナム人共産主義者の代表として Tran Van Chan (Tang) を連れてウドンからバンコクに行き、在暹華僑共産主義者とシャム共産党創立について会議を開いた。コミンテルン代表のホーチミンの主宰の下に、同年4月20日にシャム共産党が創立された。シャム共産党臨時中央執行委員会（略称、暹羅委員会）は、Tang（ウボン省委執行委員）とシャム生れの Ngo Chinh Quoc (Ngô Chính Quốc: 呉正国) を執行委員に選出した。この後、ホーチミンはマラヤに行き、マラヤ共産党を組織した（同上書、p. 55）。

ホーチミンがシャムを離れた後に、Tang がウドンを訪れ、①シャム共産党の創立と、②決定されたシャム共産党内の越僑党組織の任務について報告した。青年革命同志会のメンバーに意見を言わせるために内々の会合が開かれた。2-3人のメンバーはシャムの革命のために活動することになれば越僑の支持を失うこと、およびシャム政府の弾圧を招くことを理由に、シャム共産党への合同に反対した。それに対して省委は、シャム人であれ、ベトナム人であれ革命家は弾圧される。しかし、抑圧搾取されている人民は常に共産主義を好むので、人民を革命の道に導くことができると説明した。これ以外のメンバーは賛成した。その後、省委はシャム共産党に入党させる優秀なメンバー数十人のリストを作成した

(同上書, p. 56)。

1930年10月(ママ)にウドン省委は越僑のシャム共産党員の大会をウドン近くで開催し活動方針を決めた。この大会にはシャム共産党臨時中央執行委員会(暹羅委員会)を代表してUa(阿我)が出席して、シャム共産党の創立の経緯を説明し、ウドン省委がシャム共産党の一部であり、シャム東北部の活動を指導する任務をもつことを公式に発表した。この大会には、ウドン、サコンナコン、ナコンパノムから党員が参加した。しかし、ピチットからは誰も参加できなかった。その理由は、Vo Tung と Dang Thai Thuyen を尾行したスパイが失踪[正しくは、殺害された]したことを理由に、ピチットの同志の殆どが[1930年7月に]逮捕され、Le Manh Trinh を含む11名が香港(ママ)[正しくは汕頭]に国外追放されたからである。この大会で確認された新方針の実施のために、ウドン省委は在暹越僑の活動に関する問題を討議した。新原則が定められた後は、活動に熱が入った。青年革命同志会の殆どのメンバーおよび合作会の青年活動家の多くがシャム共産党に入党を認められた。この後、シャムを理解するためにタイ語学習が熱心に行われるようになり、Bich: 碧(Thien: 天)²⁷やHuong: 郷(Xom: 宋)はシャム人の学校に入学してタイ語を学習した(同上書, pp. 56-57)。

シャム共産党における共産主義青年団(共青团)の最初のもは、ウドンで作られた。そののち、シャムの他の地に広まった(同上書, p. 57)。

I—2, トン・チェームシーの証言

上述のようにHoang Van Hoanの英文回想録p. 55は、1930年4月20日にシャム共産党が創立され、臨時中央執行委員会の執行委員としてシャム生れのベトナム人Ngo Chinh Quoc(呉正国)とウドン省委のTran Van Chan(曾: Tang)の2名のベトナム人が選出されたことを述べている。Hoang Van Hoanの中国語回想録のこの部分の記述は、「1930年4月20日、胡主席作共産国際代表在曼谷主持召開了一次會議、宣布成立暹羅共産党、選挙了臨時中央執行委員会(簡稱暹委)。烏隆省委委員阿曾和在暹羅出生的越南人呉正国被選為委員」(同書, p. 51)である。このようにHoang Van Hoanはシャム共産党創立会議に出席した華僑の代表(伍治之)については何ら言及していない。逆に、華僑代表であった伍治之は出版された、I—3に後述する回想録では、越僑代表(Ngo Chinh QuocとTran Van Chan)には全く言及していない。国際共産主義運動の原則によるものであろうか。

トン・チェームシーは2004年4月22日のインタビューでシャム共産党の創立について、次のように語っている。

「シャム共産党の歴史については、ある程度知られてはいるが、曖昧な部分が多い。この機会に、私の知る限りのことを話して置きたい。シャム共産党は、コミンテルン代表のホーチミンが、シャムのベトナム人共産主義者および中国人共産主義者の各代表を探し出して連絡し、メンバーを選抜して合同させたものであり、1930年4月20日に創立された。集会した場所は、バンコクのフアラムポーン国鉄駅前のTun Ki²⁸[漢字表記では「順記」]ホテルである。ホーチミンが任命したシャム共産党の初代書記長は、Ly: 李、実名はNgo Chinh Quocで、ナコンパノム県のBan Mai村[現在の公式村名は、Ban Na Chok]の出身である。この人物をホーチミンが書記長に任じた理由は、中国語、タイ語、ベトナム語の3語を使えたからである。彼はその後一年余にして中国で活動中に国民党に逮捕され行方不明になっ

た。そのため、彼の Ban Mai 村の母親は気が狂った。この外に創立の集会に参加した者は、Tang (曾) 即ち、Tran van Chan と在タイ中国人同志の老伍、即ち伍治之である²⁹。

上記下線部は公刊インタビュー中にはなく、未刊行であるが、彼のインタビューテープをそのまま起した、より詳細なインタビュー記録中に存在する。但し、Ngo Chinh Quoc がシャム共産党創立1年後に中国で活動中に国民党に逮捕されて行方不明になったという部分は、インタビュー時点におけるトンの情報不足による誤解か、歪曲である。III—5 で後述するように Ngo Chinh Quoc は1933年1月末にバンコクで逮捕され全面自白したのち、仏印に強制送還された。彼は、仏印当局のスパイとなってバンコクに戻ってきたが、最終的に中国に立ち去った。

I—3, 伍治之の回想

創立者会議参加者の一人、伍治之(1905生-2000没)は、1985年9月18日に自筆で次のように来暹の経緯、ホーチミンの訪問を回想している。

「1927年12月広州起義が失敗し、広東省全省の白色テロルは一層厳しさを加え、伍治之と妻の蔡楚吟[1910-1969]³⁰は敵の指名手配を受け、党組織との関係も既に中断していた。その結果、やむを得ず、1928年1月初めに商人夫婦に仮装して幼子[本書の編者蔡誠一筆者]を連れて、外航船でシャムのバンコクに移動した³¹。乗船できたのは、親戚の援助による。バンコクでは、チャローンクルン通りの廖時珍店に身を寄せた。廖時珍店の主人の廖行軒とその母から温かいもてなしを受けた。夫婦は、一方では、朱叟林[1900-1974]³²と「マルクス・レーニン研究社」を発足させて積極的に党組織を探し求め、また一方ではシーラーチャー、バーンプラーソイ(チョンブリー)、コーラートで華僑学校の教師に招かれ、華僑学生に革命教育を行った。1929年7月に、中共南洋区委巡視員傅大慶[1900 江西省生-1944]がシンガポールからバンコクを訪れ、党組織を通じて、伍治之、蔡楚吟と連絡を取り、彼らが党組織との関係を回復することを助けた³³。傅大慶は、彼らに中共暹羅特委に属する反帝大同盟党支部の工作の仕事を割り当てた。傅大慶はソ連留学生であり、ロシア語に精通していた。周恩来の二回の東征時には、傅大慶はソ連軍事顧問の通訳を担当して周に同行したので、汕頭で共産党の活動をしていた伍治之、蔡楚吟と面識ができた。大革命の失敗後、傅大慶は香港で中共広東省委の仕事をしていたことがあったので、伍治之、蔡楚吟が党組織との関係を失った原因をよく知っていたのである。広東省委は傅大慶を中共南洋区委の工作に派遣した。

蔡楚吟はバンコク三聘街付近の潮州人商家に移動して家庭教師になり、伍治之と一緒に一個の党支部で活動した。

当時、中共暹羅特委の指導方式は、中国国内と同様、左派李立三のやり方そのままであった。革命の記念日毎にピラを撒きスローガンを貼り出し、自らを暴露する有様であった。内部の秘密会議も大人数で行い、警戒心に乏しく、重大な思想的麻痺に陥っていた。1929年12月22日には、特委負責人林務農³⁴以下各支部書記および交通員の合計22名[朱叟林を含む一筆者]が、バンコクの進徳学校屋上で党の秘密会議の最中に、暹羅政府の特高警察に一網打尽にされ、15年の刑を受けた。

1930年4月初めのある日、伍治之、蔡楚吟の家を客人が訪れた。手にはドリアン、マンゴー、葉に包んだ餅米の中華チマキを持ち、普通話を話した。老宋(lao song)と名乗り、中共南洋区委が暗号を使っ

て書いた紹介状を伍治之に渡した。彼は仕事の話はせず、まずドリ안의殻を割って食べるように勧めた。楚吟は大急ぎで鼻をつまんで、「食べられない！ 食べられない！」と叫んだ。老宋は、「他人の国で革命をするのに、その国の人達が最も好むものを食べないようではダメだ」と言った。老宋がまず食べ、続いて伍治之が食べた。楚吟はすこし躊躇していたが、一口だけ一生懸命に食べ、それ以上は食べようとはしなかった。しかし、マンガーと中華チマキには十分に興味を示し腹一杯食べた。

夕方、老宋は伍治之と蔡楚吟を連れて三角路の野外娯楽場にダンスを見に行った。三人は同じテーブルに座し、老宋はビール二瓶を注文し、コップ3個を持って来させた。伍治之はビールを飲んで苦いと言ひ、蔡楚吟は一口飲んだだけで、それ以上は飲もうとはしなかった。彼ら二人にとって、この種の場所は初めてであり、視野見聞を広げる場所ではあった。別れる時、老宋は伍治之に、面談したいことがあると言ひ、翌日、紅橋〔黄橋 Saphan Luang の誤記と思われる〕のフアラムボン鉄道ホテルの某部屋を訪ねることを約束させた。ホテルの会合の後、帰宅した伍治之は、老宋が開いた秘密会議の様子を蔡楚吟に詳細に伝えた。老宋とは、実はコミンテルン東方部代表の Nguen Ai Quoc の偽名であったのだ。

その翌朝、蔡楚吟と伍治之は約束の時間にフアラムボン駅に見送りに出かけ、待ち合わせ場所の新聞販売スタンドで老宋と顔を合わせた。老宋はシンガポール行き国際列車の二等座席に座った。別れの時に、ほっかほっかの潮州チマキの大きな包みを指して、広東語で「これが私の三日間の汽車旅行中の食料だ。とっても美味しい」と言った。後で判ったことは、老宋のマラヤ行きは、マラヤ共産党中央建立を指導するためであった。

伍治之も同年5月1日のメーデーの前に、マラヤの某山地に行きマラヤ共産党の第一回大会に列席した。バンコクに戻ってきた時、蔡楚吟は2歳半の一人子〔蔡誠のこと〕を女同志に託して潮州澄海の楚吟の母親の家に送った後であった。』³⁵

I-4, チャオ・ボンピチットの党史調査

チャオ・ボンピチット(劉源泓)は、1982年に汕頭で伍治之から直接聞いた話であるとして、次のように記している。即ち、「ホーチミンが1930年にシャム共産党の創立会議に招集した Ly [Ngo Chinh Quoc の別名] の中国名は、李存(Lý Tồn)で父はベトナム人、母は広東人である。Tang (曾)は「白髪の Tang」と言われていた。Ly と Tang はベトナム人である。創立会議は、Ly を書記長、白髪の Tang を組織担当、伍治之を宣伝担当と決めた。当時、ホーチミンは中国人の占い師に化けていた。同創立会議から、7-10日後、ホーチミンは、この3名をマラヤ共産党創立式に賓客として連れて行った。…中華人民共和国、ベトナム民主共和国が成立した後、伍治之はベトナム労働党政治局員の Hoang Van Hoan と会う機会があった。その際に、ホーチミンのアドバイスでシャム共産党の最高の地位である書記長に任じられた人物(Ngo Chinh Quoc)がどうして革命を裏切ったのかと質問した。Hoang Van Hoan は、Ngo Chinh Quoc は、在暹ベトナム青年革命同志会の平メンバーの一人に過ぎなかったため、政治的な質が未だ高くはなかったからだと答えた」³⁶。

伍治之が Hoang Van Hoan に、このような質問をした理由は、彼が妻とともに1930年10月11日に逮捕され(147頁の写真参照)、8年半の獄中生活を強いられたのは、Ngo Chinh Quoc (李存)が密

告したからだと考えるようになっていたからであろう。伍治之と蔡楚吟夫妻の一人息子、蔡誠が執筆した母親、蔡楚吟の伝記には「1930年10月、国民党スパイ李存が密告して、伍治之、楚吟は逮捕された」³⁷と記されている。伍治之が Ngo Chinh Quoc (李存) を疑うようになったのはいつからか、また、疑いは事実なのかどうかは、判らない。Ngo Chinh Quoc は、1933年1月末に逮捕され仏印に送還されたのち、仏印のスパイになってバンコクに戻ってきたことは、III—5に詳述する。もし、伍治之の疑念が事実であれば、Ngo Chinh Quoc はシャム共産党創立前後からスパイであったということになる。

伍治之の質問に対する Hoang Van Hoan の上記評価は、Ngo Chinh Quoc が、在暹ベトナム人のベトナム青年革命同志会の活動において (Hoang Van Hoan のような) 指導的地位にはなく、平会員に過ぎなかったことを意味するのであろう。しかし、Hoang Van Hoan (1905-1991) と Ngo Chinh Quoc を比較すると、共に中国で訓練を受けたことがあり、年齢的にも2歳程度の違いしかない³⁸。両者の違いは、Ngo Chinh Quoc は東北タイ (ナコンパノム県 Ban Mai 村) 生れ、一方、Hoang Van Hoan はベトナムから1928年5月末に初めてシャムの土を踏んだ人物であり、タイ語力に大差があったことであろう。I—2のトン・チェームシーのインタビューにあるように、ホーチミンは、シャムでの活動におけるタイ語の実用性を重視して、ベトナム語、中国語の外にタイ語もよくできた Ngo Chinh Quoc を初代書記長に選んだものと思われる。また、ホーチミンが Ngo Chinh Quoc を知ったのは、中国においてであったと思われるが、ホーチミンは Ngo Chinh Quoc に一定の信頼を持っていたのかも知れない。しかし、III—5で後述するように1933年1月末にバンコクで逮捕された Ngo Chinh Quoc は、逮捕後2週間以内に多くのことを自白してしまい、そのため党活動は1年近く停滞することとなった。

若白髪であったため「白髪の Tang」とよばれた Tran Van Chan はシャム共産党創立から1936年の分裂時まで、シャム共産党の中で最も重要な役割を担った人物である。彼は、Hoang Van Hoan, Le Manh Trinh らと共に、1926年に広州でホーチミンから訓練をうけた後、シャムに派遣された³⁹。Le Manh Trinh の回想録は、シャム派遣が決まり、1927年2月に、もう一人の同志と共に広州を発ったことが記されている⁴⁰。もう一人の同志の名は明示されていないが、Tran Van Chan の可能性が高い。V, VIで後述のように、Tran Van Chan は、1934-35年当時シャム共産党のトップの職にあった。しかし、1935年末に来暹したコミンテルン特派員の Lý Phúc Minh (李福明) と見解が対立して党を逐われ、1936年3月19日にコーンケンでシャム官憲に逮捕された。Ly Phuc Minh は Le Manh Trinh をトップに据えて活動を開始したが、1936年4月19日には両者を含むシャム共産党の幹部が逮捕された。1935年末1936年初におけるシャム共産党ベトナム人トップの分裂と、直後の両者の逮捕によって、シャム共産党内におけるベトナム人勢力は急減したとすることができる。

Tran Van Chan (Tang) は、1930年4月にシャム共産党の初代組織担当責任者に任じられバンコクで活動するようになる以前は、主にラオス、東北タイで活動していたと思われる⁴¹。

ホーチミンを加えても4人だけのシャム共産党創立会議は、創立大会というには参加者が少なすぎるという見方もあろう。しかし、1942年12月のタイ共産党創立大会の出席者数は十数人、同党第三回代表大会の出席者は20人程度と比すればそれほど少なすぎることはないように思われる。1942年12月のタイ共産党創立大会にタイ人支部を代表して出席したトン・チェームシーが、タイ共産党創立大会を

準備采配した李啓新に、戦後になってどうして創立大会の参加者が10数人に過ぎなかったのかと質問したところ、当時の全共産党員数自体が100人から200人程度で少なかったからだという答えが返って来たという⁴²。即ちタイ共産党の創立大会では、党員10人に一人の割合で代表が選ばれたことになる。

前掲のコミンテルン中央宛『報告』は、南洋共産党第三回代表大会の後の話しとして次のように記している。

即ち、『報告』中の、「A. シャムにおける中国人共産主義者たちの状況」の項には、1930年6月にコミンテルン東方書記局はシャムに代表を派遣した。この代表はベトナム人が東北タイで組織していた共産党組織と(華僑の)暹羅委員会との合併を仲介し(「…代表来暹, 将越人在暹羅東北方所組織之共産党, 介紹与暹委合併」), 「甲, 統一華越両党, 乙, 党暫由馬中領導, 丙, 要于最近成立暹羅中央」を決定した。9月には合併工作は完成した。シャム共産党中央委員会には二人のベトナム人同志が抜擢された。この瞬間にシャム共産党は新たな段階に入ったのである⁴³, と記されている。一方、『報告』のそれに続く「B. シャムにおけるベトナム人共産主義者たちの状況」の項では、同時に(1930年5月に)次の件が持ち込まれた。即ち、東方書記局の代表がウドンに来て南洋共産党(マラヤ共産党)第三回代表大会の状況および中国人・ベトナム人の両党を合併する計画に付き、報告と指示をする件である。9月に両党代表は会合し両党は一つに合流した(「同時接到東方局代表到烏隆来, 将馬來三次代会的形态及華越両党合併組織的計画来報告和指示, 于九月華越両方代表会商完竣而…」)⁴⁴。このように『報告』自体の記述の中にも微妙な矛盾が見出される。更に重要なことは、III-2において後述するように、『報告』が記す第二回代表大会開催日時は1932年7月であるが、正しくは同年9月初めであったように『報告』に記載された内容、とりわけ年月日については、完全には信頼できないことである。

『報告』とHoang Van Hoanや伍治之の回想との間には、南洋共産党第三回代表大会前後のシャム共産党の組織化過程の説明について矛盾がある。両者を整合的に理解するには、一つの解釈としては、『報告』が南洋共産党第三回代表大会後の1932年5月もしくは6月と記すコミンテルン東方書記局代表のウドン来訪とは、30年3月か4月のホーチミンのウドン訪問のことを指すと読むことである。もう一つの解釈は、ウドンに来訪したのはコミンテルンの代表ではなく、南洋共産党第三回大会に出席した、シャム共産党の組織担当責任者でベトナム人でもあるTran Van Chan (Tang)であり、彼がウドンに来て第三回大会の状況を報告し、両党組織の合併を指導したと解釈することである。

II. ベトナム人共産主義者の逮捕・追放(1930年)

1930年6月2日、バンコクの特高警察は市内の旅館を出てフアランポーン中央駅に到着したVo Tung (Sau)とDang Thai Thuyen (Canh Tan)を逮捕した。彼等は手持ちのガリ版刷りの共産党ビラをプラットフォームに投げ捨てた。また、別に、南洋共産党第三回代表大会に先立ちシャムの共産党組織内で討議した中国語文書「シャムの政治経済分析および党活動方針(案)」(ガリ版刷り)を隠しもっていた。両人はフランス公使館の情報では、1930年4月初めにシャムを出て中国の本部に連絡に行き、更に、両人の自白では5月16日にバンコクに戻ってきたという⁴⁵。逮捕された時期からして両人は、ウ

ドンの会議に出席するためにバンコクを発とうとしていたという可能性も考えられる。

逮捕の翌日、フランス公使館は、Sau は 14 年間⁴⁶もピチットに住んだことがある共産主義者であり、Canh Tan はウドン省の共産党のリーダーの一人であるとして、仏印への送還を求めた。シャムの内務大臣ナコンサワン親王は、二人を共産主義者としてシャムで裁判にかけることも可能だが、フランス公使館が仏印への強制送還 (deport) を求めており、仏印で処罰されることになるのだからとして、6 月 14 日には強制送還を決定した⁴⁷。シャム内務省の迅速な強制送還決定の背景の一つとして、この直前の 4 月半ばから 5 月初めにかけて、プラチャーティボック王夫妻が仏印を友好訪問したことを挙げる事ができよう。4 月 15 日夜サイゴンでの仏印総督主催歓迎会で、総督も国王もともに治安維持面での協力に言及したスピーチを行なっている (『シャム官報』Vol 47, pp. 332-337)。

Sau と Canh Tan の逮捕と仏印への強制送還が、Sau の活動の根拠地であり、家族が住むピチット県 Tha Luang 郡 (当時の郡名) Ban Dong 村のベトナム人に伝わると、Sau と Canh Tan の情報をフランス公使館に渡したスパイであると疑われた、同じ郡内に住むベトナム人 Cuong (グエン・プー・クウォン、タイ名 Thong Thaitrong) が 6 月 24 日に刺殺された⁴⁸。

この刺殺事件に絡んで、同県知事は 7 月 14 日に Ban Dong の 30 名のベトナム人を殺人および共産主義の秘密結社活動の容疑で逮捕した。フランス公使は、この 30 名は共産主義者であるとして、前回同様に仏印への強制送還を求めてきた。しかし、ナコンサワン内相が 1930 年 10 月 17 日付け国王秘書長官宛て文書で示した反応は、前回とは異なり寛大な処分に傾いていた。その理由としては、内相の上記文書より、次の点を指摘できよう。即ち、前回の強制送還は、共産主義者であることが明白であったので、共産主義者取締協力についての近隣諸国との合意 [シャムと仏印、英領マラヤ、蘭印との間の共産主義者の動向に関する情報交換と取締合意を言う一筆者] に従って実施した。しかし、今回は、前回とは次の点で事情が異なる。即ち、①逮捕者は共産主義者ではなくベトナムの愛国独立運動家でありシャムに害を与えるものでない、強制送還ではなく寛大な処分を求めるといふ嘆願書が上海のベトナム亡命者の親愛会 (L'Association Thân Ái des Annamites émigrés à Shanghai, 1930 年 8 月 19 日付) および中国の「越僑親愛会執行委員会」(1930 年 8 月 24 日付) から届いたこと、②前回の強制送還の後、政治犯の強制送還は国際慣行に反するという批判をシャムの新聞から受けたこと、③今回の逮捕人数は多数に上り送還すれば大きなニュースになること、などである。内相は 30 名中、11 名を国外退去 (行き先自由) させる案を提案した⁴⁹。

続いて 10 月 20 日、内相は国王秘書長官に、外務省との間のやりとりを次のように報告した。即ち、日本のシャム公使館を Cuong De が訪問してシャム政府に逮捕されたベトナム人複数人が仏印政府に引き渡されたことについて質問し、ベトナム独立運動のリーダーの立場から在暹同志への寛大な処置を求めた。Cuong De の訪問をプレーヤー・スパンソンバット駐日公使が外務省に報告してきた。これを受けて、外務省は Cuong De が再度問い合わせて来た場合に備えて、「シャム政府は、国際慣行を遵守しており、政治難民を強制送還するようなことは決してしない。但し、好ましくない人物、とりわけ共産主義者は出身国に強制送還 (deport) する。これは出身国官憲への引き渡し (extradite) を意味しない。共産主義者であることを示す証拠があるベトナム人を仏印に追放する場合は deport の方法によっている」

という内容の回答訓令案を作成して、駐日公使に送付する前にナコンサワン内相の承認を求めてきた⁵⁰、と。

ピチットで逮捕したベトナム人たちの処分については、11月4日の閣議に付議予定であったが、内相が病欠したため、11月19日の最高顧問官会議に先に付議された。最高顧問官を兼任するナコンサワン内相は同日の会議に出席して、Yong Fok Yan⁵¹の言を次のように紹介した。即ち、私（内相）を訪ねてきたYong Fok Yanという人物が、寛大な措置を求めた。彼が言うには、ベトナム人たちの目的はフランスからの独立であり、ソビエトや共産主義ではない。仮に共産主義者が含まれていたとしても極めて少数に過ぎない。今回ピチットで逮捕されたベトナム人には共産主義者は一人もいない。もし共産主義者として仏印に強制送還されれば残酷な処罰が待っている。それ故、シャム政府が好ましくない人物と判断した時には、直ちに自主退去するので、いつでも彼に言って来て欲しい、と。

有力最高顧問官のダムロン親王は、ベトナム人への同情的を示しながらも、フランスとの友好関係とのバランスをとることは難しいという趣旨で次の発言をした。即ち、ベトナムの話 [独立のこと一筆者] は先が長く、気の毒だ。しかし、ベトナム人に我が領土を反仏闘争に利用させないことが重要だ。利用させればフランスの恨みを買う。ベトナム人が、ただ独立だけを求めているのなら、たとえフランスが共産主義者だと主張しても強制送還すべきではない。国外追放の方法としては、Yong Fok Yanが希望する方法が望ましい、と。ナコンサワン内相は、仏印に強制送還した前例もあるので、フランス側が文句を言って来ないだろうかと述べ、フランスとの友好維持と、同時に、在暹の外国人を正当に扱うこととの両方を両立させることは困難だと指摘した。議論は、従来の強制送還要請時に、フランスが犯罪の明確な証拠を示さなかったのは正しくないという見解で一致した⁵²。

12月1日の閣議で、国王は最高顧問官会議の議論の内容を紹介させた後、次の方針を示した。それは、フランスがベトナム人共産主義者であるという十分な証拠を示した場合に限り、仏印への強制送還を認める。シャムは隣国に危害を加える反乱者のために隠れ家を提供することはしない。本件では外国人を正当に扱うが、フランスとの友好関係に影響を与えないように注意すること、というものであった。国王はこの方針に従い、ピチットのベトナム人の強制送還を求めてきたフランス公使の公文に対して、彼らが共産主義者であるという証拠を示すように求める回答案を外相に作成するように指示した。外相の回答案は1931年1月1日に国王に報告され、翌日にフランス公使館に送付された。しかし、1月10日過ぎに、フランスの臨時代理公使は口頭で、外相に対して、7月に逮捕されたピチットのベトナム人が12月初めに、10名 [正しくは11名] は中国に追放され、残りは全員釈放されたというが、どうなっているのだと質問した。外相には初耳のことに驚いた。実際に内務省はフランス側の最初の公文には共産主義者であるという証拠が何等示されていないとして、12月12日に11名のベトナム人（殺人容疑者4人を含む、但し実行犯であるという確かな証拠を集めることができず未だ起訴されてはいなかった）を彼等の希望する汕頭に退去させ、残り19人はピチットで10月4日に釈放していた⁵³。

1月20日の最高顧問官会議で、外相はフランス側の怒りを報告した、国王は過ぎてしまったことはどうしようもない、退去させたベトナム人を保護しようという考えで行ったのではなく、全くの誤解によるものであるから、その旨をフランス側に伝え謝罪するようにと指示した。ダムロン親王は、遺憾な出

来事だが、我々も無原則にやった訳ではないと内相を擁護した⁵⁴。

汕頭への退去処分は、当時の最有力王族ナコンサワン内相の温情的勇み足だと思われるが、これを以てシャムのトップがベトナム独立回復の心情的支援者であったと理解することはできない。それを最もよく示す資料は、1930年12月11日付けで国王秘書長官からダムロン親王に提出された、プラチャーティボック王のベトナムの独立に関する見解である。即ち、12月6日付けで内相が国王秘書長官宛てに提出した、広州のベトナム革命人民会執行委員会⁵⁵の11月1日付け中国語請願書の訳文（逮捕されたベトナム人へ寛大な措置を求める内容）を読んだ国王は、次のように述べたのである。「この文書を読むと、ベトナム人は救国のために中国から援助を得ることを期待していることが判る。もし中国が平穏になれば、ベトナムに対する権力を、一それがたとえ統治権ではなく経済的な権力であっても一獲得するために本当に援助するかもしれない。そして中国はベトナムの保護者であると主張するに違いない。もしそうなればシャムにとって危険である。シャムも間違いなく中国の経済的権力の下に入ることになる。更には中国の政治的影響下に陥る危険性さえあるのだ。フランスがベトナムを統治している限りは、シャムの safe-guard となる。たとえいかにベトナムに同情を寄せていても、シャムへの危険を考えると、ベトナムがフランス権力から簡単に脱することがないように望まざるを得ない。ベトナム反乱者を保護しないこと、あるいは、ベトナムのフランスからの独立回復を援助しないことは、フランスとの友好維持だけではなく、シャムの直接的な利益となることである。そうでなければ、我々は中国の影響圏に置かれることを甘受しなければならなくなるのだ。」⁵⁶

また、イギリスで発行されていた伝統有る Stateman's Year Book 編集部が、1930年9月にシャム関係の記載事項について追加修正をシャム政府に求めて来た際、ナコンサワン内相（五世王の子）は、フランスへの領土喪失は、既に30年も前のことでありシャムの対外関係の項にいつまでも記しておく必要はないという見解を述べている⁵⁷。これは、フランスの領土奪取と戦った五世王時代の次の世代は、既に領土回復の意思を失っていたことを示すものである。

1907年にシャムが領土問題でフランスとの間に最終的な合意に達したのち、シャムとフランスの関係は大幅に改善した。更に第一次世界大戦にシャムがフランス側に立って参戦した後は、1930年代半ばに東アジア情勢に変化が生じるまでは、両国政府は、親密な友好関係を維持した。

11名の強制退去者の中には、Le Manh Trinh も含まれていた。Le Manh Trinh と共に汕頭に着いた仲間は、1931年4月に中国の紅軍に参加したが、Le Manh Trinh 自身は再びシャムに戻り⁵⁸主に東北タイで活動した。

1930年6月24日の殺人事件により Ban Dong のベトナム人活動家の殆どは逮捕された。シャム政府の一層の取締を恐れて共産党組織は Ban Dong からの引き上げを決めた⁵⁹。これにより、ベトナム人の革命運動の拠点としての Ban Dong の役割は消滅した⁶⁰。

シャム共産党の創立者の一人である伍治之は1930年10月11日に、バンコクのラーチャプラロップ路に偽装のために開いていた雑貨店・華校（民強学校）が手入れをうけ、妻の蔡楚吟とともに逮捕された⁶¹。伍治之の逮捕と同時に、バンコクのみならずコーラート、シーキュウ、サラブリー、アーントーンでも共産主義者の手入れが行われ、30名の華人が逮捕された。伍治之については、イギリスが中国の共



逮捕された伍治之・蔡楚吟夫妻 (出所: Sri Krung 紙 22 Oct. 1930)

産主義者がシャムの頭目として送り込んだ人物であるとして、写真をシャム側に提供していた⁶²。逮捕時に押収された文書には1930年8月1日付けの「シャム共産党」、「シャム共青团」名のビラも含まれている⁶³。このことは、8月1日時点でシャム共産党が既に存在していたことを示すものであろう。1930年9月23日にバンコクにおいて8名の「シャム共産党」員が逮捕されたことを報じたタイ字新聞シークルンは、「もう一つ、共産党が生まれた。警察の調べでは、この党は“シャム共産党”という名称を使用している」と書き出している⁶⁴。これらから、1930年8～9月には、シャム共産党の存在が知られるようになったことが判明する。

前述の1935年にシャム共産党がコミンテルンに提出した『報告』は、1930年9月に越僑、華僑の共産党組織が統合されたのちのシャム共産党について、次のように述べている。

「1930年9月に華僑組織と越僑組織は統一した。党員数は約220人に成長した。共青团員は100人以上、労働組合員は400人、婦人組織は200人、大衆組織は1000人以上を数えた。しかしながらそれらの中には未だ1人の原住民(シャム人)もいなかった。組織の方針により、我々は2つの地方委員会(省委党部)、11の特別支部を有していた。1931年に党は2つのフラクションに分裂した。それらフラクションのどちらもがマラヤ共産党中央委員会に報告しようと努めた。マラヤ共産党中央委員会は問題解決のために、シャムに2人の代表を送って来た。拡大協議会が招集され、その結果1人の委員(ベトナム人)が東北部に派遣された。当時、シャム共産党中央委員会は東北部の地方委員会との間に緊密な連絡を持っていなかった。この後、党機関の3人が逮捕された。」⁶⁵『報告』にいう分裂が、バンコクの華僑組織の間に生じたのか、バンコク市委員会(華僑組織)と東北部地方委員会(越僑組織)との間に生じたのかは、判らないが、仮に、前者の場合は、海南人グループと潮州人グループとの間に生じた可能性が考えられる。

シャムにおける共産党の活動について、詳細な記事を掲載している英語新聞バンコク・タイムズにも、1931年1月から1932年3月まで、一年以上に亘って、ピラ撒布や共産主義容疑者の逮捕など、共産党の活動を示す報道は全く見いだせない。一方、華字紙の『中華民報』1931年7月14日号には、海南人共産党員42名が逮捕された記事が掲載されている。共産主義活動摘発は、通常特高警察の任務であるが、この摘発は新設の犯罪捜査部(C.I.D)⁶⁶の手によるものであった。C.I.Dが功を焦って本当の共産党ではないグループを摘発した疑いもある。総じて、1931年および32年前半においては、シャム共産党の活動は、30年10月の伍治之等30名の大摘発や、31年の分裂の影響で低迷していたものと考えられる。

III, 第二回代表大会と Ngo Chinh Quoc (1932年)

シャム共産党の活動が再び報道されるようになるのは、1932年6月に入ってからである。1932年6月24日には、人民党の軍事クーデターによる絶対王制の打倒という大事件が生じた。1932年9月1-2日には、党組織の立て直し、人民党クーデターの分析などを重要な課題として、シャム共産党第二回代表大会が開催された。

ここでは先ず、第二回代表大会開催直前の1932年8月8日にシャム警察が共産党の拠点で押収した文書(原文は中国語だが、保存されているのはタイ語訳のみ)により、第二回代表大会直前の共産党の活動規模、指導部、資金、大会の準備過程などを明らかにしたい。ついで、同年10月7日にイギリス公使がシャム政府に提供した、シャム共産党がマラヤ共産党中央に第二回代表大会について報告した文書を紹介する。更にこの文書の内容とシャム共産党が1935年にコミンテルン中央に提出した前掲の『報告』の記述とを比較する。これらを通じて第二回党代表大会前後におけるベトナム人党員の役割を考察したい。

III-1, 第二回代表大会の準備過程

1932年6月1日午前1時、警察はバンコクのタラート・ノーイの珈琲店を急襲して、8名の海南人共産主義容疑者を逮捕し、ピラおよび入党章程など多種の文書を押収した⁶⁷。7月31日には、共産党は8月1日を記念したピラを撒布した。6月24日の人民党クーデターから間もない時期の、久しぶりのピラ撒布であり、人民党政権は反人民党反乱かもしれないと緊張した。8月4日にはバンコクで人力車車夫のストライキが発生した。このストに先立って、共産党は人力車夫に接近しようと努めたが、成功しなかった⁶⁸。

8月7日の夜から見張っていた警察隊は8月8日早朝5時に、バンコクのウォンウィエン22・クラックダー(羅斗圈)の木造高床家屋二棟(警察が「共党之総機関」(Communist headquarters in Bangkok)と推定した借家)に突入した。一棟は印刷所兼集会所で極めて堅固な扉が設けられていた。もう一棟は普通の家屋であった。後述する1932年6,7月分のシャム共産党執行委員会の出納報告にある、書記局事務所と党訪問者宿泊所とであったと思われる。9名の海南人共産主義容疑者が逮捕(その長は、沈育安という名であることが報道された)され、極めて大量の中国語文書が押収された⁶⁹。この逮捕のきっかけは、警察が送り込んだ潮州人スパイの情報であった。このスパイは10パーツの入党費を

払い容易に入党することができた。逮捕された9名は17歳から30歳までの海南島生れの男性であった⁷⁰。1932年9月20日付けで、シャム共産党執行委員会が、上部組織であるマラヤ共産党中央に報告したIII-2で紹介する文書の、I、報告のD項は、手入れを受けたのは、同党の印刷所であると説明し、逮捕されたのは、責任ある地位にある共産党幹部1名、責任ある地位にあるシャム総工会幹部1名、シャム総工会の同志1名、大衆6名である、としている⁷¹。

押収中国語資料は5日後にはタイ語に翻訳された。但し、中国語のオリジナルは残念ながら保存ファイル中には見いだせない。逮捕された9名に対して8月30日に永久国外追放処分が決定され、9月16日に出港させられた。9名の人相書、写真、指紋は、シャム外務省から在暹のフランス、オランダ両公使に9月29日に伝達された。なお、イギリスとの間には、共産主義情報はシャム内務省からシンガポールの警察に直接通知することが合意されていた。ところが、シャム内務省の通知が遅れている間に、シャム共産党が9月20日付けで上部機関であるマラヤ共産党中央（在シンガポール）に送ったシャム共産党第二回代表大会に関する報告（III-2参照）を何らかの方法で入手したシンガポール当局が、同報告書中に9名の国外追放の件が報告されているのを見つけて、10月7日に駐暹英公使を通じてシャム外相に、同報告書（英訳）を提供するとともに、記載されている9名に関する情報を求めてきた⁷²。

32年8月8日にシャム警察が押収した中国語文書の最大部分は、1932年7月下旬から8月7日までのシャム共産党執行委員会と支部との間のやりとり文書である。この外に、1932年7月後半に作成されたと思われる暹羅総工会の規約、1932年1月に作成された暹羅革命済難会規約、党中央が2か月に一回作成した党の月別出納報告（1931年12月、32年1,2,3,6,7月分がある）、第二回代表大会に向けた提案文書等がある。文面からは、手入れを受けたのは、第二回代表大会の直前であったこと、共産党を除名追放された華人の反党活動が少なからず存在することが判明する。

押収文書中には、32年7月31日付けで、Tengがシャム共産党執行委員会名で作成し、執行委員会に提出した、6-7月分の月別出納報告書が存在する。それによると、支出費目は6月、7月とも、書記局事務所および党訪問者宿泊所の賃借代、訪問者食費⁷³、交通費、ピラ等印刷用紙代、郵送代、病休中のTengへの支給金（両月とも各5パーツ）、その他で、合計支出額は、6月は28.95パーツ、7月は32.65パーツであった。一方、6月の収入は5支部が納入した28.2パーツプラス繰越金11.48パーツの合計39.68パーツ、7月の収入は5支部が納入した計25.62パーツである。出納報告書は末尾で、7月31日現在、党の金庫には3パーツ70サタンの資金しか残っていないと述べている。

上記出納報告書は、Tengがシャム執行委員会に宛てた8月2日付け書状に添付したものであるが、同書状で、Tengは、次のように述べている。即ち、7月は党の資金から自分の薬代・食費に5パーツを支出した、7月は病のため党活動ができなかったにも拘らず5パーツを党の金庫から支出したことは不適切だという理由で執行委員会の許可が得られないならば、病状が回復した後に返済する。党大会が近づいているが、党には3パーツ70サタンの資金しか残っていないので執行委員会を開いて特別募金活動を決議すべきである。党大会の議題案の作成は、執行委員会がやっても、あるいはTeng自身がやってもよい。党大会には地方からの代表が来るので総額20パーツの資金が必要である。地方からの代表の食事代は誰が負担すべきか、自分の考えでは代表者数は数人、所用経費合計も数パーツに過ぎないの

で執行委員会が支出すべきである。8月1日の夜にナコンサワンから代表一人が紹介状を持って自分を訪ねてきた。執行委員会でこの人物が本当の代表かどうかを調べて欲しい、と。

更に、Tengは8月3日付けで、当時の党執行委員会の中心人物の一人と思われる Khiak Uy に書状を出し、昨晚、党が借りている建物の家賃を貸主から催促されたが、党には資金がない。党執行委は党費未納者へ催促をすべきである。もし、自分に催促の仕事をさせたいならば自分がしてもよい、と述べた。Tengが欠席した8月3日の執行委員会通常会は、Tengに党費未納者への催促を依頼することを決めた。また、同通常会は、過去1週間に4支部（各支部の責任者は、Kang（精米所）、Pheng Yi, Kiang Chao, Tang Huay Huay）が Khiak Uy 宛てに提出した伺いに決定を下し、かつ2支部の党員が紹介してきた新しい入党者計7名を承認した。なお、7月28日に Tang Huay Huay が Khiak Uy に出した文書からは、前者の支部には11名の党員がいることが判る。

8月6日に党執行委員会は第12次会議を開催し、次の決定をした。①代表大会開催に関して、準備中のものは一週間以内に完了すること、代表大会開催日をいつにするかは来週土曜日（8月13日）に決定する。②各支部に参加代表名を報告してくるよう文書を送付すること、既にバンコクに到着している Pak Nam Pho（ナコンサワン）、Ban Don（スラタニー）の代表がホンモノかどうかを確かめること。③支部からの提案は宣伝部で集約すること。④開催場所は、TengとLimが探すこと。⑤資金は党費未納者に催促して集め、かつ、別に寄付金を募ること。⑥報告案は、TengとKangが起草すること。その外に、人民党の6月24日政変に関する共産党の声明は、代表大会で協議した後に発表することも決定した。

8月7日には、Lau（劉）が Ong（王）宛てに、「ウボン [ウドンの誤訳と思われる一筆者] から二名の代表が到着した、一人は Li、もう一人は Yiao である。宿泊場所を探して欲しい。もし旅館に泊まれば金がかかり、出入りも不便だ」と報告した。これは、ウドンから Li（李、Ngo Chinh Quoc）と Yiao（楊、Hoang Van Hoan）が第二回代表大会の代表としてバンコクに到着したものと読むことができる。

党大会に対する提案の文書の中には、宣伝部が少なくとも機関誌一誌は出すべきであるという提案や、シャム土着民にまでは党組織が及んでいない実情を憂えて、将来のシャム人組織の中核人材を育成するために、共青团のメンバー [華人一筆者] をタイ語学校で学ばせるべきだという提案、シャム人に対する活動のためにシャム人部を設けるべきだという提案、あるいは（立憲革命で政権を取り、党員拡大中の）人民党内に共産党員を潜らせて群衆を獲得すべきだといった提案なども見出せる。

以上、押収文書より第二回代表大会準備時点の共産党内では、Tengの役割が極めて大きいことが判る。TengはIII-2で見られるように第二回代表大会で書記長に選出された。また、押収文書中に登場する Lim, Lau, Ong とも執行委員に選ばれている。

III-2、マラヤ共産党中央への第二回代表大会報告書（1932年9月20日付）

警察の手入れの影響で、第二回代表大会の開催は少々遅れたものと思われるが、9月1-2日には開催された。

シャム共産党が1932年9月20日付けで上部機関であるマラヤ共産党中央（在シンガポール）に送ったシャム共産党第二回代表大会に関する報告書についてはIII-1で既に述べたが、同報告書の全訳

は次のとおりである。

I. 報告

A, 代表大会, 9月1-2日の両日, 全シャム代表大会を開催した。出席した代表は10名, 遠距離のため交通費を支給できなかったので欠席した代表が4名である。①シャム委員会に属する各支部が報告を行った。②シャム共産党執行委員会およびその支部の活動の欠点について批判を行った。③反帝大同盟の開始, 労働者・農民運動の発展について討議し, かつ同志の教育, 共青团の支援方法について協議した。④7名の執行部を選出した。5名は執行委員, 2名は候補執行委員である。執行委員から, Teng (丁) 書記長, Lim (林) 組織担当, Lau (劉) 宣伝担当の3名が常務委員に選出された。Ong (王) と Hun (雲) は執行委員, Li (李) と Lim (林) が候補執行委員である。

B, シャムの政治状況, シャム政府は従来, 保守派と急進派に分かれていたが, 6月24日の革命で保守派は打倒された。現在は人民党の独裁であり, 搾取的な税金は廃止されてはいない。人民党は, 革命を防止するために大衆の運動を人民党員に偵察させている。人民党は大衆を欺き, 青年を惑溺させている。物価は上昇し, あらゆる名目で税金が徴収されている。人民党政府の我々に対する監視は厳しくなり, 我々のピラを見つけるや捜査を徹底し, できるだけ多数を逮捕している。農村は破産し, 農民は減税を要求して, 至る所で立ち上がっている。

C, 現在の党勢, ①責任ある同志が有能ではないので, 多くの問題が解決できないままであり, 明確な計画も決定できてはいない。党は再編されたが, 適切な指令を出すことに成功していない。その理由は, 党員全体の質が低いからであり, 今回の代表大会でも有能かつ経験ある人物を見出すことができなかったからである。②宣伝。我々の質の低さのため, 訓練用のわずかの資料を除けば出版物は何も存在していなかった。週に一回, 支部の責任者を集めて口頭で訓練を実施していただけであった。今回の大会で月刊『指導報』を発刊することを決めた。記念日には, 同志がピラを撒布している。現在, 人民党に反対する内容の, 人民に向けた文書を準備している。③組織。シャム共産党執行委員会の直接指導下に, 2省党部, 4区党部, 5支部, 3特組が存在する。党員総数は325人, 全て質は低く, 40パーセントが農園労働者, 60パーセントが産業労働者である。ベトナム人(Anamites)55人, 潮州人10人余の他は全て海南人なので奇妙な発展の仕方である。④財政。現在, 多くの党費未納者がいるので[毎月の]収入30百ツ余に対して支出は50百ツ余である⁷⁴。⑤シャム総工会の下に, 8工会が存在し, 総組合員数は172人で, 大部分が海南人である。うち農園労働者が45パーセント, 産業労働者が55パーセントである。総工会責任者は共産党組織と密に連絡を保っている。⑥反帝大同盟籌備処の下に8支部, 80人が存在する。大部分は海南人である。責任者の質が低いため, 活動は十分ではない。⑦農民運動は, 一省党部が組織した一つを除き存在しない。⑧シャム土着民の間の活動は実施していない。⑨全ての同志は依然として中国に属しているという誤った意識を持っている。彼等は経験を欠くので, 多くの訓練が必要である。⑩毎週, 共産党は共青团の会議に同志を送り込んでいる。また, 党の会議に共青团が代表を送ってくるができるように情報を伝えている。⑪1928年に党を除名された Loh Tong Thian (羅中○)⁷⁵ と自らのロマンチズムのために離党した潘先明の二人が, 現在活発に大衆を組織している。羅は, ボルシェビキは誤っていると見做すとしてメンシェビキを組織しているとも言われる。また, 1928年

に党を除名された之帝と自らのロマンチズムのために離党した錦江の二人は、人の上に立ちたいという欲望を満たすために、10名余のメンバーから成るグループを組織し、現在、シャム共産党執行委員会に敵対している。

D、8月1日付けピラの撒布の後、党の印刷所が8月8日に急襲され、責任ある地位にある共産党幹部一名、責任ある地位にあるシャム総工会幹部一名、シャム総工会の同志一名、大衆6名が逮捕された。これら9名は本月〔9月〕16日に中国に追放された。

II、要望

①当地の活動を指導できる人材、即ち英語と中国普通話の会話能力があり、夜学校の教師を務めることができる人物を極力派遣して欲しい。②連絡網の設定に最善を尽くして欲しい。③シャム共産党が中国共産党と連絡できるように紹介の労をとって欲しい。シャムで国外追放処分を受けた同志が中国共産党と連絡できるように。そうしなければ、彼等は行き先がなく中国の警察に逮捕されることになる。④シャム総工会がマラヤ総工会と連絡できるように紹介して欲しい。⑤訓練教育用物資を送って欲しい。⑥中国共産党がメンバーを汕頭に送り、シャムから国外追放になった同志たちと接触するように連絡して欲しい。⑦上記の4反動份子〔Cの⑩を指す〕をどう処置すべきかを知らせて欲しい。

III、質問

①前にクーリエとして来た陳旺は未だ汽船隆盛号に乗っているのか、この汽船は客船か貨物船か、同汽船が次にシャムに入港するのはいつか。②反帝大同盟は工会の下におくべきか、独立団体とすべきか、シャム総工会が反帝大同盟を彼等の指揮下に置くべきだと求めているので答えて欲しい。③前に送った我々の質問と要望に、どうして回答してくれないのか。

IV、その他

陳民鋒同志は〔バンコクで〕羅のフラクシオンに属する反動派ではないかと疑われていた。現在、彼は〔シンガポールの〕羅曼羅理髪店に居る。必要な調査の後、彼が反動派ではないことが明らかになった場合は接触して欲しい。我々は彼に何らの紹介状も与えてはいない。

シャム共産党執行委員会

1932年9月20日

9月20日付けでバンコクのシャム共産党執行委員会が、シンガポールのマラヤ共産党中央に送った上記報告書は、郵送によるのかクーリエが運んだのかは不明であるが、間もなくシンガポールの警察当局が入手し中国語から英訳した。そして、早くも10月7日には駐暹英公使からシャム外相に提供されたのである。これから見て、当時、マラヤ共産党中央の動きは、シンガポール官憲に筒抜けになっていた可能性がある。

第二回代表大会報告は、325名の党员中55名はベトナム人であると述べながらも、Cの⑨に「全ての同志は依然として中国に属しているという誤った意識を持っている」と記し、ベトナム人党员の存在を無視していることからみて、当時のシャム共産党執行部は華人が圧倒的な力を有していたものと思われる。なかでも、全党员の8割は海南人であり、シャム総工会、反帝大同盟のメンバーの大半も海南人で

あるので、Teng（丁）以下の党指導者の多くも海南人であったものと推測される。残念ながら、これらの海南人指導者が誰であったのかを特定できるだけの情報は未だ持ち合わせてはいない。

当時、シャム共産党は未だ中共との間に直接の連絡ルートを有せず、南洋共産党時代からの上部組織であるマラヤ共産党を経て、初めて中共との連絡が可能であった。当時のシャム共産党の月間活動費は、わずかに30バーツ前後、これは当時の在暹華僑学校の教員一人の一月分の月給程度の少額に過ぎない。これではシャム人の中に活動を拡大する余力に乏しいのは当然であろう。Cの⑦に「農民運動は、一省党部が組織した一つを除き存在しない」とある。省党部は、越僑のウドン省委か華僑のバンコク市委員会の二つしかないが、ここでは、前者のウドン省委を意味しているように思われる。当時の党中枢は後者の華僑党員で占められていたので、ベトナム人の活動については他人事のような表現になったものと思われる。

8月8日に押収された文書には、シャム人の組織化の必要を説いた提言がいくつかあったが、上記シャム共産党のマラヤ共産党中央への報告には、シャム人の組織化への言及は見当たらない。しかし、第二回代表大会で、シャム人の組織化を重視した決議がなされたことは間違いない。それは、第二回代表大会の決定に従い発刊された月刊『指導報』第1号（1932年11月15日発刊）の、次の記事から明白である。即ち、同誌は「党の欠点を改善するため、今回の代表大会の決議に『党組織を強固にし、かつ拡大するために、生産労働者の中に広げるとともに、シャム人をも取り込む』という一項を盛り込んだ」と述べている。

続けて、同誌は、シャム人の取り込みの項で、次のように記している。「我々の党は、シャム共産党という名称だが、実際はまだ中国人ばかりだ。故に、シャム革命の基本は、いかにシャム人を取り込むかに外ならない。この問題は、今回初めて協議したものではない。昨年の拡大会議の決議事項の一つとして『シャム人と接触する準備の第一段階として、党員がタイ語タイ文字を学ぶ運動を行う』ことを決め、6ヶ月以内に成果を出すように通知した。しかし、通知後丁度一年になるにも拘らず、各級組織は通知、決議に見向きもせず、誰も本気で行ってはいない。ここに依然として困難を厭う傾向が示されている。党は、シャム革命について研究した結果、もしタイ人同志がいなければシャム革命は成功しないことを認識している。それ故、今回の代表大会で『党組織の新たな拡大とは、シャム人の中に入って広げることである。それに先立ち、タイ語とタイ文字を学習すべきである』という決議も行った。この決議は、我が党の新たな進路を示すものである。今後、我々がシャムの真の共産党たり得るかどうかは、同志がこの決議を実行するかどうかによる。もし、我々が勇敢かつ確固として、この代表大会決議を実行すれば、我が党は新たな進路を進むことができるのである。」⁷⁶と。また、同誌は党員の欠点の一つとして、民族主義を挙げ、「我が党は国際政党であり、彼らとか我々とかいう区別はない。しかし、シャム革命の任務をもつ同志たちが、中国革命に期待し、シャムから中国に行くために紹介状を求めてくる。党が、彼らはシャムに居る必要があるとして、紹介状を出さない時、彼らに不満が生じる」⁷⁷と論じている。

シャム共産党指導部は、自らの力不足を認識しており、マラヤ共産党に指導員の派遣を求めている。この頃からシャムで活動を開始した華僑指導者、劉漱石（1899生-1942没、1936年4月19日に逮捕された Le Manh Trinh シャム共産党書記長の後任書記長）、李華（1912生-1988没、1942-43年タイ

共産党初代総書記)らは、マラヤ共産党を通じて派遣されてきた人材である可能性も考えられる。

III—3、コミンテルン宛て『報告』に視る第二回代表大会

さて、IおよびIIで引用したコミンテルン宛て『報告』の記述をみて見よう。『報告』は次のように続けている。即ち、

「当時、シャム共産党中央委員会は東北部の地方委員会との間に緊密な連絡を持たなかった。この後、党機関が手入れを受け、同志3人が逮捕された。1932年7月(ママ)初めにシャム共産党第2回大会が開かれた。第2回党大会に東北部地方委員会が自らの代表を派遣してきた。1人のベトナム人同志が執行委員会執行委員に選出された。当時、2つの地方組織(省党部)、3つの地区党組織(区党部)、7つの特別細胞組織(特支)、2つの特別組織(特組)があった。党员200人余、共青团員20人余、赤色労働組合員(赤工)150人余であった。反帝大同盟の組織が回復された。大会は、新政府に反対するプロパガンダの拡大に関する決議を採択した。中国語、タイ語、ベトナム語、英語のピラが全国規模で発せられた。この影響は大きかったので、政府は摘発のため懸賞金を懸けた。」(「此時暹委与東北省委不能密切、不久、党機関被破捕去同志三人、1932年7月初、開第二次全暹代会、東北省委派代表到会、選出越籍一人為執委、那時組織上有二省党部、三个区党部、七个特支、二个特組、党员二百余、团员二十余、赤工百五十余、又恢復反帝同盟、在大会中決定發動反对新政府的宣傳、用中暹越英四種伝单遍全暹羅影響甚大、于是統治者就懸賞購緝」)⁷⁸。

第二回代表大会以前に生じた、「党機関が手入れを受け、同志3人が逮捕された」事件とは、1932年8月8日の「共党之総機関」(Communist headquarters in Bangkok)の手入れ逮捕を指すものと思われる。

シャム共産党のマラヤ共産党への報告文書と、この『報告』とでは、第二回代表大会時の党员数に関して前者は325人、後者は200人余、また、支部数や大衆団体のメンバー数に関しても少々異同がある。両者とも言及している「新政府に反対するプロパガンダの拡大に関する決議」は、1932年9月30日に実行された。即ち、1932年9月30日付けで、「暹羅共産党、暹羅共産青年団」の名義で『暹羅共産党対国民党政治告群衆書』のピラ(確認できるのは、中国語、タイ語、英語)が出され、同年6月24日のクーデターで政権を握った人民党(国民党)政権の打倒を訴え、最後を次のスローガンで締めくくっている。「a, 全暹被压迫群衆聯合起来!、b, 打倒新的独裁政府!、c, 打倒国民党!、d, 打倒資本帝国主義!、e, 成立工農兵蘇維埃政府!、f, 実行共産社会主義!」⁷⁹。

III—4、第二回代表大会で候補執行委員に選出されたLy

ところで『報告』は、第二回代表大会に、「東北省委派代表到会、選出越籍一人為執委」と述べている。東北タイのウドン省委が派遣した代表は誰であり、ベトナム人で唯一人執行委員に選出された者とは誰であろうか。

32年8月初めにウドン省委代表として、Li(李、ベトナム語表記ではLy、即ちNgo Chinh Quoc)とYiao(楊、ベトナム語表記ではDuong 即ちHoang Van Hoan)の二名がバンコクに到着したことはIII—1に前述した。大会代表14名(内欠席4名)は、二人のベトナム人代表を除けば、華僑党员であったから、中国語に堪能な両人が派遣されたものと思われる。また、III—2で引用したようにシャム共産党

のマラヤ共産党中央への報告書では、候補執行委員に Li が選出されているので、ベトナム人で唯一執行委員に選出された人物は、Ly (Ngo Chinh Quoc) と考えて間違いない。

ところで、Ngo Chinh Quoc は 1930 年 4 月 20 日に創立されたシャム共産党の初代書記長である。彼は、第二回大会まで同党書記長の職にあったのであろうか。既に III—1 で見たように、第二回代表大会準備段階で最も役割が多く、かつ第二回代表大会で書記長に選出されたのは、実像は不詳だが海南人と考えられる Teng である。大会準備に Ly が貢献したという証拠は存在しない。抑も、Ly は大会間近の 8 月初めになって東北タイからバンコクに派遣されてきたに過ぎない。III—1 に記したように「ウボン(ママ)から二名の代表が到着した、一人は Li、もう一人は Yiao である。宿泊場所を探して欲しい。もし旅館に泊まれば金がかかり、出入りも不便だ」とあることから、Li はバンコクに住み家もなかったことが判る。

また、第二回代表大会で執行部に入ったベトナム人は、候補執行委員として Ngo Chinh Quoc 一人に過ぎず、第二回代表大会後も党執行部におけるベトナム人の比重は極めて低かったものと思われる。シャム共産党のマラヤ共産党中央への報告書の記述内容は、III—2 に見たように華僑中心であり、ベトナム人は無視されている。ベトナム人は当時党内で殆ど影響力を有していなかったものと推測される。

以上から、名目はともかく、Ngo Chinh Quoc が 1930 年の書記長就任後、第二回代表大会まで継続してシャム共産党の実質上の書記長の職を務めたとは考えられない。

越僑のウドン省委とバンコクの華僑組織は、1931—32 年には殆ど無関係に独立して活動している。1931 年末のゲティン・ソビエト失敗後、ウドン省委は、インドシナ援助部の活動に傾注したためであろう。この間の事情を Hoang Van Hoan は、次のように回想している。

1931 年末ゲティン・ソビエトが弾圧で劣勢となり、Ha Tinh 省委の同志 Bui Khuong(Lieu Han), Le Loc, Tran Xu が党中央との連絡のためにシャムに来了。この時からウドン省委の任務は、①シャム共産党臨時中央執行委員会(シャム委員会)の指導下でシャム大衆を革命に喚起することの他に、②インドシナ革命の支援が加わった(英文回想録, p. 57)。1932 年初めにウドン省委は、Le Manh Trinh (Tien) と Nguyen Van Du(Hai) にインドシナ援助部を設立の任務を与えた(同上書, p. 59)。インドシナ援助部は、ゲティン・ソビエトから東北タイに逃げて来た同志のために、①食料援助用として越僑から 5000 バーツを募金し、②理論の訓練を与え、③国内に再度同志を潜入させた。幹部を潜入させる前に、ナコンパノムの Ban Mai 村で、Tien, Hai, Le Loc, Tran Xu, Bui Khuong およびウドン省委書記として Hoang Van Hoan も参加して会議を開いた。この会議で Hai は、シャム共産党臨時中央執行委員会が、インドシナ共産党中央執行委員会の設立に合意していると報告した。そのインドシナ共産党中央執行委員会とは、Hai を書記とし、Tien, Hai, Le Loc, Tran Xu, Bui Khuong を委員としていた。Hoang Van Hoan は、Hai の言うことは、シャム委員会の決定(シャム委員会の決定とは、ベトナムから来た同志とインドシナ共産党との連絡を助けるというもの)とは一致しないと思ったが、Hai がシャム委員会の決定であると主張するので黙っていた。このインドシナ共産党中央執行委員会が成立後、Hai はナコンパノムに行ってラオス側のターケーキの人々と連絡した。Hoang Van Hoan がシャム委員会に報告したところ、シャム委員会は Hai のやっていることは独断であるとして、インドシナ援助部担当者の任を解

任される前に自己批判をするように求めた。1932年4月、Le Loc はベトナムに潜入するも逮捕され、続いて Bui Khuong を派遣したが、何もできずに逃げ帰って来た。1933年初めには Tran Xu を Ha Tinh に送ったが逮捕された。この後、ウドン省委はインドシナ援助部の改組を決めた。Tien: 進 (Le Manh Trinh) を長とし、Ba Doc: 三督, Tai: 才を主要メンバーとした (同上書, p.61)。1934年に、Ba Doc と Bui Khuong を送り出した。Bac Doc は Nghe An で組織を立て直し、Nghe An 省委を設立し、ウドンのインドシナ援助部との連絡にも成功した。彼は 1935年3月にマカオで開催された第一回インドシナ共産党大会に中圻代表として参加した (同上書, p. 62)。

なお、ゲティン・ソビエト鎮圧への協力を期待したためか、1931年の仏印当地局は、シャムとの交流に従来になく熱心であった。例えば、1931年5月16日にシャムの駐パリ公使は、仏印総督がインドシナへの帰任途中にバンコクに立寄り、シャム外相と共産主義者の問題について非公式に意見交換をしたいという希望を有していると連絡してきた⁸⁰。

また、1931年10月16日にサイゴンに到着して以来一ヶ月間をかけてインドシナ各地を視察したフランスの植民地大臣 Paul Reynaud が、帰路途中の11月18-20日にバンコクを訪問し、国王に拝謁するとともに外相と会見した⁸¹。

III—5, Ngo Chinh Quoc の逮捕と自白

シャム共産党は、第二回代表大会の決定に従い、1932年9月30日に人民党政権を批判する声明ビラを撒布した。続いて、同年11月7日には、暹羅赤色職工總會の名義で『俄国革命十五週年紀念宣告勞苦工友書』を出し、最後に次の10項目のスローガンを掲げた。即ち、「全暹羅工農兵勞苦群衆聯合起来！、爭取結社集會言論出版罷工等自由！、打倒民黨獨裁政治！、打倒一切豪紳地主資本階級！、反對帝國主義第二次大戰！、反對民黨統治階級逮捕・拘禁・驅逐工人及革命份子！、反對帝國主義進攻蘇聯、武裝起来擁護蘇聯！、成立暹羅工農兵蘇維埃政府！、十月革命成功萬歲！、世界革命成功萬歲！」。更に、33年1月23日夜には暹羅共産党、暹羅共青团、暹羅反帝國主義大同盟籌備處、暹羅總工会の各名義で『為革命導師列寧李卜克内西盧森堡紀念告全暹群衆書』〔レーニン、リープクネヒト、ルクセンブルクの3名〕の1月21日付け中国語、タイ語、英語の各ビラを撒布した⁸²。

このようにシャム共産党のビラ撒布の頻度が増した中、1933年1月30日早朝特高警察は、バンコクのラーマ6世通りのショップハウスにて4名 (華校教師の任光およびLyら)、媽宮近くの洗濯屋で3名 (主人の符明興と2名の店員)、ワット・サケート近くの材木店で1名、即ち、3ヶ所で合計8名を共産主義活動の容疑で逮捕した⁸³。Ly以外の7名は全員海南人であった。Lyが逮捕されたショップハウスでは、同時にガリ版印刷器や多数の文書、ビラなど20種が押収された⁸⁴。逮捕から2週間後の2月13日に内務大臣は首相に、逮捕した8人中の一人、リー (Ly) について次のように報告した。

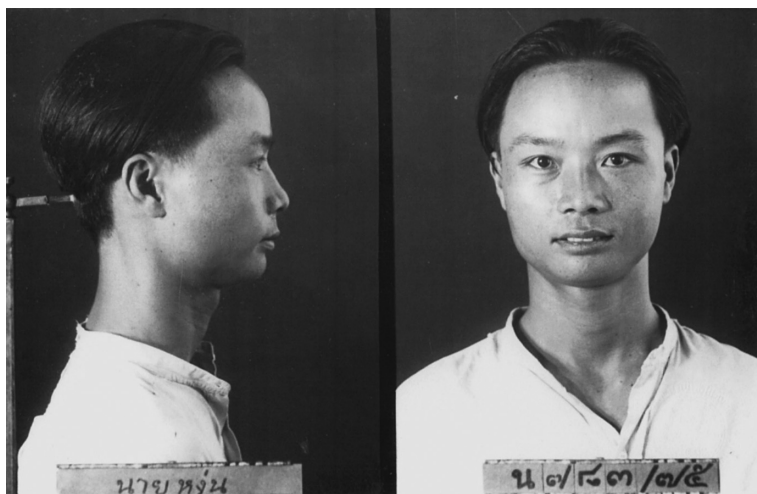
Lyは、ラーマ6世通りの家屋で逮捕された4名の一人である。この家屋からは、印刷道具も見つかった。彼は、広東人だと称しタイ語が上手かった。取調べ官が、Lyの発音に僅かにベトナム人訛りがあることに気づき、数日かけてなだめながら尋問したところ、ベトナム人共産主義者であること、Ngo Chinh Quoc, Tuan, Kao, Ong, Tran, Luangの名を使用していること、共産党内ではLyという名を用いていることを自白した。彼はフランス公使館が逮捕送還を求めている人物と一致している。また、

シャム共産党には既にタイ人も加わっていると自白したが、人名までは明かさなかった。一層の自白を促しているが、いままでに自白した以上のことを引き出すことは困難なようだ。内務省が調書を検討し、Ngo Chinh Quoc の処分を決めたら再度報告する。ここに Ngo Chinh Quoc の自白の記録、彼の自白をもとに作成した共産党の組織図、証拠文書の写真、および逮捕時に Ngo Chinh Quoc が住んでいた住居の写真を提出する⁸⁵、と。

以上から、逮捕後2週間のうちに、Ngo Chinh Quoc は多くのことを自白したことが判る。しかし、残念なことに、ここに列挙された提出物はタイ国立公文書館の保存ファイル中には見いだせない。但し、8名の逮捕の際に押収された大量の中国語文書は、タイ語訳されて33年4月29日付けで内務省から外務省に届けられたものが残っている⁸⁶。

その後2月23日に、内務大臣は調書検討の結果について首相に次のような報告をした。Ngo Chinh Quoc が共産主義者であることは事実であると思われるが、しかし調書に現れた証拠だけでは法律に照らして彼を罰することができるかどうか不安が残る。かつ、口頭で報告したように、フランス公使館は、Ngo Chinh Quoc をインドシナに送って尋問することによって、インドシナとシャムとの間の現在の共産主義活動についての情報の精度を上げることを欲している。それ故、内務省は Ngo Chinh Quoc を追放処分に処すことを決めた⁸⁷、と。3月15日に Ngo Chinh Quoc は仏印に国外追放された。彼と同時に逮捕された海南人7名は、2名(任光と符明興⁸⁸)が起訴され、5名が国外追放処分を受けた⁸⁹。

Ngo Chinh Quoc が1月30日に逮捕された家屋で押収された資料の中には、次のようなものが含まれていた。①「暹羅学生联合会」規約、②1932年12月10日付けの少年労働者の組織化に関する暹羅総工会少年労働者部作成の文書、この文書には、以前はバンコクに数百人の少年労働者メンバーがいたが、指導の欠陥のため現在は20余人を残すのみになったという反省が記されている。③1933年1月30日付けの暹羅総工会臨時執行委員会の文書、この文書は1月23日にビラ配りをして逮捕された仲間3名支援のために募金を呼びかける内容である。また、同文書で、暹羅総工会臨時執行委員会は成立して未



逮捕された Ngo Chinh Quoc (出所: NAT Pho. Cho. Ko. To/84)

だ 20 日余しか経ていないと述べている⁹⁰。

III—6, Ngo Chinh Quoc のその後

シャム共産党初代書記長であり、仏印への追放当時は同党執行委員会の候補執行委員の一人であった Ngo Chinh Quoc は、組織の斡旋で 1929 年頃Đặng Thị Hợp と結婚していた。彼女はĐặng Quỳnh Anh (Vo Thung, 即ちトン・チェームシーの母) の姪に当り、1925 年にベトナムからピチットの Ban Dong に来て、おぼの Dang Quynh Anh とともにベトナム人革命家の支援を行った。Dang Quynh Anh の回想録は、Ngo Chinh Quoc の実名を挙げず、Q というイニシャルで、Ngo Chinh Quoc のその後を述べている⁹¹。それによると、Q は逮捕されて組織の秘密の多くを白状した。[仏印に追放されたが、フランスの特高の協力者として一筆者] シャムに送り返されて来て、再び妻の Dang Thi Hop と生活を始めた。

Ngo Chinh Quoc が裏切り者でありスパイであることはベトナム国内の党組織から東北タイの党組織に通知され、さらに東北タイの党組織から Dang Quynh Anh に伝えられた。彼女は姪の Dang Thi Hop をよんで事実を話した。姪は夫の Ngo Chinh Quoc と離婚し、Ngo Chinh Quoc にシャムから出国するよう求めた。Ngo Chinh Quoc は中国に行き中国国民党に加わった。1936 年 10 月 31 日のコーンケーン事件で投獄された Dang Quynh Anh が 1944 年末に出獄した時には、Dang Thi Hop は、既に革命への関心を失い仏道に帰依していた⁹²。

チャオ・ボンピチットは、マラヤの華僑から Ngo Chinh Quoc が上海で日本の憲兵隊のために働いていたと聞いたことがあり、これらから Ngo Chinh Quoc は 1930 年当初よりフランスのスパイであった可能性もあると推測している⁹³。

IV, 第三回代表大会とベトナム人幹部の再進出 (1934 年)

シャム共産党の活動は、1932 年 9 月 1-2 日の第二回代表大会前後から 1933 年 1 月末にかけて、極めて活発となったが、政府の大摘発を受けて低迷した。その様子は、1934 年 12 月 22 日の日付が付された、シャム共産党がコミンテルン中央に宛て報告したフランス語文書『シャムの情勢』(“La Situation du Siam”⁹⁴) に次のように記されている。

「8 共産党の状態, 1933 年初めより、共産党中央委員の殆ど全員が逮捕された。資料・資材も失われた。共産党組織間の交通連絡 (liaisons) は途絶え、共青团の間の交通連絡も途絶えた。我々がいくらか交通連絡を回復できたのは、1934 年 4 月のことである。1934 年 7 月 27 日⁹⁵に全国大会を召集した。その時点では、交通連絡は、残念ながらやっと半分が回復していたに過ぎない。逮捕を逃れた、21 人の同志と 2 人の中央委員が全国大会に参加した。シャム人は一人もいなかった。」⁹⁶

ここに言う「中央委員」とは、1932 年 9 月の第二回代表大会で選出された 7 名の執行委員のことである⁹⁷。これから計算すると、Ngo Chinh Quoc 以外にも執行委員 4 名が逮捕され、第三回代表大会時には 2 名しか残っていなかったことになる。しかし、この間の共産主義者逮捕の報道には、執行委員逮捕と推定できるものはない。シャム内務省が共産主義容疑者を起訴するか、国外追放にするかを定める場合の基準は、共産主義活動をした証拠が十分か否かであり、党内の地位は把握できていなかったものと

思われる。逮捕された4名の執行委員も、経歴不明のまま国外追放に処せられた可能性が高い。

III-2 で見たように第二回党大会時の党員は8割が海南人であった。それ故、第二回代表大会以後の警察の取締で逮捕された、4名の執行委員も一般党員も、その多くは海南人であったものと思われる。この結果、1934年7月の第三回代表大会前後には、下記のようにシャム共産党中に占める中国人(海南人もその一部)党員の実数も割合も、大幅に減少した。その外に、海南人党員の大幅減少を裏付ける証左としては、次の事実も指摘できる。即ち、多数の海南人労働者が居住するスラニー、ナコンサワン地区に、1932年の第二回代表大会時には党組織が存在したが、1935年の下記『報告』中には存在を確認できないことである。

1935年にコミンテルン中央に提出された『報告』は、1935年当時の党員数は180名で、内訳は「東北党部(越71, 暹12, 計83), コーラート支部(越4, 暹1, 計5), バンコク市党部(越1, 華44, 計45), バーンボン区党部(暹1, 華38, 計39), ペップリー支部(華5), チェンマイ支部(越3) 合計180人」⁹⁸と記載している。

東北党部はウドンにあり、コーラート(ナコンラーチャシーマー)も東北部の都市である。バーンボンとペップリーは中部タイにあり、シャム湾西海岸に位置する。チェンマイは言うまでもなく北部である。

上記を集計すれば、180名の党員の割合は、ベトナム(越)人79名(構成比43.9%), 華人87名(同48.3%), シャム(暹)人14名(7.8%)となる。また、ベトナム人の党員は、東北タイ(ウドン, コーラート)のみならず北タイ(チェンマイ)でも活動していること、一方、華人党員はバンコクとシャム湾西海岸部で活動していることも判る。

1932年9月の第二回代表大会直後、シャム共産党がマラヤ共産党中央に報告した党員数合計は325名、うちベトナム人55名、華人270名(潮州人10人余、残りは海南人)、シャム人0名であった。1932年と1935年と比較すると、華人党員は270名から87名に大幅減少、ベトナム人党員は55名から79名に増加したのみではなく、初めて獲得できたシャム人14名中13名はベトナム人党部の成果であった。

ベトナム人、シャム人党員の増大と華人党員の急減は、第三回代表大会が選出した新執行委員会(中央委員会)の民族構成にも影響を与えたと思われる。

前出の『報告』は、「在第三次代會中、決定暹委執委九人、照民族成份、瓊州三人、潮州二人、越三人、暹一人」(ロシア語訳では、「第三回代表大会において9人からなる中央委員会が選出された。すなわち民族構成では、海南(瓊州)3人、潮州2人、インドシナ3人、シャム1人である」)⁹⁹と記している。第二回代表大会の7名の執行委員(中央委員)の民族構成を示す資料は未見であるが、執行委員中、ベトナム人は1名に過ぎなかった。即ち、ベトナム人の割合は7分の1であった。ところが、第三回代表大会では、9名の執行委員中、ベトナム系の執行委員は、ベトナム人3名、それにIV-4に後述するようにウドン省委系のシャム人(Sawat Phiukhao, サワット・ピウカーオ)を加えれば合計4名に上り、即ち9分の4をベトナム系が占めることとなった。

IV—1, 第三回代表大会の決定

“La Situation du Siam” (Fond 495, opis 16, delo 51, list1-5) は、2人の中央委員と21人の同志が出席して開催された第三回代表大会の決定を次のように報告している。

(1) 中央委員に9名が選ばれ、その中から3名の常務委員が選出された。

(2) 秘書: 2人の党员。

宣伝: 責任人は中央委員の1人、外に2人の同志。

組織: 1党员。

土着人向け宣伝 [中国語『報告』では、「土人運動委員会」という名称]: 責任人は中央委員の1人、外に2人のシャム人党员(?) [?は原文にあり一筆者]。

Prof-adel [意味不明一筆者]: 1党员。

婦人工作¹⁰⁰: [人数記載なし一筆者]。

交通連絡員 (Liaisons): [人数記載なし一筆者]。

(3) シャム人の中での宣伝の活発化。

(4) 党の出版物、今後出版を計画しているもの。

タイ語雑誌一つ

中国語で理論誌一つ

工会の雑誌一つ [工人之路 (The Way of Workers) のこと一筆者]¹⁰¹

政治月報一つ

共青团の雑誌一つ、「先鋒 (前衛)」¹⁰²

教育委員会が3ヶ月以内に組織されなければならない。

この間に全ての資料が準備されなければならない。

組織に関して

a, 2ヶ月以内にシャム人を組織するために、できることは全て行うこと。

b, 工会を発展させること、工会にはシャム人が少なくとも一人は所属していることを要する。

c, 可能な最短期間内に総工会を設立すること。反帝大同盟部門を設立すること。一ヶ月以内に、バンコク市委員会、東北部地方委員会、南部地方委員会¹⁰³を設立しなければならない。

d, 交通連絡 (Liaisons) の再組織。

以上から、シャム人獲得が極めて重視されていること、かつ性急に成果を出そうとする意図があることが判る。ところで、秘書2名の存在理由は、次のように解釈できる。即ち、下記IV—2に示すように『報告』に「在第三次代会中、決定運委執委九人、照民族成份、瓊州三人、潮州二人、越三人、暹一人、設中暹越秘書処、土人運動委員会、宣伝委員会」という記述があり、第三回代表大会で華人、シャム人、ベトナム人書記局 (秘書処) が設けられた。3秘書処であるから3名の秘書が必要となるはずだが、2名であるのは、シャム人党员は未だ人数が少ないばかりでなく、実質的にはベトナム人組織の指導下であったのでベトナム人秘書が兼務して、別にシャム人秘書を設けなかったためであったのか、あるいは、シャム人獲得のために「土人運動委員会」が設けられ、中央委員の一人 (多分、唯一のシャム人中央委

員)が責任者に任じられたので、このシャム人中央委員が実質的にシャム人秘書の役割を担ったためであろうと推測される。

IV-2、『報告』に視る 1935 年前半時の党、共青团、大衆組織の実態と問題

コミンテルン中央に宛てた『報告』は、第二章、党組織と大衆組織の概況において、D、1935 年前半時のシャム共産党の現状を①組織、②宣伝に分け、E、共青团の現状を①組織、②宣伝に分け、また、F、大衆組織の現状を①赤色総工会、②反帝大同盟、③学生联合会、④普羅列塔利亚(プロレタリア)芸術聯盟、⑤婦女協会、⑥赤色救済会、⑦農会の各項目に分けて詳述している。以下、『報告』の、第二章のうち党組織と大衆組織の概況の D、E、F の各項目¹⁰⁴、及び第三章、党内思想及び内外闘争情形¹⁰⁵の全文を翻訳して紹介したい。

第二章、党組織と大衆組織の概況

D、党の現状

①組織

- 1、第三回代表大会において9人からなる執行委員会が選出された。すなわち民族構成では、海南(瓊州)3人、潮州2人、インドシナ(越)3人、シャム(暹)1人である。中国人、シャム人、インドシナ人の各書記局、土人運動委員会および宣伝委員会を設けた。
- 2、シャムを、東北部、北部、中部、南部の4地方に分ける。バンコクには市委員会を設ける。現在、東北部地方委員会とバンコク市委員会が既に成立した。
- 3、党員数は、現段階において、東北党部(越71人、暹12人、計83人)、コーラート支部(越4人、暹1人、計5人)、バンコク市党部(越1人、華44人、計45人)、バーンボン区党部(暹1人、華38人、計39人)、ペップリー支部(華5人)、チェンマイ支部(越3人)合計180人である。

②宣伝

- 1、党内部機関紙として月刊『指導報』(一回発行済み)を発行している。
- 2、党外部向けに中国語、ベトナム語、シャム語で『紅旗週報』を発行している。東北部では、シャム語、ベトナム語で『火光(イスクラ)』¹⁰⁶を発行している。
- 3、各記念日の宣伝ビラは、東北部ではベトナム語、シャム語を用い、中部では中国語、シャム語を用いている。
- 4、宣伝活動は、人材不足、資金の欠如、国際文献の不足、兄弟共産諸党との連絡の欠如、加えて、上級との連絡が悪くしかるべき指導を欠いているので、完璧とは言えない。

E、シャム共産主義青年団(コムソモール)の現状

①組織

- 1、以前、共青团はマラヤ共青团中央の指導を受け、マラヤ共産主義青年団シャム地委という名称であった。しかし、現在はマラヤと連絡が途絶えている。バンコクの共青团組織は5つの細胞組織(特支)からなり、メンバーは28名、全員中国人である。東北部の共青团は、バンコクの共青团地委の指導下に入ったことはない。最近バンコク市団部が成立した。東北部でも東北部団部を準備中

である。その成立後は団の活動を統一する。

- 2, 団員はバンコクが 28 名, 東北部が 67 名 (ママ) で内ベトナム人 48 名, シャム人 29 名である。その構成は, 学生 50%, 教員 10%, 労働者 30%, 農民 10% である。
- 3, 地方委員会の指導の下に我々はまたピオネール (10-15 才の共産少年団) 組織を持っている。

②宣伝

- 1, 内部機関誌として『怎樣幹』[「いかにして為すべきか」の意一筆者] を中国語で発行している。
- 2, 外部用機関誌としては、『少年先鋒』週報を中国語で発行している。
- 3, 最近, シャム語で『少年先鋒』を発行するために, 3 名からなるシャム語翻訳委員会が組織された。
- 4, 画報の出版, ピオネール新聞の発行。

F. 大衆組織

①赤色総工会

- 1, 党組織が存在している以上, 労働組合もまた存在している。かつて労働組合 (職工) は党が指導し, 青年労働者労組 (青工) は共青团が指導したが, 第三回代表大会で両者の合併を決め, 総工会中央委員会内に青年部を創設した。
- 2, バンコクには製材所, 精米所, 店員, 印刷の工会があるだけであり, しかも零細な集まりである。一工場に一つの組織を作ることには成功しておらず, 現在工場を性質毎に分け, 地区単位で組織している。各工会に党細胞を組織することに着手する。地方 [東北部を指す一筆者] の工会は, その地方の党部が指導しており, 総工会の指導には帰していない。
- 3, 総工会が指導するバンコクの工会のメンバーは全員中国人で, 人数は 130 余である。東北部の工会の全メンバー数は 50 人で, うちベトナム人が 41 名, シャム人が 9 名である。
- 4, 宣伝のため宣伝委員会を組織しており, 『工人之路』, 『工友』の二種を出版している。

②反帝大同盟

- 1, 第 2 回代表大会において反帝大同盟の準備委員会を創設することが決定された。第 3 回代表大会後, 反帝大同盟が正式に成立した。反帝大同盟には大衆革命団体が加盟している。団体会員以外に, 個人会員も存在する。バンコクに 5 つの分盟があり, メンバー 75 人は全員中国人であり, 内訳は店員 20%, 教員 20%, 学生 30%, 労働者 30% である。東北部では反帝大同盟の組織化を既に開始しており, 90 人を有している。メンバー合計は 165 人である。
- 2, 宣伝委員会を組織しており, 『暹羅週報』『明灯』を出版している。

③学生联合会

- 1, 1934 年 8 月に成立した。共青团バンコク地委の指導下にある。現在のところ, 学校の学生たちが自ら組織しているのではなく, 個人が学生会の責任者と秘密裏に結合しているだけであり, 力量は非常に弱い。
- 2, 宣伝のための自前の出版物を出す力はない。ただ, 学校の出版物で編集者の地位を占めている。

④普羅列塔利亜 (プロレタリア) 芸術聯盟

- 1, 組織。1934 年初めから準備され, 1935 年初めに成立した。党, 共青团の指導下に活動を行ってお

り、全て中国人からなる 40 人余のメンバーが 13 のグループ（小组）に分かれて活動している。教員が 40%、学生が 10%を占め、新聞記者も 1 人加わっている。

- 2, 宣伝。2つの方向で実施している。1つは、非合法の中国語の新聞『暹羅文化』の発行である。もう1つは教員、新聞記者がブルジョア中国語新聞の副刊面に執筆しかつ、編集権を握ることである¹⁰⁷。
- 3, 組織系統上、反帝大同盟の指導を受け、反帝大同盟の全ての革命行動を実行している。

⑤ 婦女協会

- 1, 1934年8月になって婦女協会結成のための準備委員会が設立された。バンコクに会員 12 人が存在する。地方〔東北部〕の婦人運動とは直接の関係はいまだできていない。
- 2, 宣伝のため、中国語新聞の副刊面に「齒輪」¹⁰⁸ を掲載している。
- 3, 共青团の指導下にある。

⑥ 赤色救済会 (MOPR)

- 1, 東北部に 700 余人の組織がある。
- 2, 中部〔バンコク〕には未成立。

⑦ 農会

1935年まで農会はなく、1935年1月に初めに、一つの農会が地方〔東北部〕に組織された。その会員はシャム人 32 名である。

シャムにおける革命勢力の表

シャム共産黨員	180 人
共青团（コムソモール）員	95 人
工会員	200 人
反帝大同盟員	165 人
赤色救済会 (MOPR) 員	700 人
婦女協会員	150 人
農会員	32 人
普羅列塔利亞（プロレタリア）芸術聯盟員	45 人
学生会員	140 人
赤色青年同盟員	60 人
青年工会員	20 人

第三章、党内思想及び内外闘争情形

I, 思想の左右傾向

黨員の大多数は中国から〔国民党の弾圧を逃れて一筆者〕逃亡して来た者および安南から最近移動して来た青年であり、移民者意識をもち、家郷を懐かしみ、中国、インドシナの革命情勢には常に注意を向けているが、一方、シャムにおける革命の任務は疎かにしている。故に、党の組織的基盤は堅固なものとは言えない。この病を何度も批判し矯正してきたが、今でも根治されてはおらず、党の一大病根と

して残っている。

党と共青团の指導的幹部の大多数は知識份子である。知識份子の活動を指導監督できる労働者同志は極めて少ない。故に党組織は奇形的であり、行動力は弱い。毎回の党代表大会では、この点を真剣に討論し、労働者同志たちの行動力を高め、政治知識の水準を引き上げることを決議し、かつ、訓練班を設ける計画を立てた。しかし、資力の欠如、活動の誤った配分により、結局何も実現できなかった。日常の党細胞組織の会議において、党員訓練のためにテーマを決めて討論する場合でも、政治知識と革命理論の弱さによって、よい結果が出ない。これが党の第2の病である。

党員の発展は、平和的な方法に限られ、戦闘的な方法による発展は極めて少ない。故に、彼らはプロレタリア革命のイデオロギーを有するだけで、プロレタリア革命闘争の経験や勇敢さは甚だしく欠いている。これが党の第3の病である。

党指導者は、毎回の会議で、党はシャム・プロレタリアートの党であり、シャム人の中で発展すべきであると論じてきた。しかし実情は、党は中国人およびインドシナ人の革命份子の集団である。それ故に、全党員が原住民の間で活動できるようになるために、シャム語の会話と読み書きを習得すべきことを決定した。党員の大多数は、その必要性を認識してはいるが、心理的にはシャム語学習を嫌悪している。そのために彼らはシャム人に接近できないし、活動は遅々として発展しない。これが党の第4の病である。

以上の4つの病のすべては基本的に広く知られている事実である。

党内の行き過ぎた左翼および右翼の傾向は、次のような見解・主張に見ることができる。例えば、

- 1, 党組織が広範・強固ではない時期に、闘争ばかりを行うのは、党が大きな損失をこうむることになるのでよくない。まず、党組織を発展させ、各方面の力量を健全なものにして、初めて効果を上げることができるのだ。
- 2, 財政困難で活動費の当てがえないために、全活動が阻害されている。適当な資力があれば、種々の活動を発展させることができるだろうに。
- 3, シャムにおける革命は中国、インドシナ、マラヤにおける革命と密接な関係を持っている。特に中国革命と密接な関係がある。中国革命の成功なくしてシャムの革命の成功は不可能である。
- 4, 党内の知識份子の考えでは、シャムの革命運動は始まったばかりであり、この運動は、能力の高い知識份子が担うことによって、はじめて発展が可能となる。それ故に、知識界の人物にばかり注意を向け、労働界へは注意を向けない。
- 5, 一部の同志は、党の活動が良行でないのは、上級機関からの指導を得られず、兄弟諸党からの援助も得られないからだ、各方面との関係をよくすれば、党の活動は発展するだろうと考えている。
- 6, 党内の一部分の同志は、シャムの大衆を過小評価して、シャム人は思想が遅れ、知力も大変低いので革命戦線に到達させることは困難だと考えている。故に、彼らはシャム人に近づいて宣伝・組織をすることに関心を向けない。
- 7, 白色テロにに対抗して、爆弾、鉄砲を用いて官吏・警察と対峙し、赤色テロを引き起こしてはじめて、群集心理に与える影響が大きくなり、革命の勢いも高まると主張する者もいる。

- 8, 党は財政的に窮乏しているので、経済活動隊を組織するか、単独の強盗、あるいは土匪に加わって、資金を強奪すべきであるとする者もいる。
- 9, 工人同志の中には、外国、特に中国からシャムに來た軍閥、土豪劣紳などを、テロ隊を組織して殴殺するか銃殺することによって、大衆に自分達の敵を自覚させるべきだ、という主張がある。
- 10, 党の政治的路線は第三回代表大会において次のように確立されている。すなわち、
 - (a) 現段階におけるシャムの革命はブルジョア民主主義革命—労働者と農民の独裁である。
 - (b) 労働者農民兵士のシャム・ソビエトの政府の樹立である。

ところが、何人かの同志は、政府の樹立に関するアプローチは、1930年に來暹したコミンテルン代表が、シャムにおける経済的、政治的状况の特徴の分析を基に提起したシャム労働民主主義共和国の樹立という説を踏襲すべきだと考えている。他方、別の一部の者たちは、ブルジョア民主主義革命は必要ではなく、プロレタリア革命を直接行うべきだと考えている。

上述の種々の考えを党員と共青团員の20%から30%が有している。党と共青团の会議は、このような左右に傾斜した考えは、追随主義、日和見主義であり、帝国主義と反動政府がシャム革命運動の統一戦線を破壊することに間接的に手を貸すことになるので、党の活動に極めて有害であると決定した。

まさにそれ故に、党は、あらゆる会議で批判をするだけでなく、次のように決議した。すなわち、
a, 闘争活動を強化すべし、無茶苦茶な闘争および平和的發展という両方の誤った主張を糾正すべし。
b, 党および共青团の機関紙において公開で誤りを指摘すべし。
c, 鉄の規律を実行すべし。その結果、党の力量は発展し、各種の誤りも減少するだろう、と。但し、党内の思想はなお複雑なので積極的に闘争を継続中である。

II. 政治経済闘争活動

党は各国際記念日には、毎回 [ピラ撒きの] 宣伝活動を行っている。しかしながら、群衆をデモ、大衆集会、ストライキに導く力量は極めて限られている。これは次の原因による。即ち、各革命組織が健全ではなく、集中した行動ができないこと、各労働組合が未だ基幹重要産業部門には及んでおらず、かつ組織は全ての工場地域をカバーするには至っていないことである。故に、政治闘争としては、ただピラ撒きができるだけであり、日常闘争は殆ど実行できない。しばしばストライキが生じているが、その力量は脆弱で計画もまずいために失敗に終わっている。人民大衆の自然発生的な闘争が生じて、党には指導する能力はない。しかし最近、これらの弱点は次第に克服されつつあり、革命運動は日々高潮している。1935年。附暹党与東党海外指揮班関係議決案 (另抄)

(完)

IV—3. 第三回代表大会が選出したベトナム人・シャム人執行委員

前述のように、第三回代表大会では、9名の執行委員中、ベトナム人3名、シャム人1名が選出された。

ベトナム人3名とは具体的には誰のことであろうか。

1935年9月22日付けで、駐暹フランス臨時代理公使 G.Gergs-Picot はシャム外相宛にフランス語で公文 No.124/35 A を提出した。そのなかで、シャム共産党執行委員会中に4名のアンナン人がおり、こ

のうちの二人は正執行委員で、残る二人は候補委員であると述べ、インドシナに隣接する東北タイで、シャム共産党の活動が発展しているとして、シャム内務省にシャム共産党の執行委員である4名のアンナン人を逮捕し、インドシナに追放するように要請した。そのためとして、アンナン人4名の氏名（偽名を含む）、経歴、写真を添付した¹⁰⁹。

この公文に執行委員として記載された4名は、記載順に上から Tran Van Chan, Le Manh Trinh, NGÔ CHÍNH HỌC alias CU ĐÍCH alias CHOÁT, Hoang Van Hoan [HOÀNG NGỌC ÁN と記載] であった。公文 No.124/35 A は各人について下記のように説明している。

1, Tran Van Chan: 約35歳、ゲアン省の生まれ、1926年に来暹した。彼はシャム共産党の主要創立者の一人で、二年間かけてシャムにいるアンナン人共産主義者すべてを、シャム共産党に加入させた。彼はコミンテルンから承認されている唯一の代表である。

2, Le Manh Trinh: 1930年7月にピチットで逮捕され、同年12月に仲間10人と共に中国に追放された。1931年2月に秘密裏にシャムに戻ってきた。最初はウドンに住み、Tran Van Chan と協力して、シャムのアンナン人共産主義者の細胞を、コミンテルンの原則に従い再組織し、シャム共産党にまとめた。彼はドクトリンを完璧に堅持して、シャムにおける宣伝を指導している。今日シャムでタイ語およびアンナン語の新聞やビラが、多かれ少なかれどこにでも撒布されているのは彼の功績である。

3, NGÔ CHÍNH HỌC alias CU ĐÍCH alias CHOÁT: 彼は当フランス公使館とシャム政府との間の往復通信の対象となっている人物である。その最後の通信文書は、在暹フランス公使の ROGER MAUGRAS から当時の外相 PHYA SRIVISARVACHA に宛てたものである。

4, Hoang Van Hoan: 約29歳、Nghê-An 省 Quynh-Luu 県 Quynh-Đôi 村生まれ、ナコンパノムの指導委員会のメンバーであったが、逃亡した。彼は、シャム語の知識があるので、宣伝文書をタイ語訳するのに使われている。彼は Tran Van Chan と共に、1935年5月に中国よりシャムに戻った。中国では、インドシナ共産党海外指導部との会議に出席¹¹⁰し、すでに当時のパホン外相宛に本公使館が1935年7月19日付けで送付した公文 No. 91/35 A [本稿末尾付録参照] で通知した協定を取り決めた。

上記4名中、Ngo Chinh Hoc を除く3名は、既に本稿でも何度も登場した人物である。上記資料は Ngo Chinh Hoc については何ら経歴を記さず、別の文書に言及している。残念ながらその文書をタイ国立公文書館保存の外務省文書中には見出すことができない。Ngo Chinh Hoc とは何者であろうか。Hoang Van Hoan は回想録で、「1934年にインドシナ共産党の海外指導部が香港（ママ）に設立された時、私は Tran Van Chan と相談して一幹部を海外指導部に派遣して報告を行い、指令を求めた。戻って来たこの幹部は、口を濁した。彼は海外指導部が我々に500元（块钱）を与えたことを報告しなかった。彼はその金を好き勝手に使い込んでいたのだった」（Hoang Van Hoan 英文回想録, p. 76）と記し、更にこの幹部の名は、Trần Báo（陳豹）で Choat という偽名を使用したことを明らかにしている。即ち、「Tran Bao はシャムで Choat という偽名を用いたが、シャム共産党執行委員会のベトナム人同志の通訳であった。1934年にインドシナ共産党海外指導部への報告の任務を与えられた。彼は任務を全うしなかっただけでなく、党の資金を着服した。党の幹部が全員逮捕された1937年当時、彼はまだバンコクでぶらぶらしていた。シャム共産党執行委員会が、40名の華僑青年を新四軍に参加させるために、

Tran Bao に引率させたが、彼は香港に青年たちを置き去りにした¹¹¹。香港で金を使い果たした青年たちは広州に出て、その一部は余漢謀の軍隊に入るしかなかった。彼らは抗日戦争に参加できなかったばかりか、ファシストという汚名を受けることになったのである。1938年、Tran Bao は漢口に来て葉劍英同志に面会し、シャムから抗日戦参加のために帰国した華僑であると吹聴した」（同上書、pp. 98-99）。

シャム共産党の数少ないベトナム人幹部に、Choat という偽名の人物が二人存在したとは考え難いので、Choat という偽名を使った Tran Bao は、同じく Choat という偽名を用いた Ngo Chinh Hoc と同一人物と見て間違いのないであろう。なお、Choat はベトナム語では瘦小の意味だが、タイ語では光輝を意味しタイ人男性に多い名前の一つである。また、Sophie Quinn-Judge はその著書で、Ngo Chinh Hoc の経歴を次のように記している。「シャムに移住した家庭に生れた。1920年代初期に中国に留学して杭州の英語学校で学び、英語、中国語に堪能となった。彼の姉妹の Ngo Khon Duy は Ho Hoc Lam と結婚した。Ngo Chinh Quoc と共に、シャム共産党のリーダーの一人となった。別のソースでは、マラヤ共産党シャム支部ベトナム人部門のリーダーの一人とも言う。中共との関係は不明」¹¹²。Tran Bao は長沙に国民党軍中佐として任官していた Ho Hoc Lam と、1938年11月12日の長沙大火の際も行動を共にした (Hoang Van Hoan 英文回想録, p. 100) ほどに親密であった。Tran Bao が Ho Hoc Lam と義兄弟であれば、このような親密さは理解できる。これも Tran Bao 即 Ngo Chinh Hoc の傍証となるだろう。

Tran Bao(Choat), 即 Ngo Chinh Hoc (Choat) は、シャム共産党執行委員のタイ語通訳を務め、また同党とインドシナ共産党海外指導部との連絡のために派遣されていることから、シャム共産党の重要幹部の一人であったことは間違いのない。但し、彼がフランス公使館の公文が言うように執行委員の一人であったかどうかは判る、他の資料は未見である。1934年7月の第三回代表大会で選出された9名の執行委員中ベトナム人は3名であったという情報と、1935年9月にフランス公使館がシャム外務省に通知してきたベトナム人執行委員は4名であるという情報とは、一致していない。後者の4名には現役ではない者が含まれていると考えることもできるし、1年間のうちに増員があったと考えることも可能であろう。

上記公文 No.124/35A でフランス公使館がシャム共産党執行委員であると指摘した4名の順序が党内序列を反映したものならば、3番目の Choat よりも下の4番目に置かれている Hoang Van Hoan の当時の実際の地位は、彼が回想録で描くほどには高くはなかったことも考えられる。もし、そうであれば彼の回想録の記述も割引いて理解する必要があるだろう。とにかく、彼の回想録を見てみよう。

彼は、1931年(ママ)にウドン省委書記 Vo Van Kieu が病死したので、同書記の任を引き継いだ、タイ語も相当できるようになっていたのも、ウドン省委の共青团と宣伝も兼任した、と記している。(同上書, p. 57) しかし、Vo Van Kieu の死亡は1931年ではなく、1933年9月22日である¹¹³ので、もし彼が Vo Van Kieu の死後、ウドン省委書記に就任したのなら、1933年9月以降のことになるはずである。

続けて、Hoang Van Hoan は、1933年末(ママ)に Ngo Chinh Quoc がバンコクで逮捕されフラン

ス当局に引き渡された時、シャム執行委員会のメンバーに任じられバンコクに派遣された（同上書 p. 63）、と記している。Ngo Chinh Quoc が逮捕されたのは、III—5 に前述したように 1933 年 1 月 30 日、強制送還されたのは同年 3 月であり、年末ではない。しかし、シャム共産党執行委員会の唯一のベトナム人委員が逮捕・送還されたので、後任に第二回代表大会に Ngo Chinh Quoc とともに出席した Hoang Van Hoan が選ばれ、33 年末にバンコクに出てきたと読むことはできるかも知れない。

Hoang Van Hoan がバンコクに到着した当初、執行委員会は、彼を華僑学校教師の中国人の家に住ませた。間もなくこの教師の収入は家賃と自分の家族を養うだけでも不十分であることが判り、彼は新聞売りの仕事を始めた。新聞社で仕入れた新聞をかかえて、街を売り歩いた。その日の大ニュースを大声で怒鳴りながら。一日に 3 時間働いて、50-60 サタンから 1 パーツの収入があった。月に 2 パーツが借家料、3-5 パーツが食費、1.5 パーツがタバコ代であった。当時バンコクにいた党幹部のベトナム人は彼と Tran Van Chan (Tang) のみであった¹¹⁴。党書記長¹¹⁵は病気で Tran Van Chan が書記長代行として、インドシナ共産党海外指導部と連絡し、またインドシナ革命支援を行った。Hoang Van Hoan は執行委員会の宣伝の責任者を担当した。その仕事は忙しくはなく、①各地の党組織が出版した新聞、雑誌の管理、②華人党員が書いた記事（3 月 8 日国際婦人デー、メーデー、ロシア 10 月革命などの）をタイ語訳すること、③新聞を売る時やシャム人労働者・農民と一緒にいる時に口頭で宣伝をすることであった。1934 年にはバンコクの革命情勢は、はずみがついた。精米所、鉄道、タクシーの労働者がストを起した。スト労働者の多くは華人であったがシャム人もいくらか参加した。ストは自然発生的なもので、華人党員の役割は副次的であった（同上書、pp. 63-65）

一方、東北タイでは越僑党員はシャム人と密接な関係を作り、共青团、労組、農会が各地に生じ、減税要求・強制労働反対 [人頭税反対闘争—筆者] の小規模な農民闘争が行われた。また、コーラートの師範学校では数百人の学生が学校当局の規制と新聞閲覧禁止に反対して立ち上がり勝利した。大衆の闘争は盛り上がったが、明確な方向を欠いていた。党の闘争は通常、国際記念日にピラを撒き、赤旗を掲げるか、少人数の集会で戦闘的革命家になるように求めるだけであった。

1932 年からシャム当局は激しい共産党迫害を開始した。華人党員は多数の華人がいるので逃げることは比較的簡単だが、越僑は東北タイ全体で 2~3 万人、比較的大きな越僑コミュニティのあるウドン、サコンナコン、ナコンパノムでも数千人に過ぎないので、越僑の弾圧は容易であった。ピラ撒きの後には必ず越僑の家が捜査を受けた。1934 年は、在暹越僑に対するシャム政府の白色テロの年であった¹¹⁶。ナコンパノム、ウドン、サコンナコン、ムクダーハーンなどでシャム警察は越僑の家に共産党のピラを故意に差し込み、それを口実にして逮捕した。そのため越僑は恐れ、彼らの中の共産党支持者数は減少した。これは問題だと誰もが思った。しかし、1936-37 年にバーンクワン獄中で党員が議論を始めるまで放置されていた。Hoang Van Hoan は党の戦略、戦術に疑問をもった（同上書、pp. 65-67, 76）。

コミンテルンからシャム共産党とマラヤ共産党の指導を託されたというインドシナ共産党海外指導部の方針は、シャムの越僑の実態と乖離したものであった。Hoang Van Hoan は、海外指導部の方針に疑問をもち、その一因が海外指導部と連絡を担当しているシャム共産党書記長代行の Tran Van Chan (Tang) が、海外指導部にシャムの闘争の成果を過大に報告していることにあるのではないかと疑った。

Hoang Van Hoan の回想録は、この点に関し次のように記している。

1934年当時、インドシナ共産党海外指導部は、時々『ボルシェビキ』という雑誌をシャムの党に送ってきた。同誌は非妥協的な闘争を唱え、「共産党組織をやっと回復したばかりの地域では大衆闘争は控えた方がよい」という主張をした同志を右派と非難していた。[本稿164頁の思想の左右傾向1を参照] Tran Van Chan (Tang) が、1934年5月インドシナ共産党海外指導部が開催した拡大会議¹¹⁷に出席する際に、Hoang Van Hoan は Tang に自分の考えを海外指導部のリーダーに伝えるように頼んだ。しかし、帰ってきた Tang は、コミンテルンはインドシナ共産党海外指導部にマラヤ共産党とシャム共産党を援助・指導する任務を託した、海外指導部の意見は越僑の活動の方針に依然変更はないというものだ、と語った。Tang は上記『ボルシェビキ』誌の主張と同じことを繰り返すだけで、最後の一人になるまで戦い続けると言い張った。Hoang Van Hoan は Tang が、インドシナ共産党海外指導部で、シャム共産党の成果を誇大に報告し、困難は過少に報告したので、海外指導部が満足して越僑の活動方針に変更なし、としたのではないかと疑った¹¹⁸。このようなことを考慮して、Hoang Van Hoan はシャム執行委員会に中国に頭痛の治療に行く許可を求めた。Hoang Van Hoan はバンコクのシャム執行委員会の宣伝担当を1年以上務めた。持病の頭痛に苦しみ、バンコクの2年間に3回入院した。

同郷の先輩で中国国民党軍将校として任官していた Ho Hoc Lam を南京に訪ね、治療費の援助を求めるつもりで、1935年3月にバンコクを発つた。香港までは Tran Van Chan (White-haired Tang, 曾白頭) が同道した。1935年4月、船の3等客室で香港から汕頭を経て上海へ、上海からは汽車で南京に向かい、Ho Hoc Lam を訪ね、彼の家に住み込んだ。シャムを追放された6同志を受け取りに1935年9月に南京に来た Ha Huy Tap (何輝集) [インドシナ共産党海外指導部のトップ] に会って、やっと直接に海外指導部に、自分の考えを伝えることができた(同上書, pp. 66-67, 76-77, 84, 中文書では pp. 61-62, 71)。

Hoang Van Hoan の記述が正しければ、1934年7月の第三回代表大会以前から Tran Van Chan (Tang) は書記長代行、Hoang Van Hoan は宣伝担当責任者であったことになる。第二回代表大会の準備は、同大会で選出された幹部が担ったが、同様のことが、第三回代表大会準備段階の時期についても言えるのかもしれない。あるいは、Hoang Van Hoan の回想録は編集が不十分で、年月日には怪しいものが多いので、これもその例と見るべきであろうか。

なお、1934-35年時の東北タイにおけるシャム共産党の活発な活動は、次の事例からも窺うことができる。例えば、1935年3月12日に、ウドン県クンパワピー郡 Pakho 村の仏教寺院の門外で、39歳のタイ人男性が、シャム共産党、シャム共青团、シャム反帝大同盟、シャム婦人会連名の「シャムの白色テロを批判する」、「国際婦人デー記念」と題したソビエト政権樹立を訴えるビラを撒布した。彼は運悪く、村の少年たちに目撃されて逮捕された。この寺は丁度お祭り中で多数の人が集まっていた。当時コーンケーンからウドンに向けた鉄道の延長工事がこの村の近くで行われており、多数の労働者が居住していたが、彼は労働者集めを業とする親方であった¹¹⁹。これは東北タイでシャム土着民を対象とした活動が行われていたことを示す一例である。また、同年3月15日の夜には、ウドン市内の映画館の出入口でシャム反帝大同盟のビラを撒布した27歳のタイ人男性が逮捕された。

後者に対するウドン裁判所の1936年5月9日の判決文では、「ウドン県における共産主義のピラの秘密裏の撒布は、現在は極めて頻繁でかつ一回の撒布枚数も大量である。ある時には殆ど全ての道にピラがあふれ、ある時には政府の庁舎の上に赤旗が立てられる。しかし、この連中は賢く、また支持者が多いので、犯人を逮捕することは困難である」と述べている¹²⁰。

東北タイのナコンパノム県知事が1935年度（1935.4-1936.3）の報告として本省に提出した文書によれば、同県は同年度中に重要な共産党員38名（バンコクの中央委からの派遣員、県委員会委員を含む）を逮捕し、強制送還に備えてバンコクに送った¹²¹。国外に強制送還されることになるのであるから、この38名はベトナム人であろう。1935年6月11日には、バンコクの軽罪監獄に収容されて国外追放処分を待っていたベトナム人（タイ語ではYuan, 英文ではAnnamites）共産主義者のうち、72名（全員男性、うち仏印籍が44名、シャム籍が28名）が、一日2回の水浴び回数、詰め込み収容の改善、同所に収容中の女性家族訪問の許可、食事の改善、処分の早急な決定を要求して、食事後一ヶ所に集まって獄房へ戻ることを拒否するというストを起した。獄吏との間に衝突が生じて、ベトナム人側に死亡者1人負傷者28名を出した¹²²。

IV—4、シャム人初の党執行委員、サワット・ピウカーオ

次に、第三回代表大会で、9名の執行委員の1人に選出されたシャム人、サワット・ピウカーオ（Sawat Phiukhao, 偽名 Surin）について見てみよう。1934年7月27日に開催された第三回代表大会には、逮捕を逃れた、21人の同志と2人の執行委員（中央委員）が参加したが、その中にシャム人は一人もいなかったことは本章初めに述べた。この記述が正しければ、シャム人であるサワットは、代表大会に出席することなく、執行委員に選出されたことになる。

筆者の知る限り、サワットの経歴を僅かでも記した研究書は存在しない。ここに紹介する彼の経歴は、筆者がサワットの4男である、タイ共産党元党員ソーボン・ピウカーオ氏（Sophon Phiukhao, 1952年生）との、ノンタブリー県およびノンカーイ県ターボー郡でのインタビュー¹²³で得た資料に基づいている。但し、サワットの経歴には、実子にも判らない部分が少なくない。

サワットは東北タイのノンカーイ県ターボー郡ターボー村のシャム人農家に生まれた。純粋にエスニック・ラーオであり、先祖にはベトナム人も中国人もいない。サワットは、兄一人、姉二人の4兄弟姉妹の末っ子である。兄はターボーで農業に従事した。姉の一人は、戦後ラオス側のサワンナケートでサワットとともに党活動をしたことがあり、その後ナコンパノムでタイ人と結婚した。その子どもにはタイ海軍の大佐やタイ航空のパイロットがいる。

サワットは1971年10月24日に死亡した。当時サワットの長男は既に病死、2男から4男まではタイ共産党の武力闘争に参加していた。サワットと同居して死亡時に立ち会ったのは、5男と次女のみであった。

ソーボーン宅に残るサワットの晩年時の写真の下には、「仏暦24〇〇年10月6日生まれ、仏暦2514年〔西暦1971年〕10月24日死亡、享年63才」と記されている。〇〇の部分は虫食いで読めないが、1971年に死亡した時、63才というのが正確なら、生まれた年は1908年となる。

ところが、サワットが1931年にウィエンチャンのフランス語・現地語〔ラーオ語〕小学校を卒業し



シャム人初のシャム共産党執行委員 Sawat Phiukhao (1931年撮影)

た際、フランス人のラオス行政理事長官が発行した卒業証書、「初等教育修了試験合格証書」(フランス語が左半分、同文のラーオ語が右半分。ラーオ語側の下方右側に青年サワット [当時は Sisavath という名一筆者] の写真が貼付されている) には、フランス語でも、ラーオ語でも共に、サワットは西暦 1918 年 11 月 6 日、Vientiane 生、1931 年 6 月 1 日にウィエンチャンで実施された、フランス語・ラーオ語初等教育の修了試験に合格したと記されている。この証書は、4 男の共産党員ソーボンが、タイ政府に投降して郷里のターボーの実家に戻ったのちに見つけ出したもので、この証書に添付された写真が、青年時代のサワットの唯一の残存写真であるという。

サワットの生年月日が、この証書の通りなら、彼は 1918 年 11 月 6 日生まれで、受験日が 1931 年 6 月 1 日だから、満 12 才の時に受験したことになる。しかし、卒業証書に添付されている写真(本頁写真参照)は、20 代の青年であり、12 才の少年ではありえない。1918 年は、1908 年の誤記の可能性が高い。また、証書にはウィエンチャン生と記されているが、彼が生まれたのはメコン河をはさんでウィエンチャンのほぼ対岸にある、シャム領のターボー村である。ウィエンチャン生れと偽った理由は、ラオスのフランス語学校は仏印籍者にしか入学を認めていなかったためであろう。

1931 年当時、ウィエンチャンにはフランス語教育の中等以上の教育機関は存在せず、サワットが学んだフランス語初等学校が同地の最高学府であった。この学校のレベルはシャム側よりも高いので対岸のシャム側の人間も好んで入学した¹²⁴。サワットが 1908 年生れだとすると 22 歳で、ウィエンチャンの小学校とは言え、最高学府を卒業したことになる。サワットは、タイ語、ラーオ語は当然として、フランス語、英語、ベトナム語の読み書きができ(中国語はできなかった)、ターボーの自宅にもフランス語の書籍多数を蔵していた。VI—1 で述べるように、1936 年 4 月 19 日に逮捕される前は、バンコクで

コミンテルン特派員のためにフランス語の通訳を担当した。

トン・チェームシーが、筆者に語ったところによれば、サワットはまずラオスでインドシナ共産党に入党し、その後シャム共産党に転じ、Le Manh Trinh によって党中央委員に抜擢された、という。サワットはベトナム人組織との関係が深く、1936年4月に彼が逮捕された時、結婚していた相手はベトナム人女性であり、男児をもうけていた。それに、下記のようにサワットは1936年に成立したインドシナ共産党ラオス地方委員会の創立者の一人である。

ベトナム人党员から成る東北部地方委員会は、華僑から成るバンコク市委員会以上にシャム人獲得に熱心で、かつ成果もあげたが（本章初めの第三回代表大会後の党組織、党员構成参照）、サワットの獲得は、後述のモスクワに向けて送り出した2名のシャム人の獲得とともに、その顕著な証である。

現ラオス人民革命党政治局員、元ラオス国会議長のサマーン・ウィニャケート (Samane Vignaket) は、ラオス人民革命党の前身であるインドシナ共産党ラオス地方委員会の成立について、次のように述べている。即ち

「インドシナ共産党ラオス地方委員会は、1936年に次の4名によって創立された。即ち Kham Saeng 同志、Sawat Phiukhao (Surin) 同志（この同志はウィエンチャンで土木関係の公務員をしたことがある）、Thit Phui 同志、Phandi 同志（この同志は共青团の長であった、パクセで逮捕された）である。ラオス地方委員会創立当時、同地方委員会下の党员数は32名で、6細胞に別れていた。共青团員は25人、労働組織は35人、反帝大同盟69人、婦人組織5人、学生知識人グループ20人であった。」¹²⁵

サマーン・ウィニャケート自身の経歴も極めて興味深い。彼はタイ国中部のピチット県でタイ人の家庭に生まれ、同市内に住んでいたベトナム人家族に貰われて、ベトナム人 Duc（徳）という名で育てられた。戦後ラーオ・イサラの軍隊で頭角を現わした。彼はラーオ・イサラ時代に活動し、かつ妻と結婚した土地でもある南ラオスのアタプーを公式の出生地としている。サマーンはタイ人に生まれ、ベトナム人として育ち、タイとベトナムの中間に位置するラオスの最有力者となったのである。

サマーンの言う1936年が正確であれば、サワットは1936年4月19日にはバンコクで逮捕投獄されているので、ラオス地方委員会創立は同年の4月19日以前ということになるであろう。また、上記引用中にある、サワットは「ウィエンチャンで土木関係の公務員をしたことがある」という注記は、事実であるが、それは戦後の話しである。

サワットら14名の逮捕投獄の原因についてはVI—5に後述することにして、出獄後のサワットを見て置きたい。サワット投獄後、彼の妻子の面倒を見たのは、ナム（Sahai Nam または Lung Nam とよばれる）という名の、逮捕を逃れたベトナム人党员である。ナムは、1963年に武力闘争方針を決定したタイ共産党が党员に軍事訓練を与えるために、ベトナムのホアビンに設立した政治軍事学校の責任者の一人であった。彼は1983年に死亡したが、党内ではトン・チェームシー系統に属し、最後はタイ共産党中央委員クラスであった¹²⁶。サワットの妻子は彼の投獄中にベトナムに帰った。子は、後にベトナム軍の大佐になったという。サワットが3年4か月の刑を終えて出獄したのは、1939年8月のはずである。彼は東北タイに戻り、郷里ノーンカーイのターボー村で、村長（ガムナン）の娘と結婚し、5男2女をもうけた。まず長女が生れ、続いて1942年に長男が生まれた。

サワットはタイ共産党の指導的なポストに戻ることはなく、戦後は東北タイ、ラオスで姉とともに党活動を行ったが、その後はラオス建設省の公務員として勤務した。この時代を父サワットとともに過ごした4男のソーボンが、最初に入学した小学校は、ラオスのシェンクワン県の学校であった。同地でサワットは建設省の道路建設の仕事をしていた。どこで身に付けたのか、サワットはエンジニアとしての知識があり道路建設の設計図をきれいに書いていた。ソーボンが小学1年の途中に、サワットは首都ウィエンチャンに転勤し、ソーボンも同地の小学校に転校した。当時は、サワットもソーボンもラオス国籍も有していた。小学2年生の時に、Kong Leのクーデター[1960年8月]が生じ、ソーボンは母と共に、タイ領のターボー村に戻った。一方、サワットはそのままウィエンチャンに残った。

サワットとタイ人の妻との間に生まれた5名の男子は、5男を除く4名が10代でタイ共産党の革命運動に参加した。1942年に生まれた長男は、1952年生れの4男のソーボンより10歳年上で、ウィエンチャンで学んだ。サワットはこの長男をフランスに留学させることも考えたことがあったが実現せず、長男は結局ラオスの党の活動に加わった。その1年後にはタイ共産党に移りトン・チェームシーの指揮下にあったが、1960年代半ばにサコンナコンの森の中で腸チフスで病死した。2男は、ベトナムのホアビンにあったタイ共産党の政治軍事学校で訓練を受け、その後中国に学んだ。最後はウドン県党委員会委員であった。3男も革命に参加。4男のソーボンは、父に兄たちに続けと言われ、革命運動に加わった¹²⁷。5男の弟およびその下の妹は革命に参加していない。一番上の姉は現在アメリカに住んでいる。

V、シャム共産党とインドシナ共産党海外指導部およびコミンテルン(1935年)

インドシナ共産党の第1回党大会が1935年3月27日から31日まで、同党インドシナ海外指導部の置かれているマカオで開催された¹²⁸。これに先立つ、3月14日に同党海外指導部とシャム共産党代表団との間に会議が行われ、次の11項からなる協定が成立した。この協定は、3月20日に発効した。この会議は、中国語文献では、「泰越革命聯席会議」と表現されている。この会議に出席したシャム共産党の代表はTran Van Chan (Tang) および劉漱石¹²⁹である。Hoang Van HoanはTran Van Chan (Tang)と同じ船に乗って、バンコクを離れたが、香港で別れ会議には出席していない。

仏印当局は、35年3月28日付けで某所に発送された同協定を入手し、フランス語に翻訳した。この翻訳文は7月19日付けで駐暹フランス共和国臨時代理公使G. Georges- Picotからシャムの外相に届けられた。筆者の知る限り、この協定内容を紹介した既存研究は存在しないので、ここに全文を翻訳して紹介するとともに、念のためフランス語原文を本稿末尾に付して置きたい。

V-1、「インドシナ共産党海外指導部・シャム共産党代表団会議の合意事項」¹³⁰

1935年3月14日。インドシナとシャムの革命運動は、世界革命のための二つの重要な手段を構成している。両国は地理的に近いだけでなく、一方の革命運動は他方に強く影響する。我々の二つの兄弟党は、各々の闘争の経験から互に利益を得ることができるよう、相互に緊密に団結し、あらゆる点で相互に支援をしなければならない。この目的のために、インドシナ共産党海外指導部とシャム共産党代表団は、会議を開催し、各々が実施すべき重要な任務を定めた。今後、両党は下記の規定に従わなけ

ればならない。

- 1, シャム共産党がコミンテルンと直接関係を有しない間は、インドシナ共産党は次の任務を行う。
 - a) コミンテルンの指令をシャム共産党に伝達し、シャム共産党のコミンテルン宛報告をコミンテルンに伝達すること。
 - b) コミンテルン、国際共青团、コミンテルン政治局、もしくはその他世界各地からの革命組織が大会を開く場合には、シャム共産党が代表を派遣ができるように、シャム共産党に通知すること。なお、このうち最後の場合については、インドシナ共産党から海外に教育のために派遣されている学生で、大会開催地に居住している者の任務とする。
- 2, シャム共産党は、海外から得たすべての革命文書および自ら印刷したすべての宣伝文書を、インドシナ共産党に送付しなければならない。一方、インドシナ共産党は、取得したフランス語、英語、ベトナム文字、漢字のすべての文書をシャム共産党に送付しなければならない。
- 3, インドシナ共産党員がシャムを訪問した際には、シャム共産党は〔彼らから指導を得るために〕彼らを党の政治教育活動に参加させなければならない。同じように、インドシナ共産党は、シャム共産党の中堅・上層幹部をインドシナ共産党の政治教育活動に参加させなければならない。
- 4, 旅費については、両党は次のように合意する。シャム共産党は、同党員がシャムからインドシナに入り、そこからシャム共産党あるいはインドシナ共産党の様々な細胞に戻るための移動経費を負担しなければならない。しかし、シャム共産党員がインドシナ以外の国からシャムに戻り、あるいはインドシナから第三国に行く経費はインドシナ共産党が負担しなければならない。
- 5, インドシナ共産党海外指導部(Dong Hai)とシャム共産党中央委員会は、協力して活動し連帯を強化しなければならない。インドシナ共産党海外指導部またはインドシナ共産党のグループに絡む重要な問題が生じ、インドシナ共産党が代表をシャムに派遣する必要がある場合は、シャム共産党はその派遣されてきた代表のために、生活可能で、確実に連絡ができ、また通信を受け取ることができる連絡所を確保しなければならない。この連絡所はインドシナ共産党とインドシナ共産党海外指導部との間の直通の連絡所としての役割をもつ。インドシナ共産党とインドシナ共産党海外指導部との間の、その後の通信は、シャム共産党中央委員会を仲介者として経由する必要はない。しかし、上記連絡所の賃借料およびその他の関連経費は、シャムにおける活動を監督するシャム共産党中央委員会の負担とする。シャム共産党はシャム領内においては、この連絡担当同志を指揮する。ただし、彼のインドシナ共産党に関する活動については、インドシナ共産党海外指導部が指揮権を持つ。この連絡所の役割は連絡活動に限定されており、指揮上の役割は有しないことを特記する。
- 6, ラオス国外代表はインドシナ共産党の指揮下に置かれる。北アンナンの細胞はアンナン執行委員会によって指揮される。しかし、例外として、その場で解決できない、組織や政治等の問題が生じた場合、あるいは、インドシナ共産党の上部との連絡が、障害のため完全に不可能な場合などには、ラオスの執行委員会とアンナンの細胞はシャム共産党に援助を求めることができる。しかし、そのような状況においても、シャム共産党は兄弟党の資格において、ラオス国外代表やアンナンの細胞に臨時の支援を与えることができるのみである。このような通常の活動の外に、シャム共産党はラ

オス国外代表の印刷活動を援助しなければならない。

- 7, インドシナ代表大会 [インドシナ共産党第1回代表大会] 終了後, インドシナ共産党はシャムに, インドシナ代表大会に出席した代表の一人を少なくとも一ヶ月間, シャム共産党の活動を支援するために派遣しなければならない。
- 8, シャム共産党はインドシナ共産党海外指導部 (Dong Hai) の活動を助ける女性党員を指名しなければならない。インドシナ共産党海外指導部とシャム共産党はこれらの女性党員の人数および派遣期間について合意しなければならない。
- 9, インドシナ共産党とシャム共産党は, 財政が危機に瀕した場合には, 全面的に援助しなければならない。
- 10, 各々の党は, その闘争について他方の党と通信し, それぞれの機関紙において, 世界革命の拡大に貢献する通信もしくはニュースを印刷しなければならない。
- 11, 本合意事項は, 1935年3月20日より実施する。今後, 改正の必要が生じた場合は, 両党は通信もしくは代表の仲介により修正することができる。

(発送 1935年3月28日)

インドシナ共産党の第一回党大会が終了した翌日, 即ち, 1935年4月1日付けで, シャム共産党執行委員会はコミンテルン執行委員会宛に書簡を出し, インドシナ共産党海外指導部を廃止して, それに代わり, インドシナ, シャム, マラヤ各共産党を指導するコミンテルン東方書記局の支部の設置を求めた。これは3名から成るシャム共産党代表団も参加したインドシナ共産党第一回大会で, 決定されたことに従ったものであった。本件については, 栗原浩英氏の詳細な考察がある¹³¹。

なお, 上記シャム共産党執行委員会の書簡には「組織的關係においてコミンテルン東方書記局の支部はコミンテルン東方書記局の直接指揮のもとにおかれる。これと並行して [シャム共産党は,] 上海の中国共産党とも関係をもたなければならない」¹³² という一節がある。シャム共産党代表団の一人で, シャム共産党における華僑組織リーダーのトップ, 劉漱石 (1899年広東省恵来県生, 1942年5月30日香港で死亡) を悼む追悼文 (タイ共産党の地下中国語機関誌『真話報』1943年4月2日号掲載) には, 彼はインドシナ共産党第一回大会出席前に, 「1934年 (ママ) 冬天, 漱石曾以代表的身份, “到上海与中国革命領袖会商, 及后出席泰越革命聯席會議。”」¹³³ と記されている。これから, 劉漱石は1934年冬天, 即ち1935年初めに, インドシナ共産党第一回大会出席に先立ち, 上海に中国共産党を訪ね協議したものと推測される。そうであれば, 1932年9月に開催されたシャム共産党第二回代表大会時点 (III-2 に示したように, この時, シャム共産党はマラヤ共産党に中共との連絡の仲介を要請している) では, 途絶えていたシャム共産党と中国共産党との直接ルートは, 1935年初には回復していたことを意味する。一方, シャム共産党執行委員会が, コミンテルン執行委員会にコミンテルン第7回大会開催以前に送った書簡では, 「この2年間に, シャム共産党は, 一方ではマラヤ共産党中央委員会との連絡を失い, 他方ではコミンテルンとの連絡, イギリス共産党との連絡を有さなかった。故に, シャムにおける革命的活動は全土で困難を極めた。シャム共産党を援助し, コミンテルンにシャムにおける革命運動を報告し, 2人のシャム人学生を勉学のために [モスクワに] 派遣し, 同時に, シャム共産党の選抜された代表達が

世界大会に赴くことが出来なかった際には、彼ら二学生をシャム共産党の代表としてコミンテルン第7回大会に参加させるように助言してくれたインドシナ共産党海外指導部のイニシャティブに感謝している¹³⁴（以下略—筆者）」と書かれているので、シャム共産党とマラヤ共産党は1933年半ばから連絡を失ったことが判る。

V—2、コミンテルン第七回大会（1935年7-8月）とシャム共産党加入申請

1935年7月22日付けで、シャム共産党執行委員会（中央委員会）は、コミンテルンに支部として加入したいという旨の文書を提出した。この文書の下には、「コミンテルンとしては本申請を支持する」という書き込みがある¹³⁵。

第6回大会以後に成立した19の党（18の共産党とトゥヴァ人民革命党）のコミンテルン加入を認めるコミンテルン第7回大会決議案が、1935年8月5日付けで作成された。同決議案には、各党毎に短いコメントが付されているが、シャム共産党には「シャム共産党は、獐猛な日本帝国主義がシャムを日本の植民地に変えた、正にその時にコミンテルンの綱領の下に団結したのである」¹³⁶というコメントが付されている。

8月10日にはシャム共産党を代表してRashiがコミンテルン加入を求めて次の内容の演説を行なった。ロシア語原文からの全訳は以下の通りである。

シャムは主としてイギリス帝国主義に支配されてきたが、最近では日本帝国主義がシャム乗っ取りを始めた。日本帝国主義が企図する東アジア・太平洋征服、世界再分割において、シャムは戦略基地として重要である。シャムにおける日本の活動の活発化は、日英間の対立を必然化する。また、シャムはフランスの太平洋における橋頭堡であるインドシナにも隣接している。シャムは、その地理的位置のために、帝国主義対立の中心地となる。

最近、日本のシャムへの影響力拡大は急速である。経済面では、日本は、シャム経済にとっては重要なコメおよび材木の輸出に関して、関税等の優遇措置を取っている。シャム国鉄の入札でも日本が落札した。シャムの経済使節や軍事使節が訪日して様々な協定を結び、相互関係を強化している。日本の圧力と影響力とによって、シャム国会はシャム海軍拡張計画予算案を承認した。1935年3月にプラチャーティポック王が退位した。同国王はイギリスを擁護しており、日本の計画の妨げになったので、王位を失うことになったのである。シャム政界では友好関係を持つべき帝国主義国に関して諸グループ間に見解の対立があるが、現在の政府内では、日本支持派が優っている。現在政権を握る人民党は、主に文武官僚から成っている。同党は人民の不満を利用して、1932年6月にクーデターで権力を獲得した。クーデター当初のラディカリズムは間もなく失われ、現在他の全ての政党を弾圧している。とりわけ、労苦大衆に対して影響力を増大させつつある共産党は、弾圧の主要な対象にされている。言論・集会の自由はなく、共産主義運動を報道したシャムの新聞雑誌は発禁され、国外の共産主義運動の記事を載せている華字紙は輸入禁止にされている。1933年4月にシャム政府は反共法を施行し、10年の刑と重い罰金を課すようになった。今年[1935年]の最初の5ヶ月で500人の革命家が逮捕されたが、その多くは共産主義者である。政府のテロルを受けているのは、正にシャムの労苦大衆のために闘争した結果である。失業者が増大し、賃金は低下している。米価が安すぎて、農民は生活ができず、税[人頭税

のこと一筆者]も払うことができない。下級官吏は給与が切り下げられるだけでなく、彼らの多くが解雇されつつある。危機の時代がもたらした高課税と強奪による圧迫のために、シャム大衆の闘争は高潮している。1932年以來、タクシー運転手、市電労働者、国鉄労働者などのスト、課税に反対する農民数千人のデモ、学生の罷課、政治犯のハンガーストライキが生じた。多くの闘争は自然発生的なものであるが、最近では共産党の指導によるものが増加している。若い我がシャム共産党は、大衆獲得と反帝国主義人民戦線の組織化という大きな任務をもっている。

シャム共産党は1930年に華僑とインドシナ人の両方のグループにより結成された。シャム人は、最近になってやっと参加するようになったが、依然として少数である。現在党員数は約200人、共青团員は約100人、労組、反帝大同盟、MOPR(国際赤色救援会)などの大衆組織では約1000人である。最近、共産党は相当に強化されたが、未だ民族主義的、セクト主義的傾向が強く残っている。多くの党員は大激変を起すことのみを考えて、大衆工作を怠っている。我々は我々の隊列からセクト主義を根絶し、大衆獲得のために決定的な方向転換をなすべきである。我国に住むシャム人および多数の少数民族の間で工作を発展させなければならない。シャム共産党は、帝国主義戦争に反対し平和を求める闘争の重要性を、よく理解し全力を傾注すべきである。何故ならば、この任務は帝国主義の利益が衝突し、帝国主義的乗っ取り屋が、世界再分割における戦略的拠点と見ている国[シャムを指す一筆者]の共産党によって担われなければならないからである。我々の任務は、次の通りである。我国を奴隷化しようとする戦争屋たち、日本の帝国主義者および全ての帝国主義者に対して、平和のために戦うことができるように、統一戦線を作ること。戦争が大衆にもたらす災禍を飽くことなく大衆に説明すること。陸軍・海軍の中での工作を発展させること。中国のソビエト区および労働者の祖国であるソ連を支援するために戦うこと、である。

シャム共産党は未だ若く、闘争経験は少なく、多くの間違いを犯してきたが、コミンテルンの旗の下で、レーニン・スターリンの大義に忠実に闘う決意には、際限はない。コミンテルンの指導の下で、シャム共産党は、大衆を率いて世界戦争の挑発者に反対し、世界革命のために闘う¹³⁷。

上述のように用意されたコミンテルンの大会決議案は、シャム共産党のコミンテルン加入を認めており、かつ、シャム共産党代表Rashiがコミンテルン加入を求める演説を行った。それにも拘らず、結果的にはシャム共産党の加入は見送られた¹³⁸。

なお、Rashiの演説は、当時のシャムにおける日本の実力や意図を遙かに超えて、日本の役割を過度に強調している。これは第七回大会におけるコミンテルンの路線変更を反映したものであろう。この後、シャム共産党は反日キャンペーンを活発化させた。その一例としては、1936年3月に安川雄之助を団長とする、邦人実業家6名から成る訪暹経済使節団が、シャムを訪問したが、シャム共産党は1936年3月末にバンコク市内で、タイ語の「大衆之声」、「暹羅共産党宣伝股」のビラを撒布し、シャムに向けて渡航中の日本の訪暹経済使節団に反対した¹³⁹。また、華字紙の副刊などにも、中国の新たな抗日運動を支持する論説が出現した。その初期のものとしては、共青团員の学生、林南中が執筆した「学生救亡運動感言」¹⁴⁰がある。

V-3, モスクワに派遣されたシャム共産党員 Rashi と Ratana

コミンテルン第七回大会で報告したシャム共産党代表 Rashi¹⁴¹ とは何者であろうか。

タイ国共産党の最後の総書記トン・チェームシーによれば、シャム共産党は1930年代半ばに、3名をソ連に向けて派遣した。一人は、Bich, またはティエン (Thien) と言い、ベトナムに生れウドンに移ってきたベトナム人である。当時ウドン県に存在した中学校は、国立のウドン県模範学校であった Udon Phithayanukul 校¹⁴², 一校のみであったが、トンが同校の中学2年に在学時に、Bich は同校の最高学年である中学7年生であった。[但し、後述の Thien 自筆履歴書は中学2年卒と記している] 二人目は、コーンケーンの公立小学校の教師で、同地生れのシャム人 (エスニック・ラーオ) であった。彼は途中の上海で逮捕されたため、モスクワには到達できなかった。彼のその後の消息は不明である。三人目は、プーン (Phun) と言うシャム人で、コーラートの製氷工場の労働者であった。シャムからモスクワに到達できたのは、Bich (Thien) と Phun の二人である。Bich (Thien) は、1938年に陸路でシャムへの帰路途中、中国・ベトナム国境を通過した。国境のフランス当局の検疫所で、彼の正体を知るフランス当局は、予防接種だと偽って毒入りの注射を打ち殺害した。後にベトナムの党は彼のためにハノイで追悼会を行った。他方、Phun は、陸路ではなく、船でバンコクに入り、無事帰国できた。1950年前後には東北タイのシーサケート県でトンらとともに農村工作に従事した。しかし、Phun は、ウォッカを飲むのが好きな酒浸りの労働者で、党内で幹部になることなく早世した¹⁴³。

Bich または Thien という名のベトナム人について、Hoang Van Hoan は「ベトナム青年革命同志会の殆どのメンバーおよび合作会の青年活動家の多くがシャム共産党に入党を認められた。彼等は、シャムを理解するためにタイ語の学習に熱心になり、Bich: 碧 (別名, Thien: 天) や Huong: 郷 (別名, Xom: 宋) は、シャム人の学校に入学してタイ語を学習した」¹⁴⁴ と書いている。ここにいう Bich がトンのいう Bich と同一人物と考えて間違いない。また、Huong は、VI-6 の Huong と同一人物であろう。



シャム共産党がモスクワに派遣した Rashi (Phun Sridanrat) (向かって左側) と Ratana (Tu Vu Van)



Thong Chaemsri 氏と筆者（2009年9月5日、同氏居室前にて撮影）

また、筆者を代表者とする科研費の研究協力者、関東学院大学講師島田顕氏の2009年9月における、モスクワのルガスピ（RGASPI、ロシア国立社会政治史文書館）での収集資料から次のことが判明する。すなわち、Rashi（Rachiとも書く）は、Pun Sitanratana, Chand Karam, Fun Sitanuarat, Sanguanなどの名を用いる、1911年生れのシャム人である。彼は、1934年から36年までモスクワの民族植民地問題科学研究所（NIINKP）で学び、コミンテルンの第七回世界大会に参加した。ロシアでジーナという名の女性と結婚したが、1938年10月にシャムに帰国した。

RAGSPIに保存されている、Rashiの自筆履歴書と考えられるタイ語文書を全訳すると、次の通りである。即ち、「私はコーラート県生まれのタイ人で、父は陸軍の下士官、母は中国人ブルジョワ女性の養い子である。私はこの中国人の家で育った。両親は私が9歳の時に離婚した。私は8歳で小学校に入学し、15歳の時に中学2年を卒業した。卒業後8カ月間、この中国人女性の製氷工場で労働者の監督として働き、その後2年間、氷配達用トラックの運転手をした。続いて別のブルジョアの下で3年間トラック運転手をしたのち、バンコクに出て1年間タクシー運転手として働いた。その後、郷里に戻り、前の製氷工場で働いた。1934年7月にシャム共産党に入党し、労働者工作を担当した。現在25歳である。母は存命しており、兄が一人いる。兄はバンコクの商店で運転手をしている。彼はシャム社会党〔人民党急進派を指す—筆者〕のメンバーである。社会党首〔フリーディー・パノムヨンを指す—筆者〕は、経済計画を実施しようとしたが失敗し、ブルジョア側側に寝返り、内務大臣に就任した。そして兄を含む党員たちをスパイに仕立てた。私は結婚したことはあるが離婚した。言語は現地語の外に、潮州語を少々知っている。英語はほんの僅かしか解らない。プーン・シーダンラット（Phun Sridanrat）」（RAGSPI Fond 495, opis 260, delo 9, list 33）。

Rashi は、ロシアでの教育に適応できなかったようで、頭が悪いので本を読んでもほとんど理解できないから早く本国に帰国させて欲しいという訴えの手紙や監督者が官僚主義かつ差別的で自分には上着を買い与えないという不満を訴えた手紙を書いている。また、帰路の途中のアメリカから妻ジーナに宛てた手紙も保存されている。

Rashi の外に、ラタナ (Ratana) と称するベトナム人 (本名は Tu Vu Van のようである。Ratana, Vun Tien, Ten Tang Van, Vo Van Kyu, Leo Nardo, Shovduri Pratap という名も用いた) がいる。

1910 年生まれのラタナが、Thiên Tăng - Vãn の名を用いて書いた、ベトナム語の履歴書も RAGSPI に保存されている。その内容は、

「私はゲアン省の貧農の家に生まれた。…11 歳の時に母は私をフランス語・ベトナム語学校に学ばせ、初級課程を卒業した。15 歳の時にシャムに出洋する運動に加わり、シャムに行き、在暹アンナン少年団に加入した。在暹アンナン青年団体によって養成され、シャム語、英語、仏語を学習し、シャムの中学校 (8 年制学校) の第二学年を卒業した。在暹アンナン青年団体がシャム共産党に改組された時、シャム共産党青年団への加入を認められた。23 歳でシャムの徴兵を終え、シャム国籍を得た。1934 年 1 月に、シャム共産党に入党し、土人運動委員会 [161 頁参照一筆者] の仕事を担当した。現在、24 歳で独身である。シャム語、アンナン語の外に、文字は読めないがラーオ語も理解できる。英語、フランス語は少々判るだけである。」(RAGSPI Fond 495, opis 260, delo 10, list 73)

彼も第 7 回コミンテルン大会に参加し、民族植民地問題科学研究所 (NIINKP) での学業のためソ連に残った。彼は学習意欲が高く、理論的にも一定の水準に達し、ロシア語修得にも熱意を示した。両者は 1938 年 9 月に出国して帰路についた¹⁴⁵。

両者は 1937 年 2 月時点で、既に帰国の準備を進めていた¹⁴⁶。出発が何故、それから 1 年半後も遅れたのかは不明である。

トン・チェームシーが筆者とのインタビューで語った内容と RAGSPI 資料とは、殆どの点で符合している。トンの言うシャム人 Phun は、レガスビ資料ではプーン・シーダンラットという名も用いた Rashi のことであり、Ratana とはベトナム人で、ゲアンから東北タイのウドンに来て革命運動を続け、シャム人革命家獲得のためにシャムの学校にまで入学してタイ語を習得したベトナム名 Bich (本名 Tu Vu Van) であると考えてよい。

東北タイのウドンのベトナム人 Ratana と、同じく東北タイに位置しベトナム人から成る党支部が存在したコーラートのシャム人労働者 Rashi とは、シャム共産党内のベトナム人組織、東北部地方委員会がオルグしたものであることは明白であろう。それ故、両者の存在は、タイ共産党のベトナム人リーダー、例えばタイ共産党最後の総書記トン・チェームシーには自明のことであった。しかし、華人リーダーは噂程度にしか知らなかったようである。例えば、1960-70 年代のタイ共産党内の 3 大派閥 (ウィラット・アンカターウォン派、トン・チェームシー派、ダムリ・ルアンスタム派) 中、ダムリ派の総帥である潮州系華人の元政治局員ダムリ・ルアンスタム (1923 年バンコク生) は、シャム共産党がソ連に派遣した党员について、「ロシアに留学したシャム共産党员がいたという話は聞いたことがある。彼らは東北タイのベトナム人たちが送ったものであろう。ロシアに行った共産党员には、ロシア人女性と結婚

してそのままロシアに留まった者もいるようだ。シャムに帰ってきた者も共産党内において何の役割も担わなかった」¹⁴⁷と筆者に語った。

VI. コミンテルン特派員 Ly Phuc Minh の来暹とベトナム人組織の分裂(1936年)

コミンテルンからシャム共産党に特派された指導員(Datiという名を使用)が香港に到着したのは、1935年10月10日のことである。彼を迎えるためにシャム共産党書記長のTran Van Chan(Tang)が香港を訪問した。香港での最初の会見で、見解の隔たりからDatiとTran Van Chanの対立が始まった。バンコクに到着後、DatiはLe Manh Trinh副書記長と結んで、Tran Van Chanを党指導部より追放した¹⁴⁸。Tran Van Chanは東北部に戻って活動を続けるが、1936年3月19日にコーンケーンで逮捕された。それから1か月後の4月19日午後、バンコクのシャム共産党中央は警察の急襲を受け、モスクワから派遣されたと言われる特派員Ly Phuc Minh(Lý Phúc Minh, 李福明)、シャム共産党書記長Le Manh Trinh、シャム共産党執行委員中の唯一のシャム人、サワット・ピウカーオら14名が一網打尽にされた。以上からDatiという名を用いた人物は、逮捕されたLy Phuc Minhであると考えて間違いない。

ここでは、コミンテルンのシャムへの指導員特派計画、次いでコミンテルン派遣の特派員の報告から、当時のシャム共産党の様子を見てみよう。その後、Tran Van Chan, Le Manh Trinh, Ly Phuc Minhらの逮捕、コーンケーン暴動などについて説明し、1936年末に至るシャム共産党内でのベトナム人組織の活動を明かにしたい。

VI-1. コミンテルン特派員 Dati (Ly Phuc Minh) の報告

コミンテルン中央は1935年7月の第七回大会以前から、シャムに指導員を派遣することを検討していた。日付は不明だが、内容から1935年前半に作成されたと思われる「シャムに関する提案」と題した文書では、次の5項目を提案している。

1. シャム共産党の活動に、1年の期間で2人の同志、すなわち中国人、インドシナ人を派遣すること。中国人の同志は、当地で10日間のうちに選定する(責任者は王明同志である)。インドシナ人同志はインドシナ共産党海外指導部が任命する。
2. 活動に派遣する中国人同志に携行させて、総額250米ドルを党活動費補助金として一回限り与えること。
3. 中国共産党、インドシナ共産党の名で、シャムの共産主義者に宛て公開書簡を書くこと。書簡は、現段階のシャム共産党の重要な諸課題に光を当てること。書簡草案の作成のため、ヴァシーリエヴァ、王明、ハイヤン[Le Hong Phong]からなる委員会を設ける。責任者はヴァシーリエヴァである。期間は20日とする。
4. シャムにフランスと中国を経由して中国語、インドシナ語の次の文献を送ること。[文献名省略—筆者]
5. OMS[国際連絡部]にシャム共産党とマラヤ共産党(シンガポール)との連絡を組織することを提案すること¹⁴⁹。

上記「シャムに関する提案」の第1項にいう、コミンテルンがシャム共産党のもとに派遣するインドシナ人同志は、インドシナ共産党海外指導部が任命するという提案が承認されたかどうかを示す資料は未見である。VI-2に後述するようにインドシナ共産党海外指導部と思われる機関からコミンテルン本部へ宛てた報告は、シャムにおけるDatiの活動に対して高い評価は与えていないので、Datiは同海外指導部が選任した人物ではない可能性もある。

Dati即ちLy Phuc Minhと思われる人物は、1935年11月末頃バンコクからシャム共産党に関する二通の報告書(ドイツ語)をコミンテルンに送付した。二通とも、「1935年12月19日にIndochinaから」、「1936年1月9日受領」と文頭に記載されている。

バンコクで書かれた両報告書が、どのようなルートでモスクワに到着したかを推測すれば、「インドシナから」と文頭にあることから、マカオのインドシナ共産党海外指導部を経てモスクワに送られた可能性もある。何故、この文書がドイツ語であるのかは判らないが、筆者の依頼で本文書を翻訳した元同僚のKurt Radtke教授は、文章表現からオリジナルはフランス語であるはずだと推測している。本文書はドイツ語原文でも意味不明な部分が6-7ヶ所はあるようで、それらの部分は当然英語にも翻訳できないが、ここではラドケ教授の英文への翻訳に、筆者の少々の推測を加味して大体の内容を解説して見ると以下ようになる。

まず、第1報告に関しては

「私は、11月13日付けで前信を書いた。11月18日から、私はインドシナ人の同志Etun-gamと共に、宣伝部に泊まっている。バンコクにおける唯一のシャム人同志であり中央委員会(執行委員会)のメンバーである人物はフランス語ができる。党政治局(常務委員会)は3名から成り、うち2名は中国人、1名がインドシナ人である。インドシナ人は党の書記長を兼ねており、30歳を越えた、ベトナム青年革命同志会以来の熱心な活動家である。しかし、仕事のやり方は、まだ原始的である。彼はインドシナ共産党海外指導部から送付されてくる文書を読んでおり、主要な問題は理解している。彼はインドシナ語の外に、タイ語はかなり、フランス語はいくらか読み書きができる。他方、二人の中国人政治局員は、一人は建具大工で、もう一人は学校教師である。両人とも家族持ちであり、生活のために働かざるを得ない。そのため全ての党の任務はインドシナ人同志一人によって実施されている。彼らは、私を書記長と常に連絡を保つ顧問として承認した。これらの同志たちは、今まで自分たちができることは全部やったようだが、仕事ぶりは悪く、遅く、仕事の見通しも持っていない。東北部で闘争の経験をもつインドシナ人の書記長を除けば、党中央の政治レベルは低く、階級についての知識も低い。彼らにとって、革命は全身全霊を投じるものではなく、ただ遊び半分に時間をつぶすだけのものようだ。自然発生的な闘争が多数生じているにも拘らず、党幹部たちは、大衆は闘争を欲していないと文句を言っている。私は、共産主義者とは何かという初歩から初めなければならない。バンコクでは海外から容易に出版物を入手できる。中国からは既にInprekorr誌を二回受け取った。シャム政府は郵便小包の開封検査を行っていない。党には何の書籍もないので、次の書物を欧州もしくは中国から送って欲しい。(書名省略一筆者) 英語版またはフランス語版のInprekorr誌とCommunist International誌も送付して欲しい。書物を送る時は、カバーをブルジョア出版物のカバーと取り替えて欲しい。送り先はシャム国、バ

ンコク、パートサーイ路 81-83 番地、新華書局¹⁵⁰である。」¹⁵¹

この報告からは、シャムに派遣され、同じベトナム人の党書記長の顧問となったコミンテルン特派員の高い意気込みが読みとれる。このベトナム人書記長が誰であったのかは、後ほど検討することとして、ここではコミンテルン特派員の積極性が、独断的に発揮されたためにシャム共産党のベトナム人の活動は潰滅に近くなるほどの大打撃を受けたことを指摘しておこう。この報告中にあるシャム人の党中央委員でフランス語ができる者とは、サワット・ピウカーオを指すことは間違いない。

本報告は、中国人指導者の党活動に極めて低い評価しか与えていない。二人の中国人政治局員（常務委員）のうち、一人はインドシナ共産党海外指導部とシャム共産党との聯席会議にも出席した劉漱石であることは間違いない。当時、彼はバンコクのバーンラムプー（新城門）にあった華僑学校、培民学校¹⁵²の教師であり、家族もちで女兒もいた。もう一人の建具大工が誰であるかは今の所、見当がつかない。劉漱石が 1939 年 9 月に逮捕され国外追放になった後、共産党のトップリーダーとなった李華とも考えられるが、李華は、1935 年末には劉漱石と同じ培民学校の独身教師であり、家族持ちの建具大工ではなかった。但し、「建具大工」という訳については、オリジナルからドイツ語に訳された際に、誤訳が生じた可能性も捨てきれない。

ところで、華僑共産組織の活動に対する低い評価は、実態を反映したものであろうか。これについては、ベトナム人のコミンテルン特派員 Ly Phuc Minh は、ベトナム人系列の組織についてしか十分な情報を得られず、華僑共産組織の活動については十分な知識を有していなかったのではないかという疑問もあり得る。その根拠の一つとして、1936 年 4 月 19 日に逮捕された、彼を含む 14 名中には華僑共産組織の幹部は含まれていないことを挙げることができる。

次に、第 2 報告を見てみよう。第 2 報告は、報告時点、即ち、1935 年 11 月末のシャム共産党組織について報告している。第 2 報告¹⁵³は第 1 報告と同様に意味不明な部分も少なくなく、かつ途中で切れている。しかし、幸いに、第 2 報告は、ロシア語でも作成され、クーシネン同志宛てインドシナから（書簡群）と題した文書¹⁵⁴に再録されている。ここでは両者を基に内容を紹介したい。

「シャム共産党の現状は、次の通りである。黨員数は 130 人で、うち中国人が 70 人、残りがインドシナ人である。党活動はバンコクとインドシナ人の多い東北部で活発である。北部には 3 名の黨員から成る支部、南部には 8 名（全員中国人）から成る支部が存在する。黨員の 30% は労働者、15% は農民である。

共青团員は 50 名で、うちバンコクに 40 名、東北部の 2 支部に 10 名が存在する。団員の 50% は知識份子、20% は労働者である。

バンコクの諸労働組合の組合員合計数は 30 名（ママ）で、うち 15 名が製材所、6 名が印刷所、10 名が縫製労働者である。Xurien [地名不詳一筆者] には 8 人の精米所労働者の労組があり、うち 7 名はシャム人、1 人はインドシナ人である。ウドンには、全員がインドシナ人である製材所労働者の労組がある。合計すれば、労組員は 60 名である。

農会にはバンコク近郊に 7 名から成る組合とウドンに 7 名から成る組合がある。

バンコクに 40 名から成る反帝大同盟があり、その監督下に 30 名の普羅列塔利亞（プロレタリア）芸

術聯盟，50名から成る学生聯合会が存在する。一方，東北部の反帝大同盟は約100名のメンバーを有し，その監督下に150名から成るMOPR（国際赤色救援会）が存在する。

婦女協会は60名の会員を有し，全員がインドシナ人である。

シャム人の中での活動は未だ大変弱い。東北部のインドシナ人同志たちは，シャム語を学び，シャム人の中で活動しようというスローガンを掲げている。一方，バンコクの中国人同志たちはシャム語を話せないし，バンコクには，シャム人同志はわずかに1名，シャム語ができるインドシナ人同志が4名いせだけである。シャム人同志の欠如は，党が長らく誤った方針を続けてきた結果である。それが，党がシャム人労働者と接し彼らを組織することを妨げている。実際にはシャム人労働者の自然発生的で大規模な闘争が生じているにも拘らず。（以下，シャム人労働者の自然発生的闘争について多数の例示があるが省略する。一筆者）党の現在の課題としては次のものがある。①党組織の強化，②大衆組織の強化，③シャム大衆組織化への全力投入④農村に同志を派遣して農民大衆に対する活動の拡大⑤広範な反帝国主義戦線の結成⑥全国規模での勤労者戦線の結成，不定期の党機関誌，理論誌の発行，定期的なシャム語，中国語新聞の発行。これら全ては多大な出費を要する。単にバンコクと北タイとの間を往復するだけでも30パーツ（約300フランスフラン）を要するのだ。最近の書簡に書いたことを繰り返すが，我々に1000ドルを支出されることを求める。これは我々に大きな活動の可能性を開き，加えて我々はインドシナの党のために出版物を印刷発行して援助することができるようになる。」¹⁵⁵

第2報告に示された数字は，大まかで正確さには疑問がある。例えば少数であるにせよシャム人党员が存在していることは明白であるにも拘らず，中国入党员とベトナム入党员のみしか挙げていない。また，各組織の構成人数も第三回代表大会後，1935年初に作成された，IV—2に前掲した『報告』に示された数より大幅に少ない。『報告』の数字が過大だったのか，約1年の間に，政府の弾圧で党組織が大幅に縮小したのか，あるいは，Ly Phuc Minhが来遅してから日も浅く，しかるべき党幹部の協力を十分には得られてはいなかったために，党組織を完全には把握できていなかったのか，など，様々な説明が考えられるであろう。

VI—2， 党書記長の交代とベトナム入党员の分裂

コミンテルン特派員のLy Phuc Minhが，来遅後，既存の指導部を厳しく批判し，熱心だが独断的，性急に仕事を開始したため，半年もしない間に，シャム共産党，すくなくとも同党のベトナム系組織は大混乱に陥った。更に，シャム人労働者の組織化を重視する余り，不注意かつ性急にシャム人に対する活動を拡大させたために，スパイの潜入を許し，ベトナム人系党組織は壊滅的な打撃を受けることとなった。

その様を，1936年6月にインドシナ共産党（「われわれ」）がコミンテルンのクーシネン（Kuusinen, Otto Wilhelm, 1881-1964）と覚しい人物（「あなた」）に提出した「シャムの党」と題したフランス語文書¹⁵⁶から見てみよう。クーシネンは当時，日本，インド，朝鮮，シャムを担当する個人書記局のトップであった¹⁵⁷。「シャムの党」文書には，インドシナ共産党とのみ書かれているが，VI—1に前出の第1，第2報告と同様に，差出人はインドシナ共産党海外指導部ではないかと推測される。但し，第1，第2報告は，シャム共産党側から提出された報告をインドシナ共産党がコミンテルンに取り次いだものであった

が、一方、「シャムの党」は、インドシナ共産党（「われわれ」）自らが、複数のソースから得たシャム共産党情報をもとに作成し、コミンテルン書記局（「あなた」）に提出した文書である点において大きく異なっている。「シャムの党」の全訳は以下の通りである。

「シャムの党」（1936年6月インドシナ共産党の報告）

1935年10月10日、Dati [Ly Phuc Minh] は香港に到着した。シャム共産党書記長の Tangvan [Tran Van Chan, Tangvan: 曾文, 以下 Tang] が、香港まで Dati に会いに来た。数分間会話しただけで、両者は対立した。この二人の同志は次の3点で見解が対立した。①Dati は、シャム共産党はすべてのインドシナ活動を止めるべきだと考えたが、Tang は、シャム共産党はその力の最大部分をシャムでの活動に使うべきだが、同時にインドシナ共産党への支援も継続すべきだという考えであったこと。②Dati は、シャム共産党のインドシナ活動で生じた経費は、シャム共産党はインドシナ共産党に請求すべきであるという考えだが、Tang は両党間の相互扶助の原則によるべきだという考えであったこと。③Dati は、Tang にバンコクと一緒にいくように求めたが、Tang はバンコクへは別々に行くことを提案したこと。

両者の見解の違いは拡大し、距離は広がった。政治的見解の違いという問題の外に、個人的な問題も加わった。バンコクに戻ったのち、Tang は、シャム共産党中央委員会に、Dati との対立を避けるために、インドシナ共産党への転籍もしくはバンコクから遠く離れた所での任務に行くことを希望した。一方、Dati はバンコク到着以来、党副書記長の Tuchinh [Le Manh Trinh] と同盟して、Tuchinh を Tang から引き離そうとした。Tang 書記長が中国滞在中に、[シャムの活動の責任者であった同党副書記長の一筆者] Tuchinh はいくつもの誤謬を犯した。即ち Tuchinh の誤りとは、官憲が東北部地方委員会（ウドン省委員会）を弾圧し解散させることを避けるために、平和的なデモを組織した大衆に警察への服従を要求し、②地区委員会の活動をないがしろにし、③私的な動機からある一同志に対して個人テロを行ない、④シャム人の中での活動は無視して全く実行しなかった。

このため、Tang および東北タイの同志たちは Tuchinh と対立した。Tang はバンコク到着後、一週間で、バンコクを離れ東北タイに向かった。一ヶ月後に Tang はバンコクに戻り、党中央委員会宛てに Tuchinh と Dati を批判する 15 ページの文書を提出した。ところがこの文書は、宛先である中央委員会には届けられず、政治局に届けられた。[Tang が中央委員会宛に文書を出したにも拘わらず] Tuchinh は、Tang を中央委員会、政治局会議に出席させなかった。バンコクに戻ってきた日の 8 日後、Tang は中央委員会の事前許可を得ることなく東北タイに出発したので、Tang は党から追放された。バンコクに残ったインドシナ人同志たちは、Tuchinh をスパイであると疑い¹⁵⁸、Tuchinh と対立した。それで彼らも中央委員会に知らせることなく、バンコクから立ち去った。そこでバンコクに残るインドシナ人は、Dati と Tuchinh の二人のみとなった。東北タイに到着すると、Tang は地方委大会を招集した。しかし、同大会に集まった代表たちが、Tang が党から追放されていることを知るに及んで、大会は流会となった。代表たちは、バンコクの中央委員会に質問に行く代表を選出した。

1936年3月19日に Tang は [コーンケンで] 逮捕された。その数日後に東北タイからの代表団がバンコクに到着した。党中央委員会は、一華僑同志をこの代表団迎接のために送った。東北タイの代表

団〔ベトナム人〕と中央委員会代表〔上述華僑同志〕との間の会見では、Tuchinh が通訳を務めた。東北タイの代表団は、Tuchinh を信頼しておらず、そのため（Tuchinh が通訳した）中央委員会代表をも信頼することができなかった。東北タイに戻ると、代表団は中央委員会とは別の分離した運動を開始した。かつて〔1936年4月19日に逮捕される以前に一筆者〕Dati があなた〔クーシネンのことか〕に送った報告は、事実と反する間違っただけの偏向に満ちている。

Tang は、中国から帰った後、バンコクで何人かのアンナン人、シャム人を組織した。中央委員会が Tang を党から追放した後でも、バンコクのシャム人の「共産主義者」〔これらのシャム人は本物の共産主義者ではなくスパイなのでオリジナル文書に括弧が付けられている。以下の括弧付きも同じ。一筆者〕は、党中央委員会に「忠誠」であった。本当は、これらのシャム人「共産主義者」は警察の回し者である、囚捜査員であった。ある日、彼らは党中央委員会に、タクシー運転手の労働組合を立ち上げる準備ができたと告げた。Dati と Tuchinh は、「その労働組合の発足会」に出席したところ、上記の囚捜査員によって逮捕されてしまった。シャム共産党中央委員会が、われわれ〔インドシナ共産党〕に書いてきたところによれば、逮捕された Dati はすべてを白状してしまったようだ。

東北タイの組織は、バンコクの党中央委員会をボイコットし、自ら独立した組織を作った。バンコクの中央委員会は中国語しか理解できず、中国人（華僑）だけしか指揮できない。インドシナ人とシャム人は東北タイの組織を支持している。われわれ〔インドシナ共産党〕は、中国人だけになったシャム共産党中央委員会と、インドシナ人とシャム人から成る東北タイの同志たちとに、再度一緒になるように、党の統一再建を勧告する手紙を書いた。

Dati, Tang, Tuchinh は、党の分裂に個人的責任を負っている。

シャム共産党中央委員会は、あなた〔クーシネンのことか〕が、資金を送ること、シャム共産党の留学生を受け入れること、および華僑の活動を指導できるような中国語の会話・読解の両方のできる有能な同志を送ってくることを求めている。

シャムの既存連絡住所は今後、一切使用しないように。

われわれ〔インドシナ共産党〕の仲介者によりシャム人留学生を連れてくるように。シャム共産党中央委員会は、われわれ〔インドシナ共産党〕に Dati はすべてを白状したようだ、と語っている。[end]

VI—3, シャム共産党の財政事情

上記「シャムの党」でインドシナ共産党は、ベトナム人の Ly Phuc Minh (Dati), Tran Van Chan (Tang), Le Manh Trinh (Tuchinh) の3名とも、厳しく批判している。コミンテルン特派員 Ly Phuc Minh とシャム共産党書記長 Tran Van Chan の見解対立の出発点は、①シャム共産党のインドシナ共産党への支援の是非・程度および②支援経費を誰が負担するか、に関してであった。①については、単に下部組織の横の連絡を嫌うコミンテルン中央の態度の現れなのか、あるいはその外の原因があるのかは、今後の検討課題である。ここでは、②の支援経費の負担者にこだわる背景、即ち党の財政事情について、少々検討して置きたい。

V—1 で見たように、1935年3月14日のインドシナ共産党海外指導部とシャム共産党の協定においても、相互支援に要する経費の負担者を詳しく規定している。兄弟党とは言え、気前のよいスポンサー

や潤沢な国家予算を有しない場合には、支援活動の資金をどちらが負担するのは極めて重要な問題であったようである。如何に自己犠牲的に党活動をしなくても財政的な裏付けがなければ実行できないことも多い。革命の成就に真剣で、生活の全てを革命に投じている革命家であればあるほど、限られた活動資金を最大限に有効利用することは、革命の成否を決する重要な事柄であると認識していたであろう。

シャム共産党の資金事情に関するまとまった資料は存在しない。本稿で既に記した、党の貧弱な財政を思わせる事例を挙げてみると、例えば、III—1の1932年の第二回代表大会準備過程で示したように、収入源は、人数が少ない上に零細な党員のからの党費とわずかの寄付しかなく、月数十パーツにも事欠く党中央の懐具合の例、IV—3に述べた、1934年にバンコクの党中央の宣伝担当責任者としてウドンからバンコクに赴任したHoang Van Hoanが、バンコクの華人指導者の切り詰めた貧困な生活振りを見て同居することに居たたまられず新聞売りをして自活した例、あるいはVI—1に見たように、バンコクに来たコミンテルン特派員Ly Phuc Minhが華入党組織のトップの二人が家族持ちであることを批判的に報告した例などを挙げることができよう。

また、欧陽恵氏によれば、1930年代後半にバンコクに複数存在した共産党系の華僑学校の教員は、家族持ちの場合でも、月に4-5パーツという少額の生活費を支給されるのみであり、青年独身教員に至っては学校に住み込み最低限の生活ができるだけの食料等が現物支給されるのみであったという¹⁵⁹。当時、バンコクの通常の華校教員の月給は30～50パーツ程度であった。共産党系学校は、たとえ、授業料は安く、特待生も多かったとは言え、教育熱心であるとして人気が高く学生数も多かったのであるから、授業料収入からある程度の教員給与を支給することは可能であったはずである。しかし、共産党が牛耳る華校では、党員である教員に月給を支給せず、月給分を党の活動資金に当てていたのである。

インドシナ共産党海外指導部からシャム共産党への支援金500元を丸々使い込んだ陳豹(Ngo Chinh Hoc)の例(IV—3参照)に見るように、コミンテルンなどの上部組織からの資金援助があったことは、間違いない。また、VI—1の第2報告のように、シャム共産党側からコミンテルン中央に資金を要請している例もあることは否めないが、党員が低所得の生活のなかから捻出した党費と党の大衆組織による募金運動により、言わば、身を削り、身を粉にして集めた資金が、1930年代の党活動費の大部分を占めていたものと思われる。ところが、中国共産党が政権を獲得した後は、タイ共産党の財政事情は大きく変化したようである。ソーボン・ピウカーオ氏が筆者とのインタビューで明かにしたところによれば、1960年—70代のタイ共産党は、中共から潤沢な資金、軍事、人材援助を受けていた(注127参照)。

VI—4、1936年3月19日、Tran Van Chan 逮捕される

VI—2に上述した「シャムの党」(1936年6月インドシナ共産党の報告)からTran Van Chanの行動を要約すると次のようになる。シャム共産党書記長Tran Van Chan(Tang)は、コミンテルン特派員Ly Phuc Minh(Dati)と対立した。彼は、対立を避けるために、インドシナ共産党への転籍さえ希望した。1935年10月末頃、彼はバンコク到着すると、一週間で、バンコクを離れ東北タイに向かった。一ヶ月後に彼はバンコクに戻り、党中央委員会宛てに党副書記長Le Manh Trinh (Tuchinh)とLy Phuc Minhを批判する文書を提出した。ところがLy Phuc MinhとLe Manh Trinhは結託して、Tran Van

Chan に中央委員会や政治局の会議に出席させなかった。バンコクに戻って8日後、彼は中央委員会の事前許可を得ることなく東北タイに出発した。これを理由として、彼はシャム共産党を除名された。バンコクに残っていたベトナム人党員は、Le Manh Trinh を信用せず、中央委員会に知らせることなく、バンコクから立ち去った。バンコクに残るベトナム人は、Ly Phuc Minh と Le Manh Trinh の2名だけとなった。東北タイに再度戻った Tran Van Chan は、東北部地方委大会を招集した。しかし、Tran Van Chan が除名されたことを知った同大会代表たちは、大会を流し、バンコクの中央委員会に質問に行く代表を選出した。1936年3月19日に Tran Van Chan はコーンケーン（坤敬）で逮捕された。その数日後に東北タイからの代表団がバンコクに到着した。代表団はバンコクで応接した Le Manh Trinh を信頼せず、東北タイに戻ると、中央委員会からは分離した運動を開始した。

1930年4月20日にシャム共産党創立に参加して組織担当の責任者に任じられ、1934年7月の第三回代表大会以降は書記長の任にあった Tran Van Chan も、コミンテルン特派員の権威に抗することはできず、遂に党から除名されたのである。しかし、東北部のベトナム人党員の多くは彼を支持した。

Tran Van Chan (Tang) の逮捕を、当時のシャムの華字紙中、最も共産党に関する報道が多い『民国日報』の1936年4月9日号は、次のように報じている。

「警方多方刺探結果共党首要就擒，警方探悉其総機関設在坤敬，名為「印度支那及老〔老の上に草冠あり，以下同じ〕部共産党部」去月十九日捕獲該党主席秘書兩人，押解來洛於前天向庭提控。暹国本洛及内府各地，時發生有共党散發传单宣傳共產主義，並攻撃政府情事，暹当局為此，經多方進行偵緝，終告無有頭緒，及最近以来，公安警察局方面，探悉此項共產機関，其名稱爲印度支那及老部共産党部，其総部係設於坤敬府地方，警於探得詳情之後，即於去月間派員至該府進行偵緝，及搜集得確鑿証拠之後，乃於昨月十九日，進行將印度支那及老部共産委員會主席法籍安南人乃抱（另有乃曾抱，汪，曾，乃炳，河番等名）及共産党部秘書法籍安南人乃京，一名魯，又名帖越他那攀兩人逮捕，（按，原訊僅有此簡略報告）並搜獲重要文件多件，至於其他共党部委員，則被其逃亡多人，審訊結果，警方認為案情有拋，乃將兩人押送來洛，將案交檢察庁提起控訴，經檢察庁於本月七日，將兩人提控於刑庭云」（『民国日報』1936.4.9）。

更に、翌4月10日号の『民国日報』は、続報として次のように報じた。

「案情重大，在坤敬府拘獲之共党主席秘書兩人▲押解來洛後已於昨天被控上刑庭，控詞述称被告等刊登攻撃現政府传单，内容称謂政府压迫人民加重負擔各項，主張推翻政府建立蘇維埃政權。關於公安警察当局，破獲坤府地方之共党機関，並將共党首要之印度支那及老部共産委員主席安南人乃抱（另有乃汪，曾等名），及共産党部秘書安南人乃京（一名魯又名帖）兩人，逮捕解洛審訊消息經見昨天本報，現悉，警方經已將案交檢察庁於本月九日將兩人提控於刑事法庭，▲原告控詞略称，兩被告等爲印度支那及老部共産党及最高委員會委員，進行宣傳共產主義，自仏曆二四七七年十一月至十二月十九日間，兩被告串同書写及刊印進行宣傳共產主義之命令之文件，並串同書写传单，計有「労働節紀念」，「暹羅少年先鋒」，「暹羅共産党」等传单，内容略謂，自本政府進行政變之後，並未有予以人民之利益，反而利用法律，多方▲压迫人民，增加各種稅賦，吸收人民之膏血並舉行各種欺騙手段，如開發彩票，而將款用作政府当局之享受，農民進行請求緩債，亦不爲之執行，且多方欺騙，政府不幫助人民和放棄民衆之衛生，而政府疊次宣傳將

用某種拡充経済計画，以行救济民衆，終係空談，而實則增加各種税賦，反而加重人民之負担，吸取人民之膏血，增重人民之压迫，故人民須聯合一致，推翻現政府，而建立農工兵▲蘇維埃政府，然後兩被告即將上述之伝单等，合於暹文崇憲法報之上，用郵寄發出，分發給沙拉武里，呵叻，烏隆，烏汶，那空怕儀，清邁，素叻及本洛吞武里等府，此種行為，經公安警察於仏曆二四七八年十二月（公曆三月）[1936年3月]十九日，將兩被告捕獲，經兩被告在公安警察局供認不諱，故請庭依照刑法101, 102, 104等条，及仏曆2470年修增刑法第3, 4条，仏曆2476年共産党条例第3条，仏曆2478年修增共産党条例第3条及仏曆2476年護憲条例第4条等，將被告定罪，並將各種文件没收云々，現案方在受理中，後訊如何，候探再続。」(『民国日報』1936.4.10)

上記の記事によると，Tran Van Chanは東北タイのコーンケーン（坤敬）に本部がある，インドシナおよびラオス部共産党委員会の主席である。彼は同委員会秘書のKinh（京，ベトナム人でテープ・ワタナーパン（帖越他那攀）というタイ名をもつ人物）とともに，3月19日にコーンケーンで逮捕され，バンコクに護送され4月9日に検察によって起訴された。起訴容疑は，1934年11月から12月19日の間に，インドシナおよびラオス部共産党のトップとして，共産党の出版物やビラによって共産主義を宣伝し，人民党政府を打倒し，ソビエト政権樹立を訴えたこと，また，これらのビラ等をタイ語新聞のThet Rattathamanun紙の中に挿んで，サラブリー，コーラート，ウドン，ウボン，ナコンパノム，チェンマイ，スリン，トンブリーの各県に郵送したことである。

起訴後，著名弁護士である陳繹如が国選弁護士に任命された。華僑の陳繹如が兩人に接見したところ，「兩被告雖属安南人，惟因其曾往中国留学，精通中文，国語亦極流利，故能與陳君交換關於將弁駁原告方面之意見」¹⁶⁰で，兩人とも中国語が堪能であったという。5月25日に最初の公判が開かれ，兩被告が出廷した。しかし，陳繹如弁護士が兩人との打合せが不十分であるとして6月11日への延期を求め，承認された。開廷延期を報じた華字紙は，兩被告の経歴等を次のように報じた。即ち，「被告兩人俱安南籍 查兩被告，俱係安南人，第一被告之真名為冰河泛[Băng Hà Phiêm]，一名僧文[Tăng Văn]，現年廿四歲（ママ）除安南文外尚諳（ママ）識法，暹，華等語言文字，第二被告，真名崇金[Sùng Kim]，現年僅十八歲，自十二歲即來暹，居住於東北烏隆[Udon]府地方，後入暹校就學，讀至高級四年，拋警控辭稱，崇金現任東北部共産党中央委員會委員之一，排列第六号，用英文字母代時，則採用C字化其姓名，其責任係負有翻譯暹文，安南文及華文等文件之責，拋其向警供稱，彼之參加共産党，目的在舉行革命，冀達到恢復安南民族之自由獨立云々。」¹⁶¹

Tran Van Chanが逮捕された容疑は，1934年11月から12月にかけての違法行為である。即ち，彼は逮捕時から1年3か月前の行為で逮捕されたのである。インドシナおよびラオス部共産党委員会の主席という肩書も，逮捕時のものではなく1934年末時点のものである。それ故，「インドシナおよびラオス部共産党委員会」は，彼がシャム共産党を除名された後に東北タイで作ったものではない。除名後逮捕まで間がなかったので，彼には新たな組織を作る余裕はなかったものと思われる。1934年末当時，彼はシャム共産党書記長であったが，東北タイのベトナム人党員は彼を「インドシナおよびラオス部共産党委員会主席」と誤解していた可能性が高い¹⁶²。また，一般新聞の中に党のビラ等の文書を挿み込んで郵送するというやり方は，VI—5でも下述するように当時のシャム共産党がしばしば行った方法のよう

である。上に郵送先として列挙されている県名は、全てベトナム人の党員が存在した県である。

除名された直後に逮捕された Tran Van Chan は、バンコクの Le Manh Trinh や Ly Phuc Minh らによって、シャム官憲に売られたのであろうか。疑わしいが、それを示す資料はない。今日、タイ共産党の幹部たとえば、トン・チェームシー氏やチャオ・ボンピット氏らに尋ねても、Tran Van Chan が逮捕されたことを知らない。但し、トンは Tran Van Chan と Le Manh Trinh との間に対立があり、Tran Van Chan が東北部に引き上げたことは知っている。Hoang Van Hoan の回想録は、Tran Van Chan がシャム共産党書記長で、自分自身は同党宣伝責任者であったという時代の Tran Van Chan (Tang) に低い評価しか与えていない。これらの事実は、逮捕出獄後の Tran Van Chan はもはや重要な役割を担うことはなかったことを意味するのではないであろうか。

Tran Van Chan のその後の消息については、Nguyễn Thanh Văn 氏は、筆者とのインタビューで次のように述べた。即ち、「Tran Van Chan とは 1955 年から 60 年まで東北タイで一緒に活動したことがある。Tran Van Chan は、ホーチミンの弟子の一人であり、年齢は自分より 15~20 歳年上であった。1960 年頃ベトナムに帰ったが、代わりにリーダーがベトナムから派遣されてきた」¹⁶³、と。また、トン・チェームシーは、Tran Van Chan の息子だという駐ラオス・ベトナム大使館員に会ったことがあると筆者に語った¹⁶⁴。

VI—5, 1936 年 4 月 19 日, Le Manh Trinh, Ly Phuc Minh, Sawat Phiukhao ら逮捕さる

1936 年 4 月 19 日午後 3 時、警察は、バンコクの黄橋媽宮の裏にある Nai Bun (Le Manh Trinh) の自宅（実はシャム共産党本部）を急襲し、会議中の労働指導者らを一網打尽にした。周辺で待機していた警察は、会議に参加させていたスパイの合図（空になったタバコの箱を窓の外に投げ捨てる）¹⁶⁵ で、一斉に踏み込んだのである。すばやく窓から飛び出して逃亡に成功した中国紅軍の兵士出身の 1 名を除く、13 名が逮捕された。Ly Phuc Minh はこの会議に出席予定であったが、未だ到着してはいなかった。現場近くまで来て、捕り物騒ぎを見て異変に気が付いた Ly Phuc Minh は、慌てて現場近くの下宿に引き返し、証拠物件を隠滅しようとした。しかし、下宿近くに待機していた警官に逮捕された（『民国日報』1936.5.20）。合計 14 名が逮捕されたが、うち一人 [多分、潜入させていた警察下士官—筆者] は、無関係であるとして釈放された。しかし、別に逮捕された、地方の共産主義者（ベトナム人ソムブン）1 名を加えた 14 名が、5 月 30 日に刑事裁判所に起訴された。

逮捕の翌日の新聞は、Ly Phuc Minh のパスポートから上海を通過したことが明かになったこと、彼はモスクワから特派された共産党の代表と言われていること（「拠称該人即係来自莫斯科之共党代表」）を、早くも報じている（『民国日報』1936.4.20）。トン・チェームシーによれば、Ly Phuc Minh はフランスの博士号保持者であったという¹⁶⁶。

5 月 30 日の起訴状に記された罪状は、①1936 年 2 月 1 日から 4 月 19 日までの昼夜、現在逃亡中の多数の者と共謀して、人民の反政府感情を挑発して武力で政府を打倒するために共産主義の宣伝と入党勧誘をしたこと、②13 番、14 番の 2 被告を除く全被告は 4 月 19 日に、Nai Bun 宅で集会し共産党の会務、共産主義の宣伝、入党勧誘について討論をおこなった（『民国日報』1936.6.1）ことである。

起訴された 14 名の姓名、所属を、起訴状の順序に従って見ると次の通りである。

1, 法籍安南人の乃汶 (Nai Bun), [Le Manh Trinh], 2, シャム人の素舜 (Surin), 暹三輪車工人代表 [Sawat Phiukhao], 3, 粵人 (広東人) を装う法籍安南人乃戌 (Nai Suk), 4, シャム人乃善 (Nai Siang), 但し 5 月 20 日号では法籍安南人 [Thong Chaemsri], 5, 節英または符英, 瓊人 (海南人), 印務工人代表, 6, 韓蒙または韓丰, 瓊人, 未詳, 7, 羅秋桂, 瓊人, 赤色学聯代表, 8, 黄亜水または莊亜水, 瓊人, 未詳, 9, 林阿棕, 瓊人, 未詳, 10, 男童陳狗 (Nai Kao), 瓊人, 少年団代表, 11, 黄麟, 潮人, 潮州工会代表, 12, 李園, 客人, 客属工会代表, 13, 李福文 (ママ), 上海人, 莫斯科特派員 [Ly Phuc Minh], 14, 安南人乃崇汶 (Nai Sombun)¹⁶⁷。

14 名の民族内訳を見るとベトナム人が, 1, 3, 4, 13, 14 の 5 人。この内, 4 番はトン・チェームシーであり, 13 番は上海人とされているが, 上海で旅券を取得した Ly Phuc Minh (李福明) である。シャム人は 2 番のサワット・ピウカーオのみ。海南人 6 名, 潮州人と客家が各 1 名である。また, 所属団体でみると, 工人代表が 4 名, 学聯代表 1 名, 少年団代表 1 名となる。

押収された文書には次のようなものがあった。例えば, 中国語 (シャム語訳付) の暹羅工人状況, 同国際士人之抵抗文, 同裁縫工人之報告, 同抗議日本経済考察団 [安川経済視察団のこと] 之書, シャム語の駆逐工人離職之報告書第 2 期, 暗号文書, 中央委員会書信, 少年団組織大綱, 農民組織大綱, ガリ版刷りの「大衆之声」「導光」「紅旗」, および「社会主義者教化の総括報告」等のフランス語文書 9 点 (『民国日報』1936.6.1), など。

第 2 被告の Surin 即ち Sawat Phiukhao は, サームロー労働者の代表 (「暹三輪車工人代表」) と書かれているが, トンによれば, 当時のサワットはマッカサン鉄道工廠の労働者の組織化に従事していたという¹⁶⁸。

第 3 被告の乃戌 (Nai Suk) については, 「インドシナ共産党員であるが, 命によりシャムに来て, シャム人と偽ってコーラートで徴兵を受け, 同地の兵営に潜り込み共産主義の宣伝をしようとした。彼は広東人だと自称しているが, 警察は彼の詳細を知っているので, 軍営騒擾の罪でも起訴することを決した」 (『民国日報』1936.5.20) と報道されたが, 実際にはこの罪状を追加されることはなかった。

第 4 被告人の乃善 (Nai Siang) は, 後のタイ共産党第 4 代目総書記であり, 本稿でも彼とのインタビュー記録をしばしば引用しているトン・チェームシーのことである。トンによれば, 警察の尋問で名前を尋ねられ, 思いつくままに「ウィチアン」と適当な名前を答えたところ, 尋問者は「シアン」と聞き違えた。トンは敢えて修正は求めず, そのままシアンという名にしたのだという¹⁶⁹。

1936 年 7 月 15 日の第一回公判で, ブン (Le Manh Trinh) は, 検察官が示した 2 つの罪状のうち, 第一の共産主義者であることに関しては, 自分が真正の共産党員であることを認め, 共産党の真の目的は, 人類が真の自由と平等を獲得することにあると大言した。しかし, 逮捕された時に自宅で開いていた会議は, 共産党の会議ではないとして第二の罪状は否認し, 当日の会議に集まったものは工人であり, 一般失業者を援助するために, どのようにして合法的な工会を組織するべきか, どのような方法で工会を合法的に登録できるかを協議していたのだと弁解した。ソムブンも, 当日ブンの家で開いた会議は, 工会を組織して登録することを協議していたもので共産党とは全く関係ないと否認した。この後, ブンの警察での供述調書が読み上げられた。ブン (Le Manh Trinh) が自分の経歴を述べた部分は, 次の内容で

あった。

即ち、ブンは安南の生まれで、幼時に両親と死別した。小商売をしていたが、今から7～8年前に中国に一度行き2年間を過ごした。その後安南に帰ったが、生活のためにメコン河を越えてシャム北部に潜入し北部を転々とした。生活は極めて苦しかった。ピチット県に至って一安南籍人と知り合い、その家に起居して共産主義活動をした。仏歴2473年[1930年]にピチット県で逮捕され汕頭に追放された。同地で、自分は革命の信徒でありシャム政府に国外追放されたと語ると、同地の人々は同情した。2年して彼らの支援を得て再度シャムに潜入した。北タイ各県で活動した。昨年[即ち1935年]共産党活動を遂行のためバンコクに来て、バンコクの共産党員と連絡し、家を黄橋に借りた(『華僑日報』1936.7.15)。

Le Manh Trinh は、シャム警察に把握されていると考えた部分は事実を述べ、それ以外は曖昧で不正確な供述をしていることが判る。例えば、東北部とは言わず北部と言い、最初シャムに来た動機は生活のためであり、汕頭に追放されて2年間も同地に留まり同地の人の支援を得てシャムに戻ってきた等々。但し、北部(チェンマイ)にもベトナム人から成る共産党組織があり、Le Manh Trinh が指導していたのは、事実である。

続いて、安南人の Ly Phuc Minh が安南語かフランス語しか判らないという理由で通訳を要求し、また、ブンは押収資料のタイ語訳が正しいかどうかを照合したいのを見せて欲しいと求めたが、検察側が翻訳を持参していなかったため、次回まわしとなった。次回の公判が、7月30日に開廷されたが、Ly Phuc Minh の弁護人になった、著名弁護士で華裔の陳通羅は、いまだ Ly Phuc Minh と詳しい打合せができていないので弁護活動ができないと主張して、8月24日に延期された(『華僑日報』1936.7.30)。

8月24日の公判で、原告側第1証人としてチャローン(差隆)が次のように証言した。彼は工会に潜入していた警察のスパイの一人である。

チャローンは、車の運転手を職業としている。彼は1934年にコーラートからスリンに転居した。翌年には、更にバンコクに転居して来た。現在の住所は黄橋にある。コーラートに住んでいた時に、同じ製材所の仕事をして、被告のソムブンと面識ができた。1935年のある日、黄橋でソムブンに偶然出会い、親しく話した。ソムブンは、自動車運転手などの労働者階級を集めて工会を組織中であると語った。後日再びソムブンに会った時、ソムブンは大いに共産主義を語った。その翌日、チャローンは公安警察の知合いを訪ね、ソムブンとの往来を報告した。その後もソムブンとの接触を続け、運転手の苦しい生活や政府の厳しい規制等について語り合った(『華僑日報』1936.8.24)、と。

シャム警察の取締は、共産党組織に潰滅に近い打撃を数度に亘って与えたことは、既に見たところである。シャム警察の共産党に関する重要情報源の一つは、情報交換の合意がある仏、英、蘭当局からの通報であった。同時に、チャローンの例のようにシャム警察が潜入させたスパイ情報も、もう一つ重要な情報源であった。上記チャローンの証言は、彼と共産党組織との関係、即ちスパイになった経緯について、語っていない部分があるようである。とりわけ、公安警察にどうして知人がいたのかは説明されていない。

この部分について、トン・チェームシーの説明は次の通りである。トンのウドン中学の先輩でバンコ

クに逃げてきた Triam (ベトナム名は Thu) は、共産党の宣伝文書の郵送を担当した。宣伝文書やビラは通常一般新聞の中に折り込んで郵送したが、ある時、不注意にも規定料金額の重量をオーバーした文書を折り込んでスリン県に発送した。郵便局が、料金不足の印刷物を開封してみると、中から共産党の文書が出てきたので警察に通報した。警察は、そのままスリンの宛先に郵送させ、スリンで受け取った人物 [上記のチャローンか一筆者] を捕らえてスパイに仕立てた。この男はバンコクに出て党組織を探せという指示をうけてバンコクでタクシー運転手に就職した。また、トンによれば、コミンテルン特派員 Ly Phuc Minh の下宿先もチャローンの家であった。シャムに来て間もない Ly Phuc Minh は、労働者の生活状態を自分の目で確かめたいと希望して、党と関係のある労働者の家に下宿したのであった。警察に踏込まれた4月19日の Le Manh Trinh 宅での労働者の会合に、Ly Phuc Minh が出席しようとした理由は、それまで労働者の訓練指導を担当していた Triam が、党指導部と対立して東北タイに帰ったため [Triam は Tran Van Chan 前書記長と行動を共にした在バンコクのインドシナ人の一人と思われる一筆者]、Ly Phuc Minh 自らが Sawat Phiukhao を通訳として労働者教育を担当するようになったからである¹⁷⁰。

前掲の「シャムの党」(1936年6月インドシナ共産党の報告)は、「Tang (Tran Van Chan) は中国から帰って来た後、バンコクで何人かのアンナン人、シャム人を組織した。中央委員会が Tang を党から追放した後でも、バンコクのシャム人の「共産主義者」は、党中央委員会に「忠誠」であった。本当は、これらのシャム人「共産主義者」は警察の回し者である、囹捜査員であった。ある日、彼らは党中央委員会に、タクシー運転手の労働組合を立ち上げる準備ができたと言った。Dati (Ly Phuc Minh) と Tuc-hinh (Le Manh Trinh) は、「その労働組合の発足会」に出席したところ、上記の囹捜査員に逮捕されてしまった。シャム共産党中央委員会が、われわれ [インドシナ共産党] に書いてきたところによれば、逮捕された Dati はすべてを白状してしまったようだ」と述べている。

上記トンの証言と併せて考えれば、Tran Van Chan 系列のベトナム人たち (Triam¹⁷¹ もこのグループ) はバンコクでもシャム人労働者の組織化・指導を行っていたが、途中で東北タイに引き上げてしまったために、Ly Phuc Minh, Le Manh Trinh が引き継いだということになる。

裁判ではブン、スリン、ソムブンはシャム共産党員であることを認め、それ以外はシャム共産党員であることは否認した。初審の判決では、ブン、スリン、ソムブン、Ly Phuc Minh の4名は5年の刑、但し Ly Phuc Minh を除く3名は自白したので、3年4か月に減刑された。14歳の陳狗 (Nai Kao) は年少であるので両親を呼び出し嚴重注意の上釈放されたが、それ以外の9被告には3年の判決が下された。ブン、スリン、ソムブンは控訴せず、残りの10被告は、控訴した。1937年12月の控訴審は、Nai Siang は逮捕時15歳の年少であったことを理由に半分の1年半に減刑された。それ以外は、一審の判決に変更なく、刑が確定した¹⁷²。Nai Siang 即ちトン・チェームシーは、逮捕以来既に1年8か月も投獄されていたので直ちに釈放された。

Ly Phuc Minh が起訴された14名中最も長い5年の刑期を終えて、出獄したのは、41年前半と思われる。その後の Ly Phuc Minh の消息は、明確には判らない。トン・チェームシーによれば、一時タイに留まったのち、ベトナムに帰国し間もなく早世したとのことである。

VI—6, チェンマイ党支部消滅, コーンケーン暴動

バンコクで Le Manh Trinh 書記長, Ly Phuc Minh コミンテルン特派員らが逮捕される前日の 4 月 18 日には, チェンマイの共産党支部も警察の手入れを受け, ベトナム人 2 名 シャム人 1 名が逮捕された。その様子は, 次のように報道されている。即ち, 「清邁捕共産党獲越人陳李二名, 清邁通訊, 本月十八日本府府委員偕同警長往暹人乃繳[Nai Kiao]家圍捕共産党, 結果捕獲共産党徒越人陳猛[Trần Mãnh], 李良[Lý Lương]二人, 及搜出有宣傳共産主義物品, 即將陳李二人並乃繳拘捕云」(『民国日報』1936.4.24)。

1935 年初めにコミンテルン中央に提出された『報告』によれば, チェンマイには 3 名のベトナム人からなる支部が存在していたことは IV—2 で述べた。チェンマイでも, 時々共産党のピラが撒布されていた(例えば, 『民国日報』1935.3.27)。また, トンによれば, 党はタイ語を習得させる目的で, チェンマイのミッションスクールに Huong (タイ名, ソム) というベトナム人青年を入学させた。1934 年にウドンピタヤースクン校の学生指導者 Triam が同校から放校されると, 党は新たな学生指導者にするためにソムをチェンマイから同校に転校させた。

ソムの指導下で同校の学生に対する共産主義宣伝は極めて活発となった。これが 1935 年半ばに同校教師のティエン・シリカンやパン・ゲウマートらが共産主義活動の疑いをかけられ逮捕される背景である。ソムはトゥリアム (Triam) とともに, タイ語ができるベトナム人の双璧であったという。彼は 1935 年 6 月 6 日に逮捕され, 戦後はバンコクのシーロムに開設された, Vietnam News Service に勤務していたという¹⁷³。

1936 年 10 月 31 日朝 9 時ごろから, コーンケーン市部に近い Phra Lap 村の飛行場脇で, 30-40 人が集会を始めた。その場でベトナム人 11 人が逮捕された。10 時には市内の路上に, 赤旗を掲げ, ピラを配布し, 万歳! シャム政府打倒! 労農兵のソビエト政府樹立! などと叫ぶ, 200 人近いベトナム人のデモ隊が出現した。デモ隊は, 制止しようとする官憲と国立コーンケーン男子学校前で衝突し, ベトナム人 2 人が射殺され, 10 余人が負傷した¹⁷⁴。最終的に逮捕された人数は, 一年後の 1937 年 11 月 3 日に内務次官が外務次官に報告したところでは, 201 名, その内訳は仏印籍ベトナム人 193 名, 仏印籍ラーオ人 1 名, シャム国籍人 7 名であった。彼らは出入国管理法で処罰されるグループと改正刑法 104 条 (4) の暴力による国家転覆罪 (10 年以上の刑または終身刑) で処罰されるグループの二つに分けられた。前者に該当した者は 142 名 (全員仏印籍ベトナム人) で, 取調べ段階で 6 名は釈放され, 136 名が起訴された。有罪 105 名, 証拠不十分で無罪釈放 31 名であった。有罪者は刑期満了後, 国外追放に処せられた。後者の罪では, 51 名の仏印籍ベトナム人, 1 名の仏印籍ラーオ人, 7 名のシャム国籍人の合計 59 人が起訴され, 7 名の仏印籍ベトナム人は無罪釈放されたが, 残り 52 名は有罪であった。

後者の暴力による国家転覆罪容疑のグループのうち, 第一陣 31 名 (男 18 名, 女 13 名) は, 早くも 1936 年 11 月 14 日にはコーンケーン裁判所に起訴された。31 名の住所はマハーサラーカーム県の男 1 人, チョンナボット郡の男性 1 人を除けば, 全員が地元のコーンケーン県ブララップ郡 (現在ムアン郡) の住人であった¹⁷⁵。13 名の女性の中には, Nang Yo (Nho) Chaemsri という名も見えるが, この人はトン・チェームシーの母親 Dang Quynh Anh である。

Nang Yo[Ba Nho] が、党活動のために近隣の住民から借りた借金を完済した後、9歳の長女6歳の次男を連れて、党組織を探しに Ban Dong 村を出たのは1934年になってからである。同村から党組織が引き上げた1930年以来彼女と党組織との関係は切れたままであった。コーラートで党組織と連絡できるはずだと思って、同地で探したが手掛りはなく、結局ウドンに向かった。ウドンで党の代表として現れたのは、Le Manh Trinh であった。彼は Dang Quynh Anh が酒に溺れ党活動を捨てたと誤解していた。誤解を解き、彼女は1934年4月にインドシナ共産党(ママ)への入党が許された。彼女はコーンケーンに連絡拠点を作るために飯屋を開くように指令を受け、子どもを連れてコーンケーンに移った¹⁷⁶。1936年10月31日デモは、コーンケーン党支部書記のザン以下、彼女を含む5名が主要な計画者であった。党支部がデモを計画した目的は、増税に反対してベトナム人の力量を示し、かつシャム人の参加も呼びかけることにあった¹⁷⁷。

平和的なデモの予定が、どうして大事件になったのだろうか。トンは1937年末に出獄した後、どうして小さな事件(増税反対)を大きな事件にしてしまったのかという、指導のまずさを指摘する声を耳にしたことを覚えている。また、Hoang Van Hoan も、このような闘争方法では共産党支持者を失うだけであるという反省が、この事件後獄中で生じたことを記している(英文回想録, p. 66)。

コーンケーンのデモは、これまでのシャム共産党の闘争では例を見ない規模の人数を動員して、公然大胆に挙行した点で異色である。地元住民以外のベトナム人も計画的に、動員された¹⁷⁸。相継ぐ共産党に対する弾圧の中で、共産党が依然健在であることをアピールする意図が秘められていたのかもしれない。しかし、このコーンケーン暴動を最後に、シャム共産党内におけるベトナム人組織の活動は消滅した。

Hoang Van Hoan は、インドシナ共産党海外指導部の対外連絡担当者 Phung Chi Kien (馮志堅) が、1938年6月に国共合作下の武漢に来た際に、シャム共産党との連絡が完全になくなったと告げたこと(英文回想録, p. 98)を記している。

結び

本稿は、近年利用可能となった、シャム共産党に関する諸資料をできるだけ詳細に精査、利用することによって、ベトナム人党幹部の役割を一つの焦点に据えながら、1930年から1936年の草創期におけるシャム共産党の創立、第二回、第三回代表大会の経緯・過程、党の指導部、組織、財政、シャム共産党とマラヤ共産党、インドシナ共産党、更にはコミンテルンとの関係など、換言すれば、初期シャム共産党史を、できるだけ詳細かつ系統的に明らかにするように努めた。同時に、シャム政府側の共産主義運動に対する対応や、シャム政府と仏、英、蘭の近隣植民地政府との共産主義弾圧のための協力関係についても、詳細に具体例を示すように努めた。これらの基本的と考えられる事項も、従来は曖昧なままに放置されていたり、もしくは全く知られていなかったものが多い。

1930年4月20日、ホーチミンの仲介指導の下に、バンコクを中心にした中共南洋共産党シャム委員会下の華僑組織と、東北タイを基盤とするベトナム青年革命同志会組織とを合併してシャム共産党を創立することが合意された。初代執行部は、Ngo Chinh Quoc 書記長、Tran Van Chan 組織担当、伍治之

宣伝担当の顔触れであり、党三役中の二人は、ベトナム人という、ベトナム人の比重が高い執行部で出発した。しかし、政府の弾圧強化や内紛のため活動は低下した。

1932年9月初めに開催された第二回代表大会のため、その準備の主役を担ったのは、海南人共産党員であった。第二回代表大会で執行部入りしたベトナム人は、Ngo Chinh Quoc 候補執行委員一人に過ぎない。その彼も1933年1月末に逮捕され仏印に送還されると、仏印のスパイとなって戻ってくる有様であった。海南華僑党員がシャム共産党員中の8割を占めたという圧倒的な割合から見ても、新執行部では、海南人幹部の比重が大きかったはずであるが、現在のところ書記長はじめトップの顔触れを特定できないことは残念である。この時期の執行部は、同じく海南人が多い上部組織マラヤ共産党と密接に連絡を図った。

1934年7月に開催された第三回代表大会前後から、再びベトナム人のシャム共産党内での活動が活発化する。大会後の新執行部の三役中にも、Tran Van Chan が書記長もしくは書記長代行、Hoang Van Hoan が宣伝担当者として入った。なお、後者が真に宣伝担当のトップであったか否かについては疑問がないわけではないが。この時期は丁度、インドシナ共産党海外指導部がマカオに開設された時期と重なり、シャム共産党とインドシナ共産党海外指導部との連絡は密になった。とりわけ1935年3月14日にはマカオでシャム共産党とインドシナ共産党海外指導部との間に聯席会議が開催され、詳細な協力協定が合意された。同海外指導部を経て、コミンテルン中央にシャム共産党からの報告が届けられるようになった。本稿で多用したロシア国立社会政治史文書館(RAGSPI)のFond 495, opis 16, delo 51 ファイル中に保存されている、シャム共産党関係文書は、このルートで送付されたものである。

シャム土着人(シャム国籍のエスニック・タイ、エスニック・ラーオなど)を獲得し、シャムの革命を実現することは、越僑と華僑の二者のみで発足したシャム共産党の旗揚げ以来、最重要課題であった。東北タイ、北タイを地盤としたベトナム人の党組織メンバーは、バンコクやシャム湾西海岸、マレー半島部を地盤とする華僑の党組織メンバーに比して、自らも熱心にタイ語学習に励むとともにシャム人の獲得にも努力した。その成果は、第三回代表大会で、サワット・ピウカーオがシャム人初の執行委員(中央委員)に選ばれたことや、また、ベトナム人組織が育成した、Bick (Ratana) と Phun (Rashi) のモスクワ派遣として現れた。しかし、シャム人獲得に性急なあまり、必ずしも信頼できない人物を安易に組織に近づけたことは、スパイの潜入を容易にし、党組織の安全を大きく脅かすこととなった。

ベトナム人組織が、華僑組織に比してシャム人獲得に熱心であった理由としては、コミンテルンの政策に忠実であったという外に、在タイベトナム人移民もしくはその子孫(Yuan Kao)の数が、華僑に比して極めて少なく、組織拡大のためにはシャム人に注目せざるを得なかったという環境要因も指摘できよう。

1935年7-8月のコミンテルン第七回大会における方針転換は、シャム共産党の活動にも直ちに現れた。日本帝国主義とシャム人民党政権内の日本派が、彼らの主要な攻撃対象となった。

1935年末にコミンテルン特派員として来暹したベトナム人Ly Phuc Minh が、Le Manh Trinh 副書記長と結んで、Tran Van Chan 書記長を追放した内紛事件の真相究明は今後の課題である。ベトナム人トップの対立によるベトナム人組織の分裂、その直後の3指導者の被逮捕によって、シャム共産党内

のベトナム人組織は大きな打撃を受けた。大量の越僑逮捕者を出した 1936 年 10 月 31 日のコーンケー
ン暴動は、在暹ベトナム人がシャム政府を敵として闘った最後の公然たる闘争となった。太平洋戦争末
期になって、インドシナの独立を掲げたベトミンの活動がタイでも活発化するまで、タイにおけるベ
トナム人の共産主義運動は表面的には姿を消した。

謝辞、本稿で用いた資料は、日本、タイ、中国、ベトナム、ラーオ、ロシア、フランス、ドイツ、英語
の 9 ヶ国語に及ぶ。このような多様な言語資料の使用が可能になったのは、偏に本稿及び文末脚中に明
記した専門家からのご協力、および多様な出身国から成る早大アジア太平洋研究科の大学院学生諸氏
のご協力の御陰である。あらためてここに感謝の意を表する。また、本稿が用いた資料を収集するための
調査費の大部分は、科研費(15202021)の助成によっている。

付録

Légation de la République Française au Siam
No 91/35/A
Bangkok, le 19 Juillet 1935

Monsieur le Président,

Comme suite aux renseignements sur l'activité communiste déjà échangés entre cette Léga
tion et le Ministère Royal des Affaires Etrangères, j'ai l'honneur de faire parvenir ci-joint à Votre
Excellence, à toutes fins utiles, la traduction d'un document découvert par le Service de la Sûreté
Générale du Gouvernement Général de l'Indochine intitulé: Résolutions prises par la Conférence
des membres du Bureau dirigeant du Parti Communiste Indochinois à l'extérieur et des délégués
du Parti Communiste Siamois.

Je saisis cette occasion, Monsieur le Président, de renouveler à Votre Excellence les assurances
de ma très haute considération.

G. Georges-Picot

Son Excellence
Phya Phahol Pholphayahasena
Président du Conseil, Conseiller d'Etat
pour les Affaires Etrangères
BANGKOK

Annexe No.1
TRADUCTION

d'un document intitulé: Résolutions prises par la Conférence des membres du Bureau dirigeant du
Parti Communiste Indochinois à l'extérieur et des délégués du Parti Communiste Siamois.

14 mars 1935. Les mouvements révolutionnaires de l'Indochine et du Siam constituent deux
instruments importants de la révolution mondiale.

Ces deux pays étant d'ailleurs en rapports très étroit par le fait même de leur situation géographique, le mouvement révolutionnaire qui se produit chez l'un d'eux se répercute fortement chez l'autre. Constituant ainsi deux partis frères, nos partis doivent se lier intimement l'un à l'autre et s'entraider à tous les points de vue, notamment en se faisant mutuellement profiter de leur expérience de la lutte. Dans ce but, le Bureau dirigeant du Parti Communiste Indochinois à l'extérieur et la Délégation du Parti Communiste Siamois ont tenu une Conférence à l'effet de fixer les tâches importantes à réaliser ensemble. Dorénavant, les deux partis devront se conformer aux prescriptions suivantes:

1. Tant que le Parti Communiste Siamois ne se trouvera pas en relations directes avec l'Internationale Communiste, le Parti Communiste Indochinois sera chargé:

a) de transmettre les instructions de l'Internationale Communiste au Parti Communiste Siamois et de transmettre les rapports de ce dernier à l'Internationale Communiste:

b) de prévenir le Parti Communiste Siamois lorsque, soit l'Internationale Communiste, soit l'Internationale des Jeunesses communistes soit le Bureau politique de l'Internationale Communiste, soit les organisations révolutionnaires du monde entier, convoqueront leur congrès, afin de permettre au Parti Communiste Siamois d'y envoyer des délégués. Cette dernière mission (1) constituera la tâche des étudiants que le Parti Communiste Indochinois envoie à l'extérieur pour y poursuivre leurs études.

2. Le Parti Communiste Siamois devra transmettre au Parti Communiste Indochinois tous les documents révolutionnaires qu'il recevra de l'étranger, ainsi que tous les documents de propagande qu'il éditerait lui-même. De son côté, le Parti Communiste Indochinois devra transmettre au Parti Communiste Siamois tous les documents rédigés en français, en anglais, en quôc-ngu ou en caractères chinois, qu'il viendrait à détenir.

3. Quand des membres du Parti Communiste Indochinois se rendront au Siam, le Parti Communiste Siamois devra les faire participer à ses travaux d'éducation politique. De même, le Parti Communiste Indochinois devra faire admettre des membres du Parti Communiste Siamois dans les échelons supérieurs et intermédiaires de ses services d'éducation politique.

4. Au point de vue financier, les deux partis ont convenu de ce qui suit:

Le Parti Communiste Siamois devra supporter les frais de déplacement de ses membres tant pour se rendre du Siam en Indochine que pour rentrer d'Indochine aux diverses cellules régionales du Parti Communiste Siamois ou du Parti Communiste Indochinois. Mais les dépenses engagées pour les déplacements des membres du Parti Communiste Siamois rentrant de l'étranger (autres pays que l'Indochine) au Siam ou se rendant de l'Indochine à l'étranger, seront supportées par le Parti Communiste Indochinois.

5. Le "Dong Hai" (2) et le Comité Central du Parti Communiste Siamois devront conjuguer leurs efforts et travailler en commun pour resserrer leurs liens de solidarité. Mais lorsque quelque question importante concernant les groupements du "Dong Hai" (2) ou du Parti Communiste Indochinois rendra nécessaire l'envoi au Siam d'un camarade responsable le Parti Communiste Siamois devra, sous sa responsabilité, indiquer à ce délégué une adresse où il pourra habiter, assurer sa liaison et recevoir sa correspondance. Ce bureau servira d'organe de liaison directe

entre le Parti Communiste Indochinois et le “Dong Hai” dont les correspondances n’auront plus à passer par l’intermédiaire du Comité Central du Parti Communiste Siamois. Toutefois, les frais de location et autres dudit bureau de liaison resteront à la charge de ce dernier qui dirigera son activité en territoire siamois. Quant à son activité à l’égard du Parti Communiste Indochinois, le “Dong Hai” en assumera la direction. Il est à noter que ce bureau de liaison se confinera dans son travail spécial de liaison et n’aura aucun rôle de direction.

6. Le délégué à l’extérieur pour le Laos est placé sous la direction du Parti Communiste Indochinois. Quant aux cellules du Nord-Annam elles seront dirigées par le Comité Exécutif de l’Annam. Mais, chaque fois que besoin en sera, tant en matière d’organisation et de politique qu’à l’occasion d’autres questions qui ne pourront être résolues sur place, le Comité Exécutif du Laos et les cellules de l’Annam pourront demander le concours du Parti Communiste Siamois à titre exceptionnel et lorsque quelque obstacle rendra toute liaison impossible avec l’échelon supérieur du Parti Communiste Indochinois? Mais, dans ce cas, le Parti Communiste Siamois ne pourra accorder ce concours qu’en qualité de parti frère, comme conseiller politique provisoire du délégué du Laos à l’extérieur et des cellules de l’Annam. En dehors de ces rapports journaliers normaux, le Parti Communiste Siamois devra encore aider T., délégué du Laos à l’extérieur, dans le fonctionnement de son service d’impression qui est encore imparfait.

7. Après la clôture du Congrès des délégués indochinois, le Parti Communiste Indochinois devra envoyer au Siam, pour un mois au moins, un de ses délégués, avec mission d’aider le Parti Communiste Siamois dans ses travaux.

8. Le Parti Communiste Siamois devra désigner des membres féminins pour aider le “Dong Hai” dans ses travaux. Celui-ci et le Parti Communiste Siamois se concerteront pour le nombre de ces membres féminins et la durée de leur mission.

9. Le Parti Communiste Indochinois et le Parti Communiste Siamois devront s’accorder toute aide et assistance en cas de crise financière.

10. Chaque parti devra correspondre avec l’autre au sujet de leurs luttes et publier dans leurs journaux toute correspondance ou toute nouvelle susceptible de favoriser la diffusion de la révolution mondiale.

11. Les présentes résolutions ont été mises à exécution à compter du 20-3-1935. Si, par la suite, il devenait nécessaire de les modifier, les deux partis pourront en décider soit par correspondance, soit par l’intermédiaire de délégués.

FIN

Expédié le 28-3-1935

(1) On peut aussi comprendre: “Ces deux missions seront...”

(2) Le texte dit: “Dong Dong Hai”. Deux interprétations paraissent également possibles, quoiqu’elles puissent chacune soulever des objections:

a) “Dong Hai” serait la contraction de “Dong Duong Hai Ngoai Chi Huy Ban” C’est-à-dire le “Bureau dirigeant du Parti Communiste Indochinois à l’extérieur”. Mais on ne comprendrait pas alors qu’on parle ensuite des “cellules” (Bô) de ce “Bureau”.

b) “Dang Dong Hai” serait le nom d’un parti communiste inconnu, qui s’intitulerait le “Parti des Mers (ou de la Mer) Orientales”.

(L.S.)

(Source: NAT (2) Ko. To. 2.1.2/19)

注

- 1 本稿では、ベトナム人、インドシナ人、安南人の使用に関して厳密には区別していない。原資料がインドシナ人、安南人の場合はそのまま表記している場合が多い。タイ語の Yuan は全てベトナムと訳した。なお、シャム政府とベトナム政府間の連絡に関する、19世紀のシャム側公文書はすべて「ベトナム」国と表記されており、Yuan の語は使用されていない。
- 2 シャム（暹羅）は、1939年6月までのタイ国の国名である。但し、「タイ」はエスニック・タイを意味する語として古くから存在し、正式の国名となる前から「タイ人」、「タイ語」、「タイの国 (Muang Thai)」などとして普通に使用されていた。但し、国名がタイ国と改称された後は、「タイ人」はタイ国籍を有する全ての人という意味に拡大した。シャム共産党がシャム人もしくはシャム土着民の獲得という場合は、シャム国土の土着民、即ちエスニック・タイ、エスニック・ラーオの獲得を意味する。なお、本稿の地名は現在の呼称によっている。
- 3 1940年代末に東北タイのシーサケート県で、チャローンと活動を共にし、チャローンの家を訪問したことのあるトン・チェームシーは、筆者に次のように語った。すなわち、チャローンの実家は、ウボン市の中心部に近いムアン郡のムーン河岸にあった。祖先は、100年以上前にシャムに移民してきたベトナム人（所謂、Yuan Kao）で、チャローンの両親は既にタイ語を使用していた。父親は職人、母親はムーン河の岸辺で、鶏糞などの堆肥を入れてトウモロコシなどの野菜を作り、市場で売っていた。両親は、カトリックの信者であったが、それほど厳格ではなかったようだ。カトリックは共産主義とは相容れないので、チャローンがウボン時代に共産党と関係があったとは思われない。彼がタイ共産党と関係ができたのは、進学のためバンコクに出てチュラーロンコーン大学の新聞学夜間コースに学んでいた時であろう。（Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept.2009. なお、このインタビューはウボン大学高橋勝幸講師の手配により可能となった。ここに感謝の意を表する）。チャローンはバンコクに出てまず名門中学スワンクラブ校に学んだ。同校での学生時代に関しては、村嶋英治「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア (Nuon Chea) のバンコク時代 (1942年—1950年)」、『アジア太平洋討究』第11号、2008年、pp.85-121 参照。なお、同上拙稿では、チャローンはスワンクラブ校では成績最優秀者が集められたトップ学級（通称 Hong King）の学生であったと記したが、誤りであった。正しくは、チャローンは学年205人の学生を6学級に分けた中で上から4番目のクラス所属である (Suwan Kulap Anuson 2499, Rongphim Phanitcharoen, Bangkok, 1956, pp.66-70)。
- 4 “Samphat Thong Chaemsri Lekhathikan Phak Khommiunist haeng Prathet Thai [タイ国共産党総書記、トン・チェームシーインタビュー]” in Sarakadee Magazine Vol. 20 no. 232 (June 2004), pp. 70-88. トンは、1921年12月17日生。母親 Đàng Quỳnh Anh の回想録は、Sơn Tùng, Con Người và Con Đường, Nhà Xuất Bản Văn Hóa và Thông Tin, Hà Nội, 1993, 264 p. (Sơn Tùng 『人と道』文化通信出版社、ハノイ、1993年)として出版されている。同書のタイ語訳は2009年1月に出版されたが、一部省略がある。タイ共産党の初代総書記は華僑の李華 (1912-1988) で1942年の創立から1943年まで、第二代目は東北タイのブリラム生の華裔で中国語教育を受けたソン・ノックパン (1919生、余松) で、1943年から1961年まで。
- 5 ルガスピ (RGASPI) のシャム共産党関係資料 (Fond 495, opis 16, delo 51) の存在については、栗原浩英氏から教示を受け、かつ一部の頁も頂いた。島田顕氏からは RGASPI における資料収集方法について教示を受けた。また、島田氏には、Konstantin G. Vinogradov 氏に依頼して収集した RGASPI 資料中ロシア語資料の翻訳もお願いした。Konstantin 氏には、ロシア語の手書きで判読困難な部分の判読や微妙な意味についての解説をお願いした。ここに3氏に感謝の意を表す。なお、RGASPI のシャム共産党関係文書は、次の分類番号を付して保存されている。即ち、Fond 495, opis 16 (執行委員会書記、オット・クーシネンドキュメント、1936-1939年、シャム、インド、朝鮮、日本担当) 中の delo 51 がシャム共産党関係文書である。総計159頁 (list) だが、一部の頁番号が重複しているので、実際は172頁からなる。Fond 495, opis 16, delo 51 とは、フォント (文書庫) 番号 495, 目録番号 16, ファイル番号 51 の意味である。ファイル番号 51 (delo 51) の中に、1から159まで頁 (list) 番号が付されたシャム共産党関係文書が保存されている。
- 6 Sophie Quinn-Judge, Ho Chi Minh, The Missing Years, University of California Press, 2003, Berkeley, CA, pp. 126-127. ホーチミンはこの後、1930年3-4月にも短期間ながら在暹した。ホーチミンの在暹を記録したタイ国立公文書館保存資料としては、筆者が知る限り次の二点が存在する。即ち、最初の資料は、1932年4月15日付で、駐暹フランス公使 Roger Maugras がシャム外相に宛てた、Lê Hồng Phong (1902-1942) の来暹を通報した文書 (No 51/32/a) である。この文書は、Le Hong Phong は、かつて在暹してインドシナに対する革命運動を行った Nguen Ai Quoc の後任者として、コミンテルンがシャムに送り込んできたのではないかという疑念をもって書かれている。その要旨は、「Le Hong Phong は、1931年9月2日にパリの中国領事館が発給した旅券を所持し、シンガポールから船で32年3月9日にバンコクに到着した。9日間バンコクに滞在した後、3月18日16時発の船で香港に向け出発するように見せかけて、実際は若い中国人2名と車に

乗って出かけ、ベトナム人の子孫ルアン・ピチャーンの家泊まった。翌日、ボートが迎えに来て、ランシット運河を経てアユタヤ近くのコ・ヤイに行き、チャオプラヤー河に出た。そこから、彼が中国、ロシアに行く前に滞在したことがあるピット県の Ban Dong 村、更にはウドンに行く可能性がある。彼は十分な資金をもち、モスクワからの訓令も持っていることは疑いないので、彼はシャム側から、インドシナに新しい騒乱をもたらす恐れがある。彼の前任者である Nguen Ai Quoc は、シャムを 1929 年と 30 年に 2 回訪問している。第 1 回目は、9 か月ウドンに留まって安南の抗議運動への指針を準備した。第 2 回目は、シンガポールの中国領事館から得た旅券を持ってシャムに入ってウドンに行き暴動の新しい首謀者たちを安南に潜入させた。シャムの安南人の間にコミンテルン代表でインドシナ共産党のリーダー Le Hong Phong が出現したことを知って、仏印総督は駐暹公使にシャムの外相および内相を訪ね、シャム安南関係に関する情報を伝えるとともに、この人物に関して共同で調査し逮捕すること、インドシナに関する活動に抑圧的な手段を採ることを要請してきた。捜査の便宜のためこの人物の写真 6 枚と関連ファイルを添付する」(National Archives of Thailand (以下、NAT) (2) Ko. To. 2.1.2/4)。次に Nguen Ai Quoc が登場するのは、1933 年 6 月の文書においてである。1933 年 6 月 9 日付けで、駐暹オランダ臨時代理公使からシャム外相に次の情報が伝えられた。即ち、オランダ側はシンガポール警察犯罪捜査部 (C.I.D) 政治課長と協力して、1932 年 10 月に香港で逮捕されたが、起訴されることなく同年 11 月 10 日に香港を追放され消息不明になった Tan Malaka の行方を追っている、依然消息不明だが、あるいは最近シンガポールからシャムに入った可能性もある、また、同政治課長から安南人 Sung Man Cho (宗文初, Nguen Ai Quoc) についても質問を受けた、と。同臨時代理公使は、Sung Man Cho (Nguen Ai Quoc) の情報を持っているか否か問い合わせていた。そこで、シャム外相は 6 月 8 日付けで駐香港総領事 (イギリス人の名誉総領事) に、香港警察が 1933 年 1 月 22 日に香港から国外追放した、[1931 年 6 月 6 日香港で逮捕された] Sung Man Cho の追放先を尋ねるように訓令している。しかし、香港警察は回答を避けた。更に翌 1934 年 7 月 22 日付けの駐暹フランス公使から、シャム外相に宛てた文書では、コミンテルンのエージェントである Nguen Ai Quoc が過去 2 年間在暹し、1934 年 3-4 月にシャムの各地で共産主義の宣伝を組織した可能性があるとして、写真付きで通報している。しかし、8 月 8 日には同公使は Nguen Ai Quoc がシャムにいるとは限らないことが判明した、として前の通報を取り消した (NAT (2) Ko. To. 2.1.2/7)。

7 NAT Ko.To.39/12.

8 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53 は『報告』と題し、微細な漢字で一枚の用紙にびっしりと書かれた、シャムの状況とシャム共産党の活動とを報告する内容の中国語文書である。同中国語文書の一部は文字が消えて判読不能であるが、同文書のロシア語訳 (RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list54-78, なお、list79-103 にもロシア語訳の同一コピーがある) は鮮明で全読できる。以下、『報告』から引用する場合は、中国語の頁 (list 53) とそのロシア語訳文の頁を併せて記載する。中国語『報告』の末尾には、「附暹党与東党海外指揮班關係議決案 (另抄)」という文が付されている。この文の意味は、1935 年 3 月 14 日にマカオでシャム共産党とインドシナ共産党海外指導部との間に合意された決定は另抄、即ち別に写すということである。但し、ファイル中には「另抄」の議決案は見当たらない。同議決案が作成された時期および『報告』の記載内容から見て、『報告』は 1935 年 3 月の両党の会議以前にシャム共産党が作成し、両党聯席会議時にインドシナ共産党海外指導部に渡され、両党の合意 (シャム共産党がコミンテルンと直接連絡ができるようになるまで、インドシナ共産党海外指導部が両者間を仲介するという合意) に基づき、同海外指導部がコミンテルン中央に届けたものであろう。『報告』のロシア語訳には、1936 年 1 月 3 日という翻訳された日付が入っている。なお、『報告』は既に、栗原浩英『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』(東京大学出版会、2005 年 4 月刊)で随所に引用されている。

9 中央档案馆、広東档案馆『広東広西革命歴史文件彙集索引 1921-1936』, 1986 年 6 月, p. 269.

10 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53, 65-66.

11 『華僑日報』1929.10.25. ストの失敗の後、1929 年 11 月 15 日付けで南洋共産党から暹羅特委に送られた文書では、この製材所ストの指導を次のように批判している。即ち、ストは、労働者多数の意思ではなく、一部の者が無理矢理にストを強行した。また、労働者の代表は、労働者自身が選んだのではなかったもので、労働者たちは却って資本家に協力して代表者を捕らえた。労働争議では党は指導宣伝するだけで、争議自体は労働者自身に任せるべきである (NAT Ro. 7 Mo. 18/1) と。

12 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53, 66.

13 NAT Ro. 7 Mo. 18/1, Ro. 7 Mo. 18/12, Bangkok Times 13 Nov. 1929.

14 NAT Ro.7 Mo.18/1.

15 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53, 66.

16 一ヶ所目は、1930 年 5 月 1 日バンコクの培華女学校の女教師から (NAT Ro. 7 Mo. 18/12)、二ヶ所目は、1930 年 6 月 2 日にバンコク駅で逮捕した Sau (Vo Tung) および Canh Tan(Dang Thai Thuyen) から (NAT

- Ro. 7 To. 1/24) 押収した。プラチャーティボック王は、本文書を読み、本文書は知識のある人物の手になり、できが良く、シャム農民に宣伝されると信奉する者が少なくないと予想されること、かつ、本文書が中国ではなくシャムで作成されたことに衝撃を受け、全ての大臣にシャムにおける共産主義の宣伝の実態を理解させるために本文書を配布した (NAT Ro. 7 Mo. 18/12, NAT So. Bo. 2.47/187)。
- 17 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 66-67. なお、本 RGASPI 文書『報告』の内容と I-2, I-3 に述べる伍治之の回想やトン・チェームシーのインタビューの内容とは、一致しない部分がある。例えば、南洋共産党第 3 回大会に出席した暹羅委員会の代表数や逮捕の有無など。
- 18 1934 年 12 月 22 日の日付があるシャム共産党からコミンテルンに提出された“La Situation du Siam”と題する文書は、シャム共産党の第三回全国代表大会の開催日を 1934 年 7 月 27 日と記している (RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 4)。
- 19 前掲“Samphat Thong Chaemsri Lekhathikan Phak Khommiunist haeng Prathet Thai [タイ国共産党総書記、トン・チェームシーインタビュー]”の外に、このインタビューテープを全て起した未刊行のより詳細なインタビュー記録が存在する。本稿では、未刊行のオリジナルを“Samphat Thong Chaemsri” (B) として引用する。
- 20 Chao Phongphichit 氏 (1923 年タイ、ラノン県生れ) は、筆者が常に教を請うている、タイ政治史研究の師である。氏は稀にみる純粹・高潔の士であり、タイ共産党消滅後も少年時代以来の共産主義の理想と倫理を堅持している。但し、惜しむべきは“Luk Chin Rak Chat”には、氏の誤解に基づく感情的批判が何カ所か見られることである。特に、歐陽惠氏 (1935-39 年にシャム共青团、共産党員としてバンコクで活動し、39 年に延安に到着した人物、現在は北京在住。なお、筆者と鄭成氏が編集した欧陽惠氏の回想録を間もなく出版する予定である) に対する事実無根の攻撃は残念である。なお、シャム共産党およびタイ共産党の公式の党史は存在しない。タイ共産党の最有力者の一人、ウィラット・アンカターウォン (Wirat Angkathawon 1921-1997、張遠という名で知られる) が、1970 年代後半に欧州在住のインドネシア共産党員たち 12-13 人を前に北タイ・ラオス国境ナン県の党中央で語ったタイ共産党小史が、“An Internal History of the Communist Party of Thailand” Translated by Chris Baker In Journal of Contemporary Asia Vol. 33 no. 4(2003) pp. 510-541 として英訳されている。
- 21 『滄海一粟：黃文欽革命回憶錄』，解放軍出版社，北京，1987 年。本書の英訳として、Hoang Van Hoan, A Drop in the Ocean, Foreign Languages Press, Beijing, 1988, があり、ベトナム語訳も存在する。本稿では主に英訳版を Hoang Van Hoan 英文回想録と略称して引用する。
- 22 前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, pp. 115-122 (タイ語版だと pp. 109-114) に、1925 年のシャムにおける Ho Tung Mau の在暹ベトナム青年革命同志会の組織化が述べられている。なお、Ban Dong における同会書記には、Vo Tung が就任した。
- 23 II で述べるように、中国から戻った Dang Thai Thuyen と Vo Tung がバンコク駅頭で逮捕されたのは、1930 年 6 月 2 日なので、逮捕が理由で出席できなかったのではない。
- 24 VI-2 で述べるように、1936 年にこの懸念は現実のものとなり、在暹ベトナム人共産主義者は分裂した。
- 25 Dang Thai Thuyen が逮捕されたのは、1930 年 6 月 2 日なので、Dang Thai Thuyen は別の理由で会議に参加できなかったのか、あるいはこの会議の時期が、同書に言う 1930 年 4 月ではなく、彼の逮捕後のことであつたのかのどちらかであろう。
- 26 ラオスの共産党組織は、シャム共産党ウドン省委ではなく、インドシナ共産党に属した (前掲 Hoang Van Hoan 英文回想録, p. 62)。
- 27 V-3 で述べるように、Bich (Thien) は、1934 年にシャム共産党に入党し、モスクワに派遣され、ラタナという名で第 7 回コミンテルン大会に参加した人物である。
- 28 Tun Ki は「順記」の海南語発音。順記は 1990 年代まで存続した。現在、同ホテルの跡地は高速入口となっている。
- 29 下線部以外は、前掲“Samphat Thong Chaemsri Lekhathikan Phak Khommiunist haeng Prathet Thai p. 73. 下線部は、前掲“Samphat Thong Chaemsri” (B)。
- 30 蔡楚吟 (1910-1969 文革で犠牲) 潮州人、中医の家に生まれる。母が早死にし、1 才で養子に。14 才で澄海県立第一女子学校附属師範講習所入学。1925 年 3 月国民革命軍第一次東征が勝利し、東征軍の宣伝に影響を受ける。25 年 5 月 30 日事件で反帝愛國運動爆発。25 年 7 月澄海県各界外交后援会が成立した際、盛大に遊芸会を開き募捐、女学生の裁縫品のバザールなどによってスト労働者を支援した。蔡楚吟は遊芸会の交際連絡係担当、この遊芸会に汕頭国民外交后援会から澄海県での宣伝と連携のため、楊石魂、伍治之が来訪し、蔡楚吟は伍治之と知り合う。25 年 12 月、いとこの紹介で中国共産主義青年団に加入し、26 年 1 月には共産党員に (15 才)。26 年 1 月中共潮梅特委婦委負責人鄧穎超 (周恩来夫人 1904-1992) が楚吟の家で、蔡楚吟らに、階級教育と婦人運動について話した。蔡楚吟らはその話に感動し学生・婦人組織化に奔走。26 年 2 月鄧穎超の

提案により汕頭地委は蔡楚吟を汕頭女子師範学校に転校させ、団組織および婦人組織の拡大を図らせる。鄧穎超の指導下で蔡楚吟は4名の団員を獲得。同校に团支部を成立させ、团支部書記に。26年4月汕頭地委が改選され、伍治之が団地委書記、蔡楚吟は候補委員に当選。26年7月蔡楚吟は、広東省学生聯合会代表大会に出席。大会後、広州で学習中の伍治之と結婚。26年9月伍治之夫妻は団広東地委から海豊陸豊地委工作に派遣され、伍治之は地委書記、蔡楚吟は党と団の地委の婦委書記。27年4月蔣介石クーデター後、27年5月1日海豊陸豊人民が蜂起し革命政権が生まれるも5月9日には鎮圧された。妊娠中の蔡楚吟も参加。敗北後党指導部と行動を共にするが、妊娠して行動が不便な蔡楚吟は27年7月に澄海に潜行する。27年12月広州起義失敗。広東省は白色テロで、蔡楚吟は党との連絡が中断。伍治之は指名手配される。夫妻は1928年1月嬰兒(蔡誠)を連れてバンコクへ。(『泰國婦僑英魂録、第二巻』中国華僑出版社、北京、1991年、pp.147-155、中共惠州市委組織部等『中国共産党広東省恵陽地区組織史資料(1922-1949)』中共党史出版社、北京、1996年、p.28)

- 31 彼が1930年10月11日に逮捕された時の新聞報道では、Chua Kiam Sengという名で妻とともにシンガポールから1928年3月28日にバンコクに入港した(Bangkok Times 13 Oct. 1930)。伍治之は1905年生れの潮州人、出生地の小学校時代、19年5月に方方とともに、5.4運動に呼応して学生会を作る。高小卒業後、小学校の教師に。22年の夏休みに兄の住むシャムのチャンプリーを訪ね、同地の南華学校教師に就任。同地で当時の暹羅の主要華字紙、僑声報、華暹新報を読み、23年時には僑声報に、伍乘臣の本名で、週一回程度の割で投稿している。24年に帰国し、潮州の韓山師範にて学習。国共合作時代であったので、マルクス主義を学ぶ。25年澎湃の紹介で共青团に参加。潮汕地区の最初の共青团員であり、団員を増やし支部を作る。25年7月24日付け共青团広州地方委組織部の報告には、「現在汕頭特別支部は32名の団員があり、潮安、揭陽、普寧、汕頭に既に支部組織が出来ている。広州地委は7月4日に会議を開き、汕頭地方委を組織すること、特派員を派遣して指揮させることを決した。同時に廖其清、楊石魂、伍治之を地方執行委員とし、廖其清を書記、石魂を宣伝兼農工、伍治之を学生担当とする」(中央档案馆・広東省档案馆『広東革命歴史文件彙集』1925年(1)、1983、p.323)、とある。25年8月13日に共青团汕頭地方委(中国共産主義青年団広東区汕頭地方委員会)が成立、9月8日には第1次大会開催、9月14日には地委第4次常会を開催した。ところが、9月16日に軍閥陳炯明の軍隊が汕頭に侵入したため、汕頭共青团地方委責任人は逃走、同地委は機能停止した。伍治之らは軍閥が汕頭に入った後も、9月29日まで汕頭に留まって活動。彼は9月22日及び25日付けで汕頭地委校務主任の肩書きで共青团中央に次の報告をした。即ち、国民外交后援会が汕頭港に入る劣貨(25年5月30日事件を契機に反帝国主義、主権回復運動を展開し、英、日本帝国主義の商品ボイコットを実施中)を検査し、罷工を指導しているが、治安当局の取締りを受けている(中央档案馆・広東省档案馆『広東革命歴史文件彙集』1925年(2) pp.39-43、48-49)、と。9月28日付けの伍治之の団中央宛報告では、伍治之の肩書きは汕頭C.Y.書記(中国共産主義青年団広東区汕頭地方委員会書記)に変わっている。同報告の中で、軍閥は潮汕に入ると、直ちに清郷を行い、潮安紳士が農民協会重要執委20余名のリストを清郷処に提出したために、執行委員10余名は南洋に逃亡した、と記している(同上書、p.60)。伍治之・石魂連名の25年10月19日付けの報告によると、治之や石魂らは、1925年9月29日には汕頭を離れた。伍治之と石魂は廈門に向かい、10月18日に廈門に到着した。朱叟林(共青团員)は、方達史とともに水路上海に逃亡した。呉夢龍(共青团員)は汕頭に留まった。同じ報告の中で、外交后援会が購入した銃器についても言及している。(同上書、pp.89-91、97)。この報告の中で、汕頭共青团地方委員会に属する共青团員17名中の一人として、朱叟林、呉夢龍の名前が初登場する。のちにシャムで伍治之とともに、活動する朱叟林、呉夢龍の両名は25年時には伍治之と同一の共青团地方委に属していたことが判る。陳炯明の軍隊の嶺東地方(広東省の東部である潮汕・梅県地方)占拠に対して、広州の黄埔軍官学校の軍隊(国民革命東征軍)が出陣したので、11月3日に軍閥は潮汕より撤退した。それに先立ち伍治之を書記とする団汕頭委は10月27日臨時会を開き、陳軍の後方を牽制するため、潮汕鉄道の爆破や、陳軍から武器を奪い農民を武装させることなどを決めている。11月2日には臨時会を開き国民革命東征軍入汕歓迎大会を計画した。これは団汕頭地委書記として伍治之が取り仕切り、呉夢龍も参加している(同上書、pp.119-120)25年11月10-11日に、共青团汕頭地委第2次団員大会が開催された。出席者は、団員34名、共産黨員2名(この資料は隠語を用い、共産党を大学、共青团の大会を教務大会、支部を分校と称している。なお、III-1で述べる1932年8月8日にシャム警察が押収したシャム共産党の文書にも同一の隠語が使用されている)。大会は、先ず農民暴動を起こして軍閥と戦った潮安支部に敬意を表した。決議案を審査するため7名の審査員を選んだが、その内には、伍治之、朱叟林、呉夢龍が含まれている。大会は最後に共青团汕頭地委の執行部を改選し、伍治之は書記、呉夢龍は宣伝担当に選出された(同上書、pp.173-181)。25年11月13日に共青团汕頭地委第1次常会を開催した。出席者は、伍治之、呉夢龍ら5名で、宣伝、学生、青年農民、婦女運動、経済闘争の各特別委員会を設置した。宣伝委員は呉夢龍、朱叟林らで呉夢龍が書記に任じられた。(同上書、pp.165-168)。伍治之書記の25年11月24日付け「団汕頭地委報告(第3号)」では、地委第3次常会の決定を報告している。ここでも、伍治之、呉夢龍、朱叟林は、学生、青年、工人、などの組織化や支部数の増加工作において、中心的な役割を割り当てられている(同上書、pp.203-208)。25年12月

の統計によれば、汕頭団地委の書記は伍治之で団員数は101名である。この人数は、広州地委（520人）、香港地委（280人）に次いで多い（中央档案馆・広東省档案馆『広東革命歴史文件彙集』1926年（1）p. 13）。

伍治之、朱叟林、呉夢龍、蔡楚吟らは1920年代半ばの国共合作期に、広東省潮汕地方で中国共産党の最初の活動に従事した世代であり、武装闘争、学生活動、文化活動、労働者向けの夜学開校、労働者への宣伝、婦人活動、文化活動など、中国で一通りの革命活動の経験をした後にシャムに来たことが判る。

27年12月11日広州起義が失敗し、広東省は白色テロで、蔡楚吟は党との連絡が中断。伍治之は指名手配された。夫妻は28年1月、嬰兒（蔡誠）を連れてバンコクへ。伍治之夫妻は30年10月11日にバンコクで逮捕され、伍治之は15年の刑、蔡楚吟は国外追放に処せられた。伍治之は39年3月に獄中、国外追放。40年9月、夫妻は重慶で中共中央南方局華僑組の仕事に従事。41年には、夫婦で香港に移り、中共香港局僑委工作。日本軍侵攻後も南方工委通信員として香港に残った。1947年末、中共華南分局僑委は伍治之を李啓新の後任として中共暹羅総支部書記代理に、楚吟を同総支部常委兼秘密電台負責人として派遣した。

- 32 朱叟林（1900-1974.3.31 没）、別名、朱璧圖、Praphan Wirasak など。中部タイ、ピチット県生れ、幼少から潮州に学ぶ。伍治之らと潮州で中国共産党の運動に参加。1927年4月蒋介石クーデター後、来暹し最終的には中共南洋共産党シャム特別委の下で活動。29年12月22日に集会中に逮捕された22人の一人。38年初めに獄中、同年半ば延安に向かった。延安までの道程を『華僑日報』副刊「華僑文壇」に、瘦憐「在征程中」という題名で連載した。戦後タイに戻り、共産党組織が、中共組織（中共暹羅総支部）とタイ共産党組織とに分離した際は、タイ共産党側に所属して宣伝担当責任者。その後、タイ共産党の在北京代表として死亡するまで在中した。
- 33 前述の潮州人共産主義者の「血花社」グループとは、伍治之、朱叟林らであり、傅大慶の仲介で、中共組織、具体的には、海南人を中心とした中共南洋共産党暹羅特別委員会と関係ができたものと考えられる。
- 34 林務農が在暹中共組織のトップであることを、シャム警察は知らなかったようである。彼は外のリーダーのように15年の刑を受けることはなく、国外追放に処せられたのみであった。在中国時代の林務農は、1925年11月から26年4月まで共産主義青年団海豊地方委員会宣伝委員、1926年4月から27年秋まで共産主義青年団海陸豊地方委員会書記兼宣伝であった（前掲『中国共産党広東省恵陽地区組織史資料（1922-1949）』p. 31）
- 35 蔡誠編『兩位老共産黨員奮闘的一生』（2000年、pp. 196-197）この部分は伍治之の1985年9月18日の自筆。なお、1930年10月11日に伍治之が逮捕された際に押収された文書中には南洋共産党第三回代表大会の決議書があった（NAT Ro. 7 Mo. 18/12）。
- 36 Chao Phongphichit, "Luk Chin Rak Chat(7)" Matichon Sut Saphda, 31 Oct. 2008, p. 43.
- 37 前掲『泰国帰僑英雄録、第二巻』中国華僑出版社、北京、pp. 147-155.
- 38 Ngo Chinh Quoc は1933年に逮捕された時の年齢が26歳なので、1907年頃に生まれたはずである。前掲 Sophie Quinn-Judge, Ho Chi Minh, The Missing Years, p. 321 に記された Ngo Chinh Quoc の経歴は、ナコンナム生れ、1925年頃中国で訓練を受け、最初は Nguyen Hai Than の下で雲南軍と戦い、その後黄埔軍官学校に学んだ。シャム共産党の指導者の一人になった。
- 39 前掲 Hoang Van Hoan 英文回想録、p. 24, 32.
- 40 Le Manh Trinh "In Canton and Thailand" in Days with Ho Chi Minh, Hanoi, Foreign Languages Publishing House, 1962, p. 114.
- 41 ホーチミンは1928年8月-1929年9月の訪暹時に、ウドンから Hoang Van Hoan と共にノンカイに行き、ラオスにいる Tran Van Chan (Chu) を招いてシャムとラオスとの連携について協議した（Hoang Van Hoan 英文回想録、p. 51）。一方、1934年まで中部タイの Ban Dong 村で活動した Dang Quynh Anh の回想録『人と道』には Tran Van Chan (Tang) についての記述は1ヶ所のみで、シャム共産党成立後1930年末頃、Dang Quynh Anh を訪問して Ban Dong 村からの撤退を強く求めた非情な人物としてしか記されていない（前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, p. 174）。
- 42 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009.
- 43 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53, 67. このロシア語訳では1930年6月に、合併のための会議が開催されたと述べている（list 67）。オリジナル文書である中国語文書（list 53）では、この部分は消えて読むことができないので6月と記されていたかどうかは判らない。
- 44 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list53, 68.
- 45 NAT Ro. 7 To. 1/24.
- 46 14年間ピチットに住んだという表現は不正確。1919年頃、中国からピチット県 Ban Dong 村に来た Sau と結婚した Dang Quynh Anh (Ba Nho) の回想では、Sau は Quang Ngai 省の文紳の家に生まれ、若くして維新会に参加、1908年に中国に行き、中国では国民党の軍隊に加わるも失望して離脱した。1914年に一度、シャムにきたことがある、と回想している。（前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, pp. 85-89.）Sau は

- 政治活動のため、中国とシャムとの間を往き来し、かつシャムでもベトナム人が多い東北タイで主に活動した。Dang Quynh Anh 自身は、1908 年に、故郷 (Nghê An 省 Thanh Chương 県) で維新会に入会し、1913 年来暹、ベトナム光復会を経て、1924 年になってプロレタリア革命を知り、ベトナム青年革命同志会に参加した (前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, p. 188.)。
- 47 NAT Ro. 7 To. 1/24.
- 48 Krom Aiyakan, Phraracha Banyat Nerathet Ro. So. 131 lae Withi Pathibatkan, 1931, p. 150.
- 49 NAT Ro. 7 To. 1/24, So. To. 20/257 and So. Bo. 2. 42/307.
- 50 NAT Ko. To. Ro. 7 To. 1/24. 1930 年 10 月 20 日付けの同一文書の中で、内務大臣は Cuong De について次のような記録があることを国王秘書長官に報告している。即ち、仏暦 2452 年 (1909/1910) に、フランス公使館が、ベトナムの王位継承権を有すると称する Cuong De がシャムに逃げ込み、仏印で反乱を起すために仲間集めをしていると通報してきた。シャム側で捜査したところ、事実であったので、五世王は国外追放を命じた。シャム側官吏は香港に追放した。その後は日本に行ったが、間もなく日本政府からも追放処分を受けた。仏暦 2460 年 (1917/18) に Cuong De がシャムに入国していることが判ったので、その年のうちにシンガポールに追放した、と。
- 51 この人物については不詳。
- 52 NAT Ro. 7 To. 1/24, So. To. 20/257, So. Bo. 2. 42/289.
- 53 10 月 4 日は、11 名をバンコクに護送してきた日であり (Bangkok Times 6 Oct. 1930), この時点で内務省は、既に処分対象者としては、バンコクに護送してきた 11 名のみしか考えていなかったことが判る。
- 54 NAT Ro. 7 To. 1/24.
- 55 これはタイ語訳された名称から和訳したもので、正確な団体名は不明である。
- 56 NAT So. Bo. 2. 47/203.
- 57 NAT Ko. To. 53. 1/81.
- 58 前掲 Le Manh Trinh “In Canton and Thailand” p. 131. トン・チェームシーによれば、国外追放処分を受けた Le Manh Trinh は、海路バンコクに入り入国手続をすることはできなかったので、陸路雲南省から北タイのチェンラーイに密入国した、という。
- 59 仏印に 1930 年 6 月に強制送還された Vo Tung (Sau) の妻である Dang Quynh Anh (Ba Nho) も、殺人事件に絡んで逮捕された 30 名のうちの一人である。彼女が釈放されたのち、共産党幹部 Tang が彼女を Ban Dong に訪ね、彼女が共産党員に推薦されたこと、Ban Dong からの即時撤退を指示した。しかし、彼女は近隣の住民に越僑の活動に使用した 600 バーツの借金があり、借金を返済しないまま立ち去るのはベトナム人の名誉・信用を汚すとして Ban Dong に残り、完済後の 1934 年初に Ban Dong を離れて党組織を探してウドンに向かった (前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, p. 174)。
- 60 2004 年 8 月 20 日に Ban Dong 村を、栗原浩英氏を案内して訪問したが、ベトナム系タイ人は 2 家族 (大農家で子弟が大学を出て役人・教員になっている Wilaiaphol 家と農家の Sridama 家) しか残っていなかった。ベトナム人の墓地も 20 年ほど前に掘り起こして人骨は火葬され、墓石も割られてしまって、跡地はマンゴー果樹園と化していた。ハティン生れのベトナム人を父として 1918 年に Ban Dong 村で生れた Rian Sridama は、6-7 歳頃から 9 歳で村を出てサコンナコンに行くまでの間、Ban Dong 村に秘密裏に開校されていたベトナム人子弟用のベトナム語学校に 20 人くらいの学友と共に学んだ。学友のなかには東北タイのサコンナコンやナコンパノムから学びに来た青年男女もいた。かれらはベトナム人の家に下宿していた。教師は 3 名ほどで、漢文の教師の名は、Ong Di [Dang Thuc Hua のこと一筆者] であった。農業をしていた父は [1930 年 7 月に一筆者] フランスのスパイを殺害した容疑で逮捕された 30 人のベトナム人の一人である。サコンナコンの小学 3 年生、中学 1 年生時は、Thong Chaemsri (当時は Sukhapan という姓) と同年生であった。父の妹がウドンでベトナム人と結婚して産んだ子供達は越僑団体やベトナム政府の幹部となった。即ち、長男はウィエンチャンで米軍の車を爆破して死亡したが、次男の故 Trần Kiên は東北タイで Ngô Tuấn に次ぐ越僑のトップリーダー、三男の Trần Quyêt はベトナムの対外連絡部に勤務しており現在も東北タイの越僑と連絡を担当している (Interview with Rian Sridama in Phang Khon District, Sakon Nakhon, 22 Aug. 2004).
- 61 伍治之は、連阿伍、伍乘臣、廖阿伍などの名を用いていた。1931 年 5 月 18 日に最高裁判所判決で、15 年の刑が確定した (『中華民報』1931.5.19)。妻の蔡楚吟は国外追放処分となった。
- 62 NAT Ro.7 Mo.18/12.
- 63 Bangkok Times 14 Oct. 1930. このピラには、8 月 1 日は、海外の抑圧された労農兵士が権力に対して蜂起した第 3 周年目の記念日であると書かれている。8 月 1 日は、第一次世界大戦停戦日で、コミンテルンが反帝戦争記念日と決定した日である、同時に 1927 年 8 月 1 日の南昌起義記念日でもある。8 月 2 日のバンコクのタイ語、中国語の各紙は、中国語・タイ語の共産党ピラが 7 月 31 日深夜から 8 月 1 日早朝にバンコクのバーンランプ市場、バーンラックなどで撒布されたことを報じている。その中で最も具体的な内容を記しているの

- は、『国民日報』であるが、「八月一日為赤色国際紀念日、各処共産党毎多乗時活動、…聞伝単之内容、係用共産党委員会名義、其中有懲懲暹国人民反抗帝制之意」と言った簡単な内容に過ぎない。
- 64 Sri Krung 25 Sept. 1930.
- 65 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 68-69.
- 66 Criminal Investigation Department (C.I.D) は表向きの名称で、実質の機能は政治犯罪を対象とした秘密諜報 (Secret Service) であった (NAT Ro. 7 Mo.11/7)。
- 67 『中華民報』1932.6.2.
- 68 NAT Ko. To. 39/25.
- 69 『中華民報』1932.8.9., Thai Mai 9 Aug. 1932., Bangkok Times 9 Aug.1932.
- 70 NAT Ko. To. 39/25.
- 71 NAT Ko. To. 39/25. 党の下部組織が上部組織に報告する場合、不都合なことは誤魔化し、また評価できる数字 (獲得党員数など) は水増しする傾向が見られる。押収された文書には、ただのピラではなく、シャム執行委員会の月間出納報告 (1931年12月, 1932年1月, 2月, 3月, 6月, 7月分), 支部や大衆組織から執行委員会への活動報告書, 党大会の準備資料など, 党本部が保存する性格の文書が多い。故に、単なる「印刷所」ではなかったはずである。
- 72 NAT Ko. To. 39/25.
- 73 1932年1月には、南タイベトンの代表に食費、諸費 6.64 バーツを支給している。共産党員の半数近くが農園労働者であると報告されているが、彼らは南タイのゴム園の労働者であった可能性が高い。
- 74 この金額は、III-1 で述べた押収資料から見て月額のものと思われる。但し、1932年の6、7月の実支出よりも20バーツほど水増報告となっている。
- 75 「羅中○」の○の字は判読できず。
- 76 NAT Ko. To. 39/26.
- 77 NAT Ko. To. 39/26.
- 78 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 69.
- 79 NAT (2) So. Ro. 0201.89/3. このピラのベトナム語版は確認できないが、ウドン地方で撒布されたものと思われる。
- 80 NAT Ko. To. 33. 6. 2/30.
- 81 NAT Ko. To. 33. 6. 2/32.
- 82 NAT (2) So. Ro. 0201. 89/3, Ko. To. 39/26. 『民国日報』1933. 1.24, 1.25, 『中華民報』1933. 1.25, 1.26.
- 83 『中華民報』1933.1.31, 『民国日報』1933.1.30, 1.31.
- 84 『中華民報』1933.1.31.
- 85 NAT (2) So. Ro. 0201.89/1.
- 86 NAT Ko. To. 39/26.
- 87 NAT (2)So. Ro. 0201.89/1.
- 88 『民国日報』1933.3.2.
- 89 NAT Ko. To. 39/26.
- 90 NAT Ko. To. 39/26.
- 91 トン・チェームシーが、Q というイニシャルの人物は Ngo Chinh Quoc であることを2009年9月5日に筆者とのインタビューで明らかにした。彼の話しなくしては、本書の記述だけからではĐặng Thị Hợp の結婚相手が Ngo Chinh Quoc であることは判らない。
- 92 前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, pp. 225-227.
- 93 Interview with Chao Phongphichit in Bangkok, 5 Aug.2009.
- 94 1934年12月22日付のフランス語文書“La Situation du Siam”は、ロシア国立社会政治史文書館 (RGASPI) に保存されているシャム共産党の報告としては、最も古いものである。この文書に記載されている最も新しい事例は1934年8月のケースなので、同文書は第三回代表大会開催直後に作成され、マカオのインドシナ共産党海外指導部を経てコミンテルン中央に提出されたものと思われる。
- 95 なお、『報告』では第三回全国代表大会の開催時を、1934年6月と記している。また、この『報告』に依拠した、1935年7月22日付けのコミンテルン加盟を希望するシャム共産党の文書 (RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 6) も同様の年月を記している。
- 96 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 4, “La Situation du Siam”
- 97 『報告』の中国語原文で「執行委員」と記した部分が、ロシア語訳では「中央委員」となっており、両者は同一のものであることは明かである。
- 98 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 70.

- 99 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 70.
- 100 中国語『報告』では、「婦女協会、甲、1934年8月才有婦協籌備会之組織、在曼谷婦女12人、内地婦運尚未与其發生直接關係、乙、宣傳上有公開的華報副刊「齒輪」。
- 101 中国語『報告』では、赤色総工会が「出版有工人之路、工友二種」とある。前掲『泰国帰僑英雄録、第二巻』p. 252には、楊華が謄写版の「工人之路」を編集したことが記されている。
- 102 中国語『報告』では、「外部出版『少年先鋒』週報」とある。
- 103 1935年の『報告』の党の現状①組織の2には、「シャムを、東北部、北部、中部、南部の4地方に分け、バンコクには党市委員会を設ける。現在、東北部地方委員会とバンコク市委員会は既に成立した」という記述がある。これから、第三回代表大会の決定にも拘らず、南部地方委員会は1935年前半には未だ設立されていないことが判る。また、華人中心のバンコクの党部はバンコク市委員会と称され、ウドン省委（越僑プラス獲得シャム人）は東北部地方委員会と称されていることも判る。
- 104 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 71-74.
- 105 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 53, 75-78.
- 106 1935年4月末に、サンコンナコン県のノンハーンでベトナム人共産党員2名を逮捕した際、同地の警察は、『東北之光輝』第4, 5, 6号、『紅色的暹羅』第1, 2, 3号、東北部地方委員会からサンコンナコン県委員会宛文書、シャム共産党組織章程、設立農業合作社宣言稿等58件を押収した（『民国日報』1935.5.21）。
- 107 「副刊」とは当時バンコクで出版されていた全ての一般華字紙、即ち『中華民報』、『華僑日報』、『民国日報』等に見られた、投稿原稿を中心とした1頁分の文化欄のことである。副刊には新聞毎に独自の命名がなされ、特定の記者が編集した。この記者が共産党シンバの場合、共産党系の人物の投稿を多く採用掲載し、あるいは、副刊の全紙面を共産党系が牛耳る団体（読書社や華校自治会など）に定期的に提供した。「椰風」と題する『中華民報』の副刊が開始されたのは、1932年12月1日である（それ以前の副刊名は「流光」）。「椰風」に、シャム共産党員で華校教師の許侠の論文が初めて掲載されたのは、1934年7月12号であり、以後、頻りに掲載された。これは、「椰風」の編集者が丁度、進歩派の黄病佛に代った時期と一致する。黄病佛は、1934年夏から、1935年5月に退職するまで『中華民報』で副刊「椰風」の編集を担当した。彼は、1936年2月に『華僑日報』に移籍し、新たに設けられた「華僑文壇」という副刊の編集を担当した。1936年2月3日号の『華僑日報』から、黄病佛編「華僑文壇」の掲載が開始された。黄病佛の「華僑文壇」は、共産党員の投稿を多数掲載し、また拉丁化新文字運動などを推進した。また、『民国日報』は「南京中央宣伝部所辦的」（『中華民報』1934.6.2）と評されているように、国民党蒋介石系の新聞であったが、編集部には共産党シンバで後に入党した丘心嬰がおり（『中華民報』1934.1.29）、このため共産党は『民国日報』副刊に「齒輪」を掲載できたものと思われる。ここに言う一新聞記者とは、丘心嬰と考えて間違いない。
- 108 齒車を意味する。『民国日報』1934年12月11日号第20面に「齒輪」第1期が掲載されている。毎月一回の割で第8期まで続いた。この婦女協会リーダーは、黄覚生（黄碧玉、タイ共産党初代総書記李華の最初の妻）、陳桂華、沈英などであった（『泰国帰僑英雄録、第四巻』中国華僑出版社、北京、1997、p. 252）。
- 109 NAT (2) Ko. To. 2.1.2/22. VI—4, 5に述べるように、Tran Van Chanは1936年3月19日に、Le Manh Trinhは同年4月19日に逮捕された。1937年1月16日付け内務次官から外務次官宛て文書で、両人を逮捕した件が報告された。両人の逮捕は、目次に件名のみが記載されているだけで、報告書自体はファイル中に見あたらない。
- 110 Hoang Van Hoan は、1935年3月に Tran Van Chan とともにバンコクを発ち香港に行ったのが、そのまま中国に留まり、また、インドシナ共産党海外指導部とシャム共産党との聯席会議にも出席していないので、この情報は間違いである。
- 111 バンコクの樹人学校に潜入した共産党員の教師たちが中心になって、同校に1936年7月の新年度から初中および速成師範班を新設したとき、何孟基、黄耀寰、廖治強、俞任甫、呉琳曼、陳漢三、陳豹、孔雀が新たに教員として招聘された（『華僑日報』1936.7.1 晩版、『民国日報』1936.7.2）。陳豹とともに招聘された何孟基、黄耀寰、俞任甫、呉琳曼はシャム共産党員である。また、共産党が運営する、バンコクの啓明学校を宿として党活動をしていた欧陽恵によれば、ベトナム人の陳豹は、啓明学校の数学教師であった。延安が銃製造加工の技術をもつ腕のいい労働者の派遣を求めてきた際に、工人救国会員の中から24名を選抜して「華僑機工隊」が組織され、陳豹に引率の任が託された。ところが、陳豹は広州で金を持って逃げ去り、機工隊も延安まで行くことができずバラバラになってしまった（欧陽恵氏との筆者インタビュー、2004年5月21日、北京）。
- 112 前掲 Sophie Quinn-Judge, *Ho Chi Minh, The Missing Years*, p. 321
- 113 ウドン市内の Wat Thiprathanimit (Wat Ban Chik) にある烈士墓標には、Võ Văn Kiêu tức Bun Dinh S. 1899 T.22.9.1933 L. Ký Luật K. Diên Châu T. Nghệ An, 即ち Vo Van Kieu は、1899年生れ、1933年9月22日没、Nghệ An 省 Diên Châu 県 Ký Luật 村出身と記載されている。
- 114 Hoang Van Hoan は、ここでは「当時バンコクにいたベトナム人幹部は Tran Van Chan (Tang) と自分だけ

であった」(英文回想録 p. 65, 中文回想録 p. 60)と記しているが、別の場所では同時期に海外指導部に派遣した人物 [Tran Bao 即 Ngo Chinh Hoc] を「幹部」と表現している (英文回想録 p. 76, 中文回想録 p. 71)。かつ、同書には、この時期に Le Manh Trinh がバンコクで活動したことを示す記述は全く見当たらない。Hoang Van Hoan が 1935 年 3 月にバンコクを離れるまで、Le Manh Trinh はバンコクにはおらず、依然東北タイで活動していたものと思われる。

- 115 この党書記長が誰かは不明。あるいは、第二回代表大会で書記長に選ばれた病気勝ちの Teng (丁) の可能性も考えられる。
- 116 東北タイにおける共産党のピラ撒布は、1934 年 3 月末から再開され、1935 年を通して活発であった (Eiji Murashima, Kan Muang Chin Sayam, Bangkok, 1996, pp. 109-115.)
- 117 前掲栗原浩英書, p. 147 に、「海外指導委員会は成立後、1934 年 6 月にマカオで党協議会を開催し、トンキン、アンナン、ラオス、シャムにおける党組織の状況に関する情報収集に努めると同時に、積極的に党組織の再建を遂行していく姿勢を明らかにした」とあるが、この会議のことであろうか。
- 118 Hoang Van Hoan の疑いが当たっていたことは、資料的にも検証できる。1934 年 7 月の第三回代表大会開催直後に作成され、マカオのインドシナ共産党海外指導部を経てコミンテルン中央に提出されたと思われる、フランス語文書 “La Situation du Siam” (RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list1-5) が、共産党の指導によるストとして挙げた 7 件 (1932-34 年 8 月まで) 中、3 件は新聞にスト発生の報道が見当たらず、また共産党の指導で成功したという 1932 年 8 月の人力車夫のストは、共産党が別の文書 (III-1 参照) で指導できなかったことを認めているものである。
- 119 NAT Mo. To. 4.4.1/38.
- 120 NAT Mo. To. 4.4.1/38.
- 121 NAT Mo.To.2.2.3/27.
- 122 NAT Ko.To.37/39.
- 123 Interview with Sophon Phiukhao in Nonthaburi, 24 Sept.2004 and in Tha Bo district, Nongkhai,10 March 2005. このインタビューは、筆者のタイ政治史研究の師である Suphot Dantrakul 先生 (1923-2009) の紹介により可能となった。第一回目のソーボン氏とのインタビューを実施した場所もスポット先生の自宅である。先生は 2009 年 2 月 12 日に逝去された。ここに謹んで感謝および哀悼の意を表する。
- 124 M. L. Manit Chumsai, Par Luy Man nai okat ayu khrop 6 rop, Bangkok, 1980, pp. 73-74.
- 125 Suphot Dantrakul, Nai Phol Singapo kap kanaphiwat nai prawatisat lao, Sathaban Withayasad Sangkhom, Bangkok, 1997, p. 20.
- 126 Nam の詳しい経歴は不詳である。1942 年 12 月に駐タイフランス代理公使が、タイ外相宛て公文で、ベトナム人共産主義者に Nam Sridama という者がおり、彼のグループは反仏印政府反乱のためにノンカーイに盤踞しているが、タイ政府は何ら取締を行わないと不満を漏らしている (NAT (2)Ko.To.7.1/7)。Sridama はベトナム系タイ人の姓である。但し、トン・チェームシーによれば、この人物は Sahai Nam とは別人である。後者は 1930 年代に 10 年近くシャムで投獄された老戦士であるという。
- 127 4 男ソーボンのタイ共産党での活動は、以下の通りである。
ソーボンは、小学校 6 年卒業前の 1966 年 (14 歳時) に共産党組織から迎えが来て、ウドン、コーンケー、サコンナコンの順で党組織の活動に参加した。10 代前半の子供は、官憲から疑われることが少ないので党活動の使い走りの連絡員として重宝される。ソーボンも底に現金をいれたカゴをバスに乗って運ばされたことがある。党の活動資金の大半は、中共がバンコクの中系系実業家を通じて提供したもので、高額新札で渡されることもあった。しかし、高額の新札は農村で使用すると疑われることがあり不便であった。ソーボンは、党活動に入った東北タイ時代以降、ナーンでの党中央時代まで、約 20 年間の殆どを、党有力者ウィラット・アンカターウォンの妻パー・ブンの身近で活動した。ウィラットの力の源泉は、都市部から農村・山村の党解放区に供給される資金、物資等の資源の全てを押えていることにあった。パー・ブンは党活動が消滅したのち、バンコクの中系系実業家の名を挙げて、彼らは中共が提供した資金の一部を着服転用して裕福になったと批判することがある、という。ソーボンは、1968 年から 71 年まで 3 年間学習のため北京、昆明に派遣された。その間の 1 年間は、昆明のタイ人用の中級理論学校で軍事、政治を学習した。同校の教師は中国人が 5-6 人、タイ人が 2-3 人で、同期生 (全てタイ人) は 60 人ほどであった。タイ語に翻訳された毛沢東の著作などが教科書として使用され、討論が行われた。同校で学習したタイ人にはソーボンの同期生だけではなく、いくつもの期がある。ソーボンは、1971 年に雲南省西双版纳の思茅を経て北タイ・ナーン県山中のタイ共産党中央に入った。この時はマラヤ共産党の陳平書記長の息子の一人も帰国のためナーンまで同行した。陳平とウィラットは仲が良かった。ウィラットが北京で [1997 年に] 病死する前も、陳平は見舞いに来たという。ソーボンはナーンでは、タイ共産党政治局員 (チャロン・ワンガム総書記、ウィラット・アンカターウォン、ソン・ノックンら) の護衛の任務を与えられた。彼に党中央の重要な任務を与えられた理由は、革命家庭出身者であ

るからである。ナンで政治局員のソン・ノッククン(余松, タイ共産党第二代総書記)は、1974年頃、ソーボンを自分の部屋によんで、かつてソーボンの父であるサワットの細胞にいたことがあると親しげに語ったこともある。サワットが出獄したのは、1939年8月頃であり、その頃、ソンは東北タイで活動していた。1970年代初めのナン山中の党中央には中華人民共和国の軍事顧問3名と200人くらいの中国派遣将兵がおり、タイ共産党の兵士を訓練し指揮を取っていた。更に、トン・チェームシーは筆者に次のように語った。中国からナンに派遣されていた軍隊は一大隊(約300人)であった。しかし、中国軍兵士の中には劣悪な環境に耐えることができず、タイ政府側に投降する者も出たので、中国軍は撤退した。その後、ベトナムの統一後、ベトナムの党から、ベトナム軍を使用して東北タイを解放しようという提案が、タイ共産党中央にあった。党中央は検討の結果、外国軍に依存した解放ではタイ人民の支持は得られないと判断して断った。

- 128 仏印当局は、インドシナ共産党第1回大会がマカオで開催される前月には、同大会はシャムで開催されるという情報を得ていたようである。1935年2月19日に、駐暹フランス公使 Roger Maugras はシャム外相宛てに次の内容の No 28/35/A 文書を提出している。即ち、Le Nhu Vong, Le Hong Phong という二名の共産主義者が間もなく中国経由で、これからシャムで開催されるインドシナ共産党大会出席のために来暹するという情報が仏印総督から届けられた。両人を逮捕する便宜のために写真を添付する(NAT (2) Ko. To. 2.1.2/16), と。
- 129 「泰越革命聯席会議」に劉漱石が参加したことは、「1934年(ママ)冬天、漱石曾以代表的身份, “到上海与中国革命領袖会商, 及后出席泰越革命聯席會議。”(『泰国帰僑英魂録, 第一巻』中国華僑出版社, 北京, 1989, p. 126) および「1935年春, 蘇惠陪同泰国華僑進步組織の負責人劉漱石到澳門, 参加越南党的代表大会」(前掲『泰国帰僑英魂録, 第四巻』p. 501)。1935年7月22日付けで、シャム共産党がコミンテルンへの加盟申請のために提出した、党史の概略を記した文書には、「1935年3月にシャム共産党は、インドシナ共産党第一回大会に3名の代表を送り込んだ」(RAGSPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 6)と記されている。3名の代表とは、Tran Van Chan, 劉漱石の外に、3人目は蘇惠であった可能性もある。なお、蘇惠は、方方(方思瓊, 陳俊美)の妻である。
- 130 NAT (2) Ko. To. 2.1.2/19.
- 131 前掲栗原浩英書, pp. 156-171.
- 132 オリジナル資料は、RAGSPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 112-113. 但し、この部分は栗原浩英氏から頂いた訳文を使用した。前掲栗原浩英書 p. 164 参照。
- 133 追悼文は、前掲『泰国帰僑英魂録, 第一巻』p. 126 に一部引用されている。
- 134 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 155-156.
- 135 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 6-8.
- 136 RGASPI Fond 494, opis 1, delo 447, list 1-2.
- 137 RGASPI Fond 495, opis 16, delo 51, list 9-15. なお、削除部分も全て引用した。
- 138 前掲栗原浩英書, p. 113.
- 139 『華僑日報』1936.3.28, 3.31, 4.10, 4.14.
- 140 『中華民報』1936.1.22.
- 141 Rashi のタイ語表記は不明であるが、「善美」を意味するラーシー (ระวี) かも知れない。なお、Ratana はタイ語で「宝物」の意味である。
- 142 1902年に創立されたウドン州(省)の模範学校、従来最上学年は中学6年であったが、1934年に中学7年を新設し、1935年には8年生まで延長した。1934年の最初の7年生は4名のみであった(前掲 M. L. Manit Chumsai 書, pp. 67-68.) 中学7-8学年拡大を担当した Tieng Sirikhan (1909-1952) 副校長、その外に Pan Kaewmat (1911-?) 教師ら計3教員が、ウドン県知事のウドン省文部責任者 M. L. Manit Chumsai に対する嫌がらせにより「共産主義者」として1935年5月に逮捕された。彼らは直前にウドンのベトナム人村(Ban Nong Bua)で逮捕された共産主義者と関係ありとされ、家宅捜査を受けた。その際押収された、社会主義、ロシアの政治、アメリカの帝国主義などに関する英語の一般市販本が容疑の根拠とされた(NAT (2) So. Ro. 0201.89/1)。但し、当時同校にはベトナム系共産党派の学生、Bich, トンを指導した10歳年長の先輩の Triam, トン・チェームシーらがあり、早朝に教室内に共産党のピラを撒布していた。Tieng 副校長らが逮捕される以前にも、1934年11月には、同校教師 Yuang Iamsira (1912-1994) が、共産主義者の容疑で逮捕されており、彼は最終的には最高裁判所で10年の刑に処せられた。Yuang はウドン市内や校内などに撒布された共産党のピラを知識欲から熱心に収集し読んでいたのは事実だが、共産党とは何の関係もなかった(Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009.) Pan Kaewmat は、逮捕後起訴されずに釈放されバンコクの数校で中学教師を勤めた。戦後、国会下院議員に当選。1947年9月13日には、タイ共産党に入党した。彼は、1978年のタイ共産党の雑誌で、ウドンで教師をしていた1935年当時を回顧して「当時、東北部にはベトナム人が相当住んでいた。私にもベトナム人の教え子やベトナム人商人の友人がいた。夕方になると、私はベトナム人たちとしばしば政治の話をした。彼らはフランスの植民地となったベトナムの救国につ

いて語り、敵はフランスと地主であるとして、その残虐さを話して聞かせた。当時、私は共産主義については未だ理解できなかった。ただ、ベトナム人の愛国心を讃えていた」(Samakkhi Surop, Vol. 2 No. 1, Jan. 1978)と述べている。

- 143 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009.
- 144 前掲 Hoang Van Hoan, 英文回想録, pp. 56-57. なお、中国語名は Hoang Van Hoan 中文回想録による。
- 145 RAGSPI Fond 495, op. 260, delo 9 and 10.
- 146 1937年2月10日の日付で「ラタナ氏の報告により」と書き込まれた、宛先が記載されていない文書は、「今後の党の発展、大衆運動の発展は、コミンテルンの諸決定の正しい理解および正しい利用なくしては不可能である。しかしながら、[シャム官憲の]テロルは我党とコミンテルンの間の連絡を断ち切ることに成功した。それ故、Rash [Rashi] 同志と私の双肩に、この任務を実行する全ての責任がかかっている。我々はこの責務の重さを噛み締めている。帰国したら、我々の最初の任務は、党および大衆運動の一層の発展のために基礎を作ることである。すなわち、同志を探し、彼らを訓練し、彼らにコミンテルンの方針を理解させ、コミンテルンの指令に従って党を組織することである。しかし、仮に、我々がこの最初の任務を実現できる以前に逮捕されてしまったら、党の状況とシャム大衆の運命は、今のままに留まるだろう。その時には、コミンテルンはシャム共産党を援助するため、準備が整っている同志たち複数をシャムに派遣すべきである。この方法によってのみ、コミンテルンは1300万人のシャム人を、侵略戦争やファシズムとの戦い、平和、ソ連防衛および世界革命のために戦いに、導くことができる」(RGASPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 129 (英文), 134 (ロシア語訳文))と記している。「ラタナ氏の報告により」文書の3日後、2月13日の日付が付された「ラタナ、ラシの演説」と題した長文の文書も存在する (RGASPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 117-127 (英文), 136-154 (ロシア語訳文))。「ラタナ氏の報告により」文書と「ラタナ、ラシの演説」の両者の主張は共通している。すなわち、経済、軍事などあらゆる面で半植民地シャムへの影響力を拡大しつつある日本帝国主義者と日本帝国主義者のエージェント (シャムの人民党政権の一部) に対して、国土防衛、大衆の生活改善、民主主義、および反帝国主義戦争を掲げて闘うために、コミンテルン第七回大会の決定に基づき、華僑、越僑の少数民族をも含む反帝人民統一戦線を作るべきであるという主張である。
- 147 Interview with Damri Ruangsutham in Bangkok, 13 June 2005.
- 148 RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 115-116.
- 149 RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 157-158.
- 150 この住所に当時、確かに新華書局が実在した。新華書局は、ヤワラート路の旧天外天劇場 (現在「蘇成興金行」の場所) 横からパートサイ路方向に向かう通りに面して、同劇場隣に位置していた。新華書局は華字紙にしばしば広告を出しているが、その際の住所は、「天外天馬路門牌 81-83 号」と表記している。これは、パートサイ路よりも天外天劇場が有名であったためであろう。新華書局の店員に林明傑 (蔡明, 1908-1991) という共産党員がおり、シャム共産党関係者は同店を通じて海外の共産主義関係の出版物を入手していた (前掲『泰国帰僑英魂録, 第四巻』, pp. 158-162.)。
- 151 RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 104.
- 152 劉漱石は1931年7月時には既に「新城門協益学校新任訓育主任」として働いていた (『中華民報』1931.7.31)。同校は1934年初めから学生数が増大したので、新たに共産党のリーダーの一人楊雪濤 (李華) を含む4名の教師が採用され、教師の総数は8名となった (『中華民報』1934.1.5)。しかし、同校は私立学校法に反したので1934年9月3日付けでシャム文部省から廃校命令を受けた (『シャム官報』Vol. 51 p. 1755, 9 Sept. 1934)。同校の校董会メンバーは、旧校舎を使用して1935年9月3日に培民学校という名で再建した (『中華民報』1935.10.3)。劉漱石は、1939年9月に逮捕され国外追放されるまで、同校の教師であった。
- 153 RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 105.
- 154 RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 107-111.
- 155 この資金要請に対するコミンテルンの回答らしきロシア語手書き文書が、第2報告の直ぐ後ろの頁に保存されている。それは「クーシネン宛報告」と題し、日本語への翻訳者コンスタンチン氏の解釈によればクーシネンより上位か同格の人物からクーシネンに宛てられた文書である。同文書全文は以下の通りである。即ち、「この連盟はシャムの貧困民によりつくられている。彼らは2000ドルの金額を求めている。この金額は最初としては多すぎるが送った方がいい。もし彼らがインドシナ語の文書を印刷できるならば、それは役に立つだろう。未だ彼らに宛てて、定例会議 [コミンテルン執行部の?—筆者] の知らせを送っていない。従ってコミンテルン側としては、彼ら宛に返事を準備しなければならない。返事の内容は、コミンテルンへの加入を認めること、および、国民国家建設に対するコミンテルンの基本原則を知らせること、の2点である」(RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 106.)。この文書には、2000ドルと書かれていることや、コミンテルン加盟承認云々など、疑問点が残る。
- 156 RAGSPI Fond 495, op. 16, delo 51, list 115-116. この文書はフランス語であるが、list 115の左上余白部分

に、コンスタンチン氏によればロシア語で「1936年6月のインドシナ共産党の報告によって、クーシネン」と手書きされている。なお、この文書の表書きと思われる list 114 には、「シャムからの書簡 (1936年8月8日受領)」と手書きされている。但し、文面からは、シャム共産党からの報告ではなく、シャム共産党内の対立する各グループから情報を収集したインドシナ共産党がコミンテルンに報告したものと思われる。

157 前掲栗原浩英書, p. 182.

158 Tuchinh [Le Manh Trinh] は、1930年7月にピチットで逮捕され、同年12月に仲間10人と共に汕頭に追放された。1931年2月に秘密裏にシャムに戻り (注58参照)、主に東北タイで活動した。バンコクに出て来たのは、Tran Van Chan が1935年3月半ばに開催されたインドシナ共産党海外指導部とシャム共産党との联席会議及びインドシナ共産党第一回代表大会に出席のためにバンコクを離れた際であろうか。彼は1930年の逮捕追放後、直ちにシャムに戻ってきた。これがスパイになって戻って来た初代書記長 Ngo Chinh Quoc と類似しているの、スパイという嫌疑をかけられた可能性がある。

159 村嶋英治・鄭成編『欧陽恵回想録』(近刊予定)。

160 『民国日報』1936.5.7.

161 『民国日報』1936.5.25.

162 VI-6 に、Dang Quynh Anh が、ウドンで1934年4月に“インドシナ共産党”への入党が許可されたと回想している例も参照のこと。

163 Interview with Nguyễn Thanh Văn in Tha Bo district, Nongkhai, 24 Aug. 2004. 彼は1924年ラオスのサワンケート生、フェでフランス語を学んだ時、愛国者の教員から秘密裏に愛国教育を受けた。ベトミンのメンバーとして活動し日本軍に逮捕された経験がある。1946年にメコン河を越えタイ側のノンカーイ県ターボーに避難してきた。1950年ごろに、ターボーから10人の仲間と共に、ハノイ北方の Thai Nguyen にあったグエン・アイ・クオック党学校に学習に行った。ベトナム解放組織のリーダーの一人で、1968年から1年間共産主義者として投獄された経験がある。現在ターボー郡の越僑は400家族位存在するがその長老的存在である。

164 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009.

165 前掲“Samphat Thong Chaemsri” (B).

166 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009.

167 『民国日報』1936.5.20, 6.1 なお、華字紙のタイ人の人名は、タイ語音に近い潮州語音の漢字を用いて表記されている。括弧内のローマ字は筆者による。

168 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept.2009.

169 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009. トンが生れ故郷のピチット県の Ban Dong 村を離れたのは1929年、8歳の時である。その後、IIで述べたように、1930年6月2日にバンコク駅頭でトンの父 Vo Tung ら、中国から戻った二名の共産主義者が逮捕されたが、その直後にフランスのスパイとなって Vo Tung らの逮捕を助けたと疑われたベトナム人がピチットで殺害された。7月14日には、トンの母親や Le Manh Trinh など30人のベトナム人が殺人の容疑等で逮捕された。トンは、ウドンの Nong Bua の公立小学校 (Hoang Van Hoan が管理者) に住み込んで農作業をしながら学び、2年間で小学1~3年生の全課程を修了した。なお Nong Bua の小学校はベトナム人が創立したもののだが、手続が面倒で文部省の監督も厳しい「私立学校」の形式をとらず、周辺のタイ人子女にもオープンな公立小学校 (Rong Rian Prachaban) として設立された。同校修了後、トンはサコンナコン県に移り小学4年、中学1年を学んだ。同地ではベトナム人の漢方薬販売団体の世話になり、漢方薬の販売を手伝った。再びウドンに戻って中学2年生、3年生半ばまで名門ウドンピタヤースクーン校に学んだ。ウドンで彼の指導をしたのは、ベトナム人の青年党員で10歳年長の Triam であった。中学2年のトンと、中学5年生の Triam は、市内の仏寺の僧坊に住み込んだ。当時ウドンのベトナム人は警察に注視され、しばしば逮捕者を出していた。僧坊は安全な場所であるとともに同宿のシャム人学生たちに宣伝することができる場所でもあった。党組織の指示で Triam が印刷し学内で配布した共産主義の宣伝ビラを持ち帰った学生の父親 (軍人) が学校に訴えたので、Triam は退学処分を受け、警察の逮捕を逃れるためにバンコクに逃亡した。トンも、寺を出て Nong Bua のベトナム人シンパの家や同じく Nong Bua にあったシャム共産党東北部地方委員会 (当時の長は Le Manh Trinh) 事務所を転々とした。同事務所の秘密文書は近くの竹の茂みの中に隠されていたが、偶々鉄道新設工事のためその竹の茂みが切倒され、文書が露見し、同事務所は警察の手入を受けた。ウドンにいられなくなったトンは中学3年生半ばで学業を放棄して、1934年末頃に Triam の後を追ってバンコクに逃げ、Le Manh Trinh がバンコクの黄橋媽宮の裏に借りていた家 (シャム共産党本部) に住み込み、使い走りをするようになった。シャムの学校に入学するためには、転校手続きが必要となるが、逃げてきたために必要書類を請求できず、規則が緩い華校で学ぶこととし、Triam がタイ語教師として潜り込んでいた、共産党系の華僑中学 (在サパーン・ヨッセー、共産党員黄躍寰が教師) に入学した。しかし、同校に在学1年余で、1936年4月19日に Le Manh Trinh 宅で開かれた会議の

見張り役をやらされている時に逮捕された。トンは年少で会議とは何の関係もなかったのだが（筆者のトン・チェームシーインタビュー及び前掲“Samphat Thong Chaemsri” (B)）。華僑中学は海南人の学校で、1936年当時の校長は、海南人で左翼の符開先である。符開先は上海の持志大学、中国公学大学に学び1934年に法学士号を得た（『華僑日報』1937.2.27）。同校は後に、同じく海南人の学校育民学校に吸収された。

170 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009.

171 この時、Triam に別れた後、トンが次に彼に会ったのは太平洋戦争中であった。その時、Triam はバンコクの日本大使館で働いていた。彼は日本軍に依存した反仏独立運動に加わるようにトンに勧めたが、トンは自分が参加しているタイ共産党の方針とは異なるので、自分は、もう政治運動は止めたと嘘を言って断った。トンは、Triam は愛国者として行動していたものと考えている。Triam は戦後北ベトナムに帰国した（同上インタビュー）。

172 Thai Mai 29 Dec. 1937.

173 Interview with Thong Chaemsri in Nakhon Pathom, 5 Sept. 2009, 前掲 Eiji Murashima, Kan Muang Chin Sayam, P. 115. その後 Hung (Xom) はベトナムに帰国し、党の対外連絡部の局長クラスになったという (Sukprida Phanomyong, Ho CHI MINH, Ming Mit, Bangkok, 2006, PP. 123-124.)

174 NAT (2) So. Ro. 0201.89/4.

175 NAT Ko. To. 39/30.

176 前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, pp. 185-188.

177 前掲 Son Tung, Con Nguoi va Con Duong, p. 194.

178 Interview with Nguyễn Thanh Văn in Tha Bo district, Nongkhai, 24 Aug. 2004.